

ハーディ研究

日本ハーディ協会会報 No. 49

The Bulletin of the Thomas Hardy Society of Japan

日本
ハー
ディ
協会
会報

49

特別寄稿論文

コテッジの世紀末

——『ダーバヴィル家のテス』を中心とするハーディ小説における

ヴァナキュラーな建築物の表象

大石和欣 1

シンポジウム 2022 「ハーディと進化論——実りある研究にむけて」

スペンサーの進化社会理論と政治思想

藤田 祐 39

Thomas Hardy's Evolution Amongst the Poets:

Hardy's "Harmony of View with Darwin" and Shelley

NEIL ADDISON 57

小説家ハーディの終焉再考——ハーディとジェイムズ——

清宮倫子 83

Synopses of the Articles Written in Japanese

111

書評

ホームページへの書評不掲載の事情

日本ハーディ協会会長 金子幸男 117

日本ハーディ協会会則

119

二〇二三

日本ハーディ協会

2023

[特別寄稿論文]

コテッジの世紀末

——『ダーバヴィル家のテス』を中心とする

ハーディ小説におけるヴァナキュラーな建築物の表象

大石 和 欣

1 コテッジの温もり——雨宿りする「ホームレス」のテス

雨中の放浪

時折出席するイギリス湖水地方での夏季学会の後、1 日だけ自分一人でトレッキングを楽しむべく滞在を延長したことがあった。だが、その日はあいにく雨模様となってしまった。迷うところもあったが、宿にこもって本を読む気にもならなかったので、十分な雨対策をしたつもりで出かけた。

ところが途中で左折する道を一本早まってしまった。地図を確認しようとも風雨で煽られてうまく広げられずに焦ってしまい、再確認しないまま正しい道だと即断してしまったのだ。次の交差点で間違えに気づいたが、その時にはすでに6キロメートルほど歩いた後だった。やむを得ずそのまま歩き続け、変更した目的地に昼前に到着したが、今度は急激に気温が下がりはじめた。避難する場所もないし、手足もかじかみ、夏とはいえ身体の危険さえ感じた。さらに不吉なことに雨宿りした木の裏側に羊の死体を見てしまったので、昼食もそこそこに雨が降りしきるなか引き返した。

全身ずぶ濡れになりながら帰る道すがら思い浮かべていたのは、『ダーバヴィル家のテス』(1891 年、以下『テス』)において、荒涼たる大地を冬雨のなかフrintコムーアッシュの農場に向かって孤独に歩き続けているテスの姿だった。実家からの助けも、夫エンジェル・クレアおよびその家族の救いも期待できず、行き場を失った彼女に残された唯一の選択肢が、かつて同

僚だったマリアンが働くフrintコムーアッシュのグロービー農場だった。元々は負担の少ない短期雇用の仕事を探していたテスだったが、結局は重い肉体労働の職を転々とする羽目に陥っていた。冬を越すための「仕事」と「家」を確保することが急務となった彼女は、痩せた大地が横たわるフrintコムーアッシュに重労働を覚悟のうえで赴くしかなかった。

追いつめられたテスの状況は、瀕死の重症を負った雉の群れと遭遇する挿話を通して印象的に語られる。空が白みはじめる頃、木立の中から聞こえる物音に不安を憶えたテスだが、それらが前日に猟銃に撃たれて重症を負いながらも、林の中に一晚逃げ隠れた雉たちが力尽きて止っていた木枝から落ち、地上で悶え苦しむ呻き声や羽音だったと知る。「苦しむ同類の気持ちを想いはかる魂の衝動」を抑えきれないテスは、彼らを安楽死させてやる(Hardy, Tess 298)。ハーディにありがちな凶兆を示す挿話だが、この時点でのテスは、自分が惨めさの極みに陥っているものの、重症を負い、血を流し、激痛に苦しんでいる雉たちとは異なり、まだ生きて糧を確保する両手があることに感謝すべきだと思い直す。先の見えない「真つ暗闇の世界」で一人嘆いていた自分を恥ずかしくさえ感じる。そこまで彼女を追いつめたのは「節操のない人間社会の法」であり、雉たちが苦悶の末に死ぬ「自然に根差した法」ではないと考えたのだ(298)。

だが、語り手のアイロニーがここに潜んでいる。雉たちを殺めたのは狩猟者たちであり、自然の法ではない。そして彼らを包み込むように生命体・非生命体を司る「内在意志(the Immanent Will)」の摂理は、雨となってテスの心身を浸食する「あからさまで、実直で、容赦のない荒天」(300)と同じく、非情にも、そして無作為的に悲運な出来事を引き起こしていく。夕闇が迫り来る頃、フrintコムーアッシュの村はずれに到着したテスは、硬質で痩せこけた土地が広がる風景に浸透する憂鬱な気分を胸の内に感じながら、半ば無意識的に自分の運命を操る法理を感じ取る。「ほかにどうしようもなかったろう。ここにやってくるのは宿命だったのだ(hither she was doomed to come)」(301)。語り手の第三者的説明というより、自由間接話法を通した

テスの内面の声として響いているように読める。“doomed”という言葉がいつも不気味な重低音を響かせる。

それゆえにこそ村はずれにある一軒家の軒下に雨宿りをしながら、テスは壁の内側から伝わる暖炉の温もりを背中や手、頬に感じ、自分がそうした家屋が包みこんでいる家庭の団欒や愛情から排除された身の上であることを痛切に感じるのである。どうしようもない過去の穢れと不運に翻弄され、未来が見えない自分の惨めな現在の姿に直面する。それは実存的な自己認識とも言うべき瞬間である。

村の入り口には一軒のコテッジがあり、破風が道路に突きでていた。一晩の宿を頼みこむまえにその軒下に立って、周囲に夕闇が濃く迫ってくるのをじっと見ていた。

「私がエンジェル・クレア夫人だなんて誰が思うかしら。」とテスは呟いた。

背中や肩に壁の温もりが伝わってきた。破風のすぐ内側に家の暖炉があることに思い当たった。暖炉の熱がレンガを通して外にまで伝わってきたのだ。心地よく慰めをもたらしてくれるその表面に手のひらを当てて温め、こぬか雨に濡れて赤くなった頬も押し当てた。その壁だけが彼女にとって唯一の友人のように思えてきた。そこから離れたい気がまるでせず、一晩中そのまま止まっていようと思えばできる気がした。

コテッジの中では住人たちが1日の労働を終えて集まり、会話をしているのが聞こえてきた。夕食のお皿がカチャカチャいう音も聞こえる。
(301)

暖炉の温もりは農業労働者の日常生活において「心地よく慰めをもたらしてくれる (comforting)」ものであり、コテッジ生活の中心にあるべきものだ。ハーディの『緑樹の木陰で』(1872 年)において描かれているコテッジも、「有徳の家庭の集団肖像画」として提示されている (金子 94)。自然環境は劣悪ながらここでのコテッジも基本的には同じである。

しかし、この小説において主人公はそんな家庭の憩いの場からは除外されている。夫エンジェルからも拒絶され、もはやこの世に「^{ホーム}家」と呼べるも

のがないテスにとって、雨宿りをしながらレンガを通してその家庭愛の温もりを間接的に味わうことだけが許された行為である。タルボット農場での日々とフrintコムーアッシュでの労働生活も痛ましいほど対照的である。村外れのコテッジの場面は、辛すぎる過去から現在に至るまでの放浪と未来の闇の狭間であって、かすかに平和な家庭の団欒を感知する瞬間である。

女性としても、そして人間としても、社会的存在としても居場所を喪失した状態は、「無^{ホームレス}宿」であると同時に「絶^{ホープレス}望」でもある。「エンジェル・クレア夫人」というアイデンティティにしがみつこうにも、もはやそれは実体のない絵空事でしかない。体裁も保つことさえできていない。テスが直面しているのは実存的な問題ではあるが、「内在意志」の^{ことわり}理^{ことわり}が自分を支配していることを半ば意識している点で、実存主義がいう「不安」以上に深い深淵を抱えている。孤立無縁の状況は、超越的な摂理に沿って自らの存在が自己定義としても、社会的存在としても、意味が崩壊する危殆に瀕しているという自覚を鋭利に研ぎ澄ませていく。その自意識は、暖炉の温もりを伝える外壁のみが唯一心を安らかにできる「友」のような存在という描写によっていっそう際立って感じられる。

「〈世紀〉の遺骸」が広がる風景

この直後出迎えにやってきたマリアンと遭遇することで、テスは孤独な状況から救われることになるが、それは一時的なものにすぎない。長年住み慣れたコテッジから追放された家族の生贄として、最終的にはアレック・ダーバヴィルの手に落ちていく。荒涼としたフrintコムーアッシュの風景を前にしたテスが目にしていたもの、あるいは見えないにしても自らの宿命とともに無意識的に感じていたのは、世紀末のイギリスが抱えていたより大きな状況なのかもしれない。

『テス』にも克明に記録されている通り、この時代、農業労働者たちは職や高賃金等を求めて移動を加速していた。海外からの廉価な穀物や食肉の輸入が引き起こした農業不況は、土地を手放し都市へと流入する人びとの数も

増加させていった。とすれば団欒のコテッジから排除されたテスという肖像画は、この時代の農村生活が直面していた「衰退」という歴史的な運命と連動していることになる。断末魔の苦しみにもがき苦しむ雫たちもまた、テスという個人の命運ばかりか、そうした衰退の中で死相を浮かべていた農村共同体の姿を示唆しているのではないだろうか。

雨が激しく降りしきる湖水地方を彷徨いながら、私は頭のなかでそんなことを反芻していた。やっとのことで辿り着いた麓にある唯一のカフェに入って、濡れそぼった上着を脱ぎ、小降りになりはじめた雨と夕刻の陰を帯びはじめた空の光を見つめながら、ふと「〔世紀の〕納骨堂 (crypt)」という言葉葉を思い起こしていた。ハーディの詩「暗闇のなかの大ツグミ」(“The Darkling Thrush”)(Hardy, *Hardy* 68)において、「曇った天蓋」に適用されたメタファーである。世紀末以降の湖水地方はナショナル・トラストや人びとの人為的努力によって現在ある風景が再生・維持されてきたため、コテッジも村落も、自分がある観光客用の施設も当たり前のように存続している。しかし、テスや大ツグミの前に広がっていた風景は、水分が抜け落ちて縮みあがり、風が葬送歌を奏でる「〈世紀〉の遺骸 (The Century's corpse)」と形容されている通りだったのではないだろうか。

聖書におけるルツのイメージを想起させながら、大ツグミは暗闇のなかで「〈世紀〉の遺骸」を前に唄い続ける。

この風景のやつれ果てた相貌は
〈世紀〉の遺骸が墓場からはみ出したかのよう
曇った天蓋は〈世紀〉の納骨堂
風は〈世紀〉の死を悼む哀歌
生命の起源と誕生に与かる太古からの脈動は
固く乾いて縮みあがり
大地の生氣はことごとく
冷めきったかのよう。僕と同じく。
(「暗闇のなかの大ツグミ」9-16行)

冷たくなった「大地の生氣」が支配する「太古からの脈動」は、『テス』が横たわり逮捕されるストーンヘンジの石へとつながっていよう。「僕」という主体をテスの「私」に置き換えてみれば、この詩が内包している「〈世紀〉の死を悼む哀歌」が、フリントコムーアッシュの荒地にも響いていた可能性が出てくる。本論では、コテッジの団欒生活の背後にある歴史的な文脈とその意味を捉えた上で、そこから締め出されたままフリントコムーアッシュの荒地を見つめるテスの存在の時代的意味を解きほぐしてみたい。

「建築家の目とペンを備えた名工」

石工、そして建築士として訓練を受け、その実力も認知されていたハーディの小説には様々な建物が精緻に描写されている。石工といっても、イギリスでは石材を用いてコテッジはもちろんのこと、教会や聖堂などの大きな公共建築物を建設することも多く、建設業者としての実力と実績が常に問われる職業である。父親が数人の働き手を雇用する石工兼建設業者だったハーディは、石材と石材建築に関する知識と技術を修得し、経験と実績を積み重ねていた(Hardy, *Life* 8)。さらに父親の下を離れ、建築家アーサー・ブロムフィールドの門下として修行を重ね、王立イギリス建築士協会(the Royal Institute of British Architects)や建築協会(the Architectural Association)から表彰されるまでにいたる。実力は折り紙付きである。

その後文筆に専念するまでは主に教会修復事業に関わっていたが、「ウェセックス小説群」には農家(farmer's house)やマナー・ハウス、教会や旅籠などが頻出し、つぶさに描写されているし、『日陰者ジュード』ではクライストミンスターのゴシック建築群が建築批評家の眼差しで審美的意味を担って描かれている。雑誌『建設業者』はハーディの追悼記事において、「建築家の目とペンを備えた名工」として彼の作品を讃えている(Blunden 35に引用)。

それを踏まえてティモシー・ハンズは、建築家としてのキャリアがハーディの文学作品に与えた影響の大きさが内容と様式の両方に明らかであるこ

とを指摘し、とりわけ様式についてはゴシック建築理論に影響を受けていると論じる。「機能の重要性について強調し、結果としてとりわけ均一性あるいは模倣よりも独創性を強調することは、ゴシック建築の理論家たちの見方の中心にあるものであった」(102)。不規則性や個性はゴシック様式について常に言われる様式的特徴であり、同時にそれが審美的美徳でもあった。それは『日陰者ジュード』におけるクライストミンスターのゴシック建築群の賛美に十分反映されている。一方でその反対に、画一的な古典様式やジョージアン様式、あるいはそれに準じた箱型の近代的建築様式は、批判的に描かれる傾向がある。『テス』においてアレック・ダーバヴィルが住む家や彼がテスと同棲する家が近代的な様式で建てられ、否定的な意味を付与されているのもその例である。

しかしながら、「建築家の目とペンを備えた名工」ハーディの小説においてより重要なのは、農村に住む人びとにとっての生活空間であるコテッジではないだろうか。これまでハーディ小説におけるコテッジ表象はあまり注目を浴びてこなかった。そもそもコテッジは建築批評において看過されがちな建物である。多くはその土地の気候や生活環境に合わせ、土地の材料を用いて建てられるヴァナキュラーな建物であるため、様式として統一性がないからである。生活や風土と一体化し、非装飾的で単純かつ日常的な空間・構造物であるのもその理由であろう。だが逆に言えば、農村生活に根をおろして地面から生えたようなヴァナキュラーなコテッジを描かずして「ウェセックス物語」の語りは存立しえないことになる。

例外的にハーディ小説におけるコテッジ表象に着目した研究の一つが、金子幸男の「田舎に向かう 19 世紀のイングリッシュネス——カントリーハウスとコテッジにみるホームの変遷」である。金子は 19 世紀の絵画表象と主にハーディ小説に表象されたカントリー・ハウスやコテッジを比較考察しながら、その意義を「イングリッシュネス」という概念と結び合わせながら解きほぐしている。1840 年代を舞台にした『緑樹の木陰で』におけるコテッジ表象が、「秩序、平和、安定、連続、伝統、清潔、儉約、勤勉、チャリティ、

神聖」を意味するとし、それが「中流階級の願望が投影した」理想空間として立ち現れている一方で、現実のコテッジは過酷な労働生活の汗と埃にまみれ、無秩序と不衛生、不節操と怠惰、不謹慎を具現した生活空間である可能性を指摘した(99)。その事例として『テス』におけるダービーフィールド家のコテッジ生活を取り上げ、仕事や家事を怠けてジョンとジョーンの夫婦がともに酒場に入り浸りがちで、「表現しようがない陰鬱さ」(Hardy, *Tess* 28)が支配している点で「コテッジ・イングリッシュネスという言葉当てはめるのは難しい」と論じる(金子 99)。

たしかにたくさんの子供を育てる「混乱と混濁 (muck and muddle)」に掻き乱されたダービーフィールド一家の「怠慢な家 (shiftless house)」(Hardy, *Tess* 29, 30)は、ピクチャレスクなコテッジ表象の対極に位置づけられるべきものである。それはレイモンド・ウィリアムズがジョージ・クラブの『村』などを例にあげながら論じる「対抗牧歌」の範疇に加えるべきものであろう(Williams 13-34)。だが、『テス』において注目すべき点は、それに加えてダービーフィールド一家が最終的にこのコテッジ生活から追放され、テスもまたエンジェル・クレアとのコテッジにおける幸福で勤勉な結婚生活を剥奪され、宿なしの放浪生活を余儀なくされてしまう点である。むしろウィリアムズが後期ウェセックス小説群について述べた「変化への関心」を掘り下げ、「慣習と教育、仕事と理念、場所愛と変化の経験との間にある境界領土」(197)がコテッジ表象にどう集約されているかを分析すべきではないだろうか。フロントコム・アッシュの村外れにあるコテッジは平和や安定、伝統や慣習、神聖さを留めた古き良きイングランドの具現であるが、そこから排除されているテスを対置するようにして描いている意味を考えると、この時代のコテッジ表象の意味が浮かび上がってくる。伝統と変化の緊張関係、確執と対照こそが歴史的状況を示唆している可能性がある。

その点でハーディ小説における「家屋 (house) と家 (home)」について論じたドナルド・ストーンの議論は示唆的である。学術誌『19 世紀フィクション』における論文の中で、『緑樹の木陰で』を含む初期小説におけるコテッ

ジや農家屋が、変容していく社会から孤絶した「継続と安定の世界」である
とすれば、後期小説に特徴的なのは主人公がそこから「孤立 (alienation)」
し、「漂流 (dislocation)」していく点であると指摘した (Stone 295, 298)。そ
こにチョーサーが描いた中世的な厭世観を宿した巡礼者のイメージを読み込
みつつ、彼らとは異なり、「ハーディの後期小説の主人公には巡礼として赴
く天上的な安息地がない。彼らは出発する家もなければ、帰り着く家もない」
(Stone 298) と論じている。

しかしながら、1870 年代から 90 年代にかけてのイングランド農村地帯、
とりわけ小説の舞台の中心地となるドーセットシャーにおける「家屋 (house)
と家 (home)」について、ストーンは考察や分析を行っていない。チョーサー
の言葉を借りてテスには「家もなく、荒野だけしかない」と言うこともでき
るが (Stone 298)、具体的な「家屋」および「家」としてのコテッジの歴史
状況を吟味した上で、産業化の加速とともに経済・社会構造が変化し、流動
化を加速していく生活環境によって、平和と安寧の場、変化する時代からの
避難地としての「家」が失われ、実存的不安を反映した「荒野」が風景とし
て浮上する過程を論じるべきではないだろうか。

農村生活の「裂け目」

かつてミシェル・ド・セルトーは『日常実践のポイエティーク』の中で、
「場所」を失い、流動性を増し、多様な「彷徨」が蔓延る都市について、そ
の「日常的な営みは、「下の方 (down)」から、可視性がそこでとだえてしま
うところからはじま」り、「話 (イストワール) は地面から、人びとの足ど
りとともににはじまる」(202, 209) と、日常性のポイエティークが「歩く者
たち (Wandersmänner)」の身体を通して語られる可能性を謳った。そしてそ
の歩く軌跡が、都市の表層に築かれた秩序が覆い隠す「裂け目」(225) を浮
かび上がらせることを開示した。

この日常実践としてのポイエティークは、都市に限定されるべきもので
もないだろう。『テス』におけるダービーフィールド家、とりわけ主人公の

テスが経験するように、イギリス 19 世紀末の地方共同体においても、人び
とは職と家を求めて移動を繰り返し、不安に苛まされる生活が広がっていた。
「話 (イストワール) は地面から、人びとの足どりとともににはじまる」ので
あり、テスの歩く軌跡と彼女が触知するヴァナキュラーなコテッジから、イ
ングランドの農村、とりわけハーディ小説の舞台となるイングランド南西地
域が包摂していたひび割れ、さらにいえば世紀末のイギリスが抱えていた「裂
け目」が浮かび上がってくると想定できないだろうか。

ハーディと世紀末については日本でも先行研究がある。森松健介は、詩人
ウィリアム・ワーズワスが典型的に提示する、ロマン主義的な自然との交感
を通した神秘と恵み、美と理想の確立がもはや維持できない、もしくは喪失
された状況として世紀末を定義しながら、マシュー・アーノルドの悲観的自
然観を経てアーサー・シモンズの神秘主義・象徴主義へと至る系譜にハー
ディを位置づける (森松)。一方で、井出弘之は、宇宙の始源が回復不可能
であるという絶望的認識に基づく、「深遠なる謎 (エニグマ)」との遭遇に
ハーディの世紀末的意義を見出そうとする (井出)。

しかし、ハーディの世紀末性はより日常的であり、かつ歴史的なものとし
て解釈すべきものに思われる。小説内のコテッジ表象に着目することで、コ
テッジという「家」の喪失が、「やつれ果てた」大地上の彷徨へと至り、「〈世
紀〉の遺骸」、「〈世紀〉の納骨堂」との遭遇をもたらすという語りを仮説と
して想定することはできないだろうか。それは崩れ始めた共同体・家族から
追放された流民ゆえの社会的存在、さらには実存的人間としての自己認識と
いうことになる。かすかに外壁を通して暖炉の温もりを感じることが許され
ている点で、救済の可能性がゼロというわけではないが、「無^{ホームレス}宿」であるが
ゆえに「絶^{ホープレス}望」な状況に陥ったテスの放浪は、世紀末の農村地域社会にお
いて「伝統と変化」の^{あわい}間に開いた「裂け目」を語っていることにならない
だろうか。内在意志に支配された生にとって、実存主義が提示する「不安」
よりもはるかに不透明で、不確定で、ときに不条理でさえあるがゆえに、魂
が萎縮した生気なき不安がそこに胚胎されていると思われる。「暖かな」希

望を肌を感じつつも、そこから排除されていることを認識することで、喪失したものを想起し、同時に「〈世紀〉の遺骸」が自らを取り巻いている状況を痛切に意識することになるのではないだろうか。

2 コテッジの系譜学

ヴァナキュラーな構造物

ハーディの小説におけるコテッジ表象は、ロマン主義勃興以後支配的になっていく牧歌的家庭空間というイメージを継承している一方で、後期小説においては、レイモンド・ウィリアムズが「対抗牧歌」と呼んだそれとは対置される過酷な労働環境を背景にした、反牧歌的で劣悪な掘建小屋住まいとして顕現することが多い。それはコテッジの語源や文学的・表象的系譜から言って正統なものである。

コテッジ (“cottage”) の語源を調べるべく『オックスフォード英語大辞典 (OED)』を繙いてみても、15 世紀以降の用例しか掲載されていない。実際の語源は古英語の「農奴が住む家」を意味する “cot” であり、ゲルマン語、古ノルド語、古フランス語のいずれもほぼ同様の発音で呼称されていた。OED での用例は九世紀末から見られるが、実際にはもっと以前から使用されていたと考えるのが妥当であろう。そこに住む農奴を “cotter” と呼ぶようになるが、これも確認できる範囲の用例としてはノルマン征服後に作成されたドゥームズデイ・ブック (1085 ～) が初出となっている。この “cot” にフランス語の接尾辞 “age” がくっついてできたのが “cottage” である。日本では「コテージ」と表記することが多いが、避暑地の別荘に特化して用いることが多い。誤解をさけるために本論では「コテッジ」と原語の発音に近い表記を採用することで区別することにしたい。

建築史においてコテッジは近代になるまで特筆されることはおろか、留意されることすらなかったと言って良い。あまりにもベーシックな生活空間であり、技術的にも、様式的にも統一された基準があるわけではなく、それぞれの地方の気候条件や生活様式、とりわけ確保できる基本的な材料によって、

建て方や様式が決まってくるからである。和辻哲郎の概念を借りれば「風土」に従って、葺き屋根の場合もあれば、瓦を用いる場合もあるし、土壁だったり、石壁だったり、あるいは丸太を組むなど入手可能な土着の、つまり建築用語で言うヴァナキュラーな材料を用いて修理・再築しやすいように建てられる。一番重要なのは住民が最低限の快適な生活を確保できる空間として建てられていることである。設計士・建築家の意匠などは入りこむことがないのが正統なコテッジであり、そこに住む住人たちが社会のなかで底辺に位置づけられがちのように、コテッジは卑賤な建物として見なされがちであった。

その意味で、フリードリヒ・エンゲルスが『イギリスにおける労働者階級の状態』（ドイツ語初版 1845 年）のなかで、産業都市の労働者たちが住む不衛生で換気の悪い家屋を、ドイツ語の “Hütte” ではなく、英語の “cottage” を用いて形容しているのは妥当であろう。明らかにドイツの民家とは異なる劣悪かつ小さな掘立小屋のようなイメージである。農村部においても 19 世紀末までは基本的にコテッジの社会的布置は変わっていない。ハーディの小説内に描かれている質素なコテッジは、都市の労働者の家ほど劣悪ではないにしても、語源的にも、また歴史的にも正統に粗末であると言えよう。

ロマン主義時代のコテッジ表象

その一方で、コテッジは「牧歌」の伝統の中で理想化される傾向もある。とくに 18 世紀末、ロマン主義時代にその傾向は強まっていく。ハーディの初期小説におけるコテッジ表象はその影響も受けている。ロマン主義研究者も看過しているが、サミュエル・テイラー・コウルリッジの「アイオロスの豎琴 (“The Eolian Harp”）」(1795 年; Coleridge 1: 231) は典型と言える。妻となるサラと婚約時代に訪れた際の経験をインスピレーションにしているが、新婚時代の設定としてサマセットシャーのコテッジを賛美したものだ。

物想いにひたるサラよ。君の柔らかな頬がこうして
僕の腕に寄りかかる。甘美で心安らかなことこのうえない。
僕たちのコテッジの横に腰掛けて。白い花を咲かせたジャスミンや

幅広の葉を茂らせたキンバイカが生い茂るコテッジの脇に。(1-4 行)

原詩の中でコウルリッジはコテッジを“cot”と記しているのだが、もともとの表記と意味を理解してのことだと思われる。当時フランス革命を擁護する急進主義に肩入れし、反体制的な主張を繰り返していた立場からすれば、卑賤な農民たちが住んでいたコテッジこそ人間として本質的かつ理想的な居住空間ということになる。その点コウルリッジとワーズワスの共著である『抒情歌謡集』の序文においてワーズワスが記した方針、つまり「慎ましやかな鄙びた生活」、「平凡な生活における出来事や状況を選び取」って、「実際に人びとが用いる言葉」を用いて語るという原則と合致していると言っている (Wordsworth, *Lyrical Ballads* 743, 750)。ワーズワス自身もその方針に沿うように、自伝的叙事詩『序曲』第1巻において、幼年時代を過ごした湖水地方に点在するコテッジが、「素朴ながら上品な表情」を浮かべて畑の中に「美しく」佇んでいる景色を讃え、そこに「聖地、保護域、愛の場」を見出している (Wordsworth, *The Prelude* 1: 531, 533, 535)。

1780年代から世紀転換期にかけて一世を風靡したピクチャレスクの美学においても、コテッジは「野趣」を醸し出す重要な要素であり、審美的価値を担う要素として描かれていく。ギルピンはピクチャレスクについてのエッセイの中で、スケッチをする際に気に入らないコテッジは排除して描くことを推奨するが (Gilpin 68)、実際のところコテッジはその素朴でヴァナキュラーな特質ゆえに、ピクチャレスクな自然景観に不可欠なアイテムとなっていく。造園家のハンフリー・レプトンは風景式庭園の理論を展開した際に、土地を専有化することで反美的な要素を排除し、ピクチャレスクな価値を持ったコテッジとその庭を構築する方法を説いている (Repton 233)。1804年にコテッジ論を著したエドモンド・バーテルは、風情があり、多様性に富むコテッジを領地内に建てることで、ピクチャレスクで、「あらゆる意味で心地よい (pleasing)」景観を確立することができるだけでなく、労働者の「勤勉」意欲を高める効果があり、地主として有意義な「チャリティ」であると

論じる (Bartell 103, 106-07)。労働者たちの平和な居住空間とそれが構成するピクチャレスクな農村風景を創造するこの「コテッジ・システム」によって、イングランドは「楽園 (a paradise)」へと生まれ変わるとさえる (102)。トマス・ゲインズボロやジョン・コンスタブルの風景画にも、コテッジは牧歌的な風景の重要要素として描き込まれていく。

コテッジの暗い側面

しかしながら、その一方でレイモンド・ウィリアムズが「対抗牧歌」と呼んだ世界においてコテッジは、戦争、囲い込み、災厄などにより衰退する農村共同体、つまり牧歌的な空間が暗転した農村生活を象徴する舞台装置としても機能していくことも確かである。ワーズワスの「廃屋」や「マイケル」はロマン主義的反牧歌の代表例である。

「廃屋」では貧しいが平和だったコテッジでの家庭生活が瓦解していく様子を、雑草にのみこまれていくコテッジの表象を通して語っている。不作や病気によって出口の見えない困窮生活に陥った夫は、家族を救うべく給付金と引き換えに軍隊に入隊し、行方知れずとなる。悲嘆にくれる妻は家事にも、子供の養育にも身が入らず、結果として質素ながら清潔だったコテッジも汚れはじめ、いつのまにか住人のいない雑草に覆われた廃屋と化していく。

「マイケル」は湖水地方の質朴な羊飼一家の悲哀を綴った反牧歌である。独立自営農民として牧畜業を生業にしていたマイケルは、経営に行き詰まり、やむなく息子のルークを都会に働きに出すが、期待に反してルークは罪を犯して国外逃亡せざるをえなくなってしまう。マイケルは失意のまま死に、妻もまもなく後を追うことで、守ったはずの土地は他人の手に渡ってしまうことになる。ジョージ・クラップの『村』やジョン・クレアの詩群もまた、陰惨極まりない農民たちの生活や共同体の周縁にいる労働者たちの疎外感や不安を反映している点で「対抗牧歌」であり、そこには平和な家族愛とは無縁なコテッジが描かれる。

同じことは絵画領域についても言える。ゲインズボロやコンスタブルの絵

にコテッジやそこに住む人びとが描かれることはあってもピクチャレスクの美学の域を抜け出すことはない。しかしながら、ジョージ・モーランドの絵画においてはよりリアリスティックなコテッジ生活が描写されている。コテッジはみすばらしく、汚れが目立ち、粗雑な造りである。住人たちの服装も粗末で垢染みているし、屋外の労働と生活苦で手も荒れ、皺の多い顔には暗い表情が浮かんでいる。明るい図柄がないわけではないが、それでも『田舎のコテッジ』のように不毛な土壤に囲まれて生活をしている人びとの姿を美化することなく描いたり、『小作人とロバのいる冬の風景』や『宿屋の外で——冬』のように、雪に埋もれた荒涼とした自然風景のなかに労働する住人やテスのように一晩の宿を求めようとする人の姿を描いている冷徹な眼差しが印象的である。ジョン・バレルはそんなモーランドの絵画を、ピクチャレスクな風景画が排除したり、隠蔽したり、あるいは美化する「風景画の暗い側面」を、描出しているとして評価している（Barrell 89-129）。

ハーディの後期小説には対抗牧歌やモーランドの絵画に特徴的な反美的なコテッジ、もしくは牧歌的なコテッジに対するアイロニーに満ちた視線が目立つようになるが、後述するようにそこに19世紀末のイングランド農村地域が抱えていた問題が影を落としていると考えられる。

3 初期小説におけるコテッジ表象——『狂乱の群れを離れて』

ゲイブリエル・オークの小屋

ハーディの初期小説には『緑樹の木陰で』のように牧歌的なコテッジ表象が印象に残るが、流動化しつつある共同体において伝統や平和を具現しつつ、後期小説が提示するアイロニーを胚胎しているコテッジが、『狂乱の群れを離れて』（1874年）に描かれている。『帰郷』（1878年）におけるクリム・ヨーブライトのコテッジも、「家」に類するものからの隔絶を示唆している点で参照可能な表象だが（Stone 297）、『狂乱の群れを離れて』には、コテッジだけではなく、より広い「家」を考えた時も、ハーディにとってのヴァナキュ

ラーな建築が持つ意味を複層的に照射してくれる事例が考察できる。

最初に私たちが遭遇するのが、主人公のゲイブリエル・オークが起居する可動式の羊飼小屋である。「小さなアララト山の上に着地したノアの方舟」のようだと形容される「小屋（hut）」は、小さな車輪がついていて、そのため床が地上から 30 センチほどの高さにあり、出産期に羊飼いが夜通し羊たちを看護できるように、牧場に運びこんで住み込むための臨時の住処である（Hardy, *Far from the Madding Crowd* 11）。最近流行りのトレーラーハウスを想起すればおよその構造は理解できよう。独立心旺盛なオークは全財産を投じて牧畜業を始めたところであり、羊の代金は信用貸付だったため、羊の数を増やすことは必須だった。小屋は必要な休息を取るのには十分快適であり、羊飼いと必要不可欠な道具・器具が備わっている。大地の上で羊とともに生き残るための空間であり、風雨を凌ぎ、暖を取る避難地でありながら、自然の威力に抵抗し、それを超克するための出城でもある。

今こうして見えるようになってみると、小屋の中は居心地よく、魅力的であった。ロウソクの灯火に加えて、緋色の炎がかすかに暖炉に燈っていて、光が届く範囲のあらゆるものにぬくもりのある色を映し出し、器具や道具の上には愉樂を連想させる光を投げかけていた。片隅には羊飼いの杖、片側の棚には羊に手術や治療を施す際に用いる簡単な調合薬が入った瓶や缶が並べられていた。主にはワインの酒精剤、テレペンチン、タール、酸化マグネシウムの粉末、生姜、ひまし油である。その片隅には三角形の棚もあり、パンやベーコン、チーズ、下においた瓶からエールあるいはサイダーを飲むコップも置いてある。食べ物の横には横笛もある。先ごろ退屈凌ぎにこの孤独な守人が吹いていたやつだ。住居には船室の明かりとりのような引戸式になった木製の丸穴があり、通気口の役割を果たしている。（11）

なんの変哲もない臨時のひとま一間だけの羊飼小屋だが、住む人間にとって快適な空間であることが強調されている。暖炉の炎が「ぬくもりのある（genial）色」を全体に投げかけているためばかりではない。牧畜業に不可欠な手術や看護に必要な薬剤や杖が備えられ、食料・飲料を含めた日常生活用品もあ

り、さらには羊飼いが孤独を慰める横笛も置いてある生活のための空間だからである。最初は「小屋 (hut)」と紹介されていたものが、「住居 (house)」と形容され直されているのは、羊飼いにあってそれが自らの存立を定義づけている空間だからである。ハイデガー的な表現をすれば、そうした生活に関わる物を置き、使用することは小屋に「気遣う」ことであり、そしてそれによってまた住む人も存在を定義されることになる実存的な空間である。丸い通気口はそんな主人公の実存が、大地、そして天地とつながっていることも示唆している。小さな移動式の小屋であっても、いやそれだからこそ、羊飼いにあっては自らの実存を照らしてくれる、「性に合った、こころ安らかな (genial)」空間なのである。

しかしながら、運命のいたずらによってオークはこの実存的住処から追い出されてしまう。羊追い用に飼っていた犬があらうことか羊たちを崖から追い落とし殺してしまったのだ。未来に希望をもち、大胆にもバスシーバにプロポーズまでしたオークであったが、この一件でバスシーバとの結婚の希望はもちろん、全財産を一旦失ってしまう。経済的自立の基盤を失った彼は雇われ労働者として各地を渡り歩き、やがて伯父の農場を相続したバスシーバのもとに流れ着くことになる。

「世界の光」を燈すコテッジ

バスシーバの納屋が火事になった際に通りかかったゲイブリエル・オークは、消火作業に尽力したことでコガン家に間借りしながらバスシーバに雇用されることとなる。だが、やがてそこを出たオークが一軒のコテッジに住みだすと、今度はそこが彼にとっての実存的空間として出現する。そのことに私たち読者はバスシーバの目を通して気付かされる。

夫フランク・トロイとファニー・ロビンの過去の関係について疑心暗鬼に捉われ、「孤独感と惨めな気持ち」に打ちひしがれたバスシーバは、誰かに相談したい気持ちを抑えきれなくなる。その時心に浮かんだのは、人生経験が豊かで教訓を学んでいるオークであった (256)。空気が湿り気を帯び、宵

闇が深まる中、彼のコテッジを訪れることにする。泥棒や覗き見を心配する必要もない暮らしのため、コテッジの錠戸は閉ざれていないし、ブラインドやカーテンもかかっていない。そのため一階の窓の一つから光が漏れ、室内でオークがロウソクを灯して本を読んでいる姿が見える。遅い時間になっていることに気づいたオークは本を閉じ、ロウソクを消して二階の寝室に赴こうとしている。

その光景を前にしてバスシーバの決心はぐらつき、戸を叩いて彼に相談するのをやめてしまう。自分の惨めな気持ちを彼にさらすのは自尊心が許さないし、ファニーが死んだ状況の詳細について彼からきき出す気にもなくなってしまう。やがて二階の寝室に上がったオークはベッド脇で祈りを捧げる。精神的安息と充足感に満ちたその姿は、不実な男との結婚によって未来が見えなくなり、流砂に足元をすくわれたように不安定になってしまった自分の存在をバスシーバに痛切に自覚させる。

帰る家のない流民のように彼女は土手の脇から立ち去れずにいた。充足感があの小さな棲み家から周囲に広がっているように見え、心を和らげ、惹きつけられたかのようなだったが、自分にそれが欠落しているのは哀しかった。ゲイブリエルは二階に姿を現すと、窓際のベンチに灯りを置いた。そうして跪いて祈りを捧げた。その様子は、この時世界の底が抜けたように動揺している自分の存在とはあまりに対照的で、とても見続けることなんてできなかった。自分に降りかかった厄難とそんなふうに折り合いをつけるなんてことは自分にはできなかった。最初の一步を踏み出したときと同じように、浮薄で落ち着きのない旋律に合わせて、音楽が止むまで踊り続けなくてはならないのだ。張り裂けそうな胸を抱えて彼女はもと来た道に戻り、自分の家に入ってしまった。(258)

オークが最初に住んでいた羊飼いの小屋が快適かつ通気口によって周囲に広がる大地、そして自然世界と繋がっていたように、このコテッジも窓はあっても錠戸やカーテンによって遮られることなく周囲の畑や環境と連続している。そして祈禱をすることで、ハイデガーが言うようにまさに天地の間に人

間によって立つ実存的空間として存立していることが示唆されている。講演「建てること、住むこと、考えること」において、ハイデガーは建てる (bauen) ことは住まう (buan) ことであり、それは天空の下、大地の上、神的なるものの前に留まり、死すべきものとして人間が生きることであって、この四者の会域が「折り重なった襞」として生まれるのが「建てられた＝住まわれた家」であると論じた (ハイデガー 12, 14-17)。バスシーバが感知した「充足感」は オークのコテッジがまさに天地神人が折り重なった空間として顕れ出たものと言える。そして羊飼いの小屋の時と同じくここでも暖かな灯火が見られる。祈りを捧げる オークが窓際のベンチに置いた灯りは、ウィリアム・ホルマン・ハントが『世界の光』(1851-54 年)において描いたイエス・キリストが掲げる燈のように、宵闇の中で周囲にその暖かな光を押し広げ、不安に駆られたバスシーバの心にも届く。

しかしながら、コテッジに確保されている安寧の空間をバスシーバがこの時点で共有することはない。彼女はそれが自分に欠落しているのを痛感してしまうのだ。ゲイブリエル・オークの祈りと安寧は、浮ついているがゆえに揺れ動き続ける自分の生き方をバスシーバに実感させ、そこから諦めとともに距離を取ることになる。

オークのコテッジとバスシーバの関係は、『テス』におけるフrint コムーアッシュのコテッジとテスの関係をいくつかの点で予兆していると同時に、後者においてはより不幸で、実存的な意味が深まったものとなっている。フランク・トロイはバスシーバからまだ去ってはいないが、その心は子どもとともに自らが死に追いやったファニー・ロビンに捕らわれたままであり、やがて体とともに一時的ではあるが妻の元から離れていく。孤立し、苦悩するバスシーバにとって オークが灯すコテッジの燈は慰めであり、救済でもあるが、少なくともこの時点で彼女はそれを共有することを自ら拒み、自らが選び取った不幸な生活へと戻っていく。とはいえ、最終的に二人が結ばれることで燈が示唆する救済は成就する。

一方、『テス』においては、やがてエンジェルとの再会を果たすものの、

冒頭で引用した箇所においてテスはバスシーバ以上に孤立し、経済的にも追い詰められた状態に置かれている。暖かな暖炉を囲むコテッジの団欒もテスに一縷の救いが残されていることを示唆しつつも、壁を通してしかその温もりを触知できない彼女にとって、もはやエンジェルとの日常的な結婚生活の再生は叶わぬものであることも暗示されている。少なくとも『狂乱の群れを離れて』の自然界には、「〈世紀末〉の遺骸」が横たわる「やつれ果てた」大地は登場しない。内在意志に支配された流浪とひび割れた人間関係と共同体は、コテッジ生活のロマンスによって回収されていく。

高貴な剪毛納屋

ゲイブリエル・オークのコテッジがバスシーバにとっての「世界の光」という擬似宗教的な意味を担っている点に、既成の宗教に対するハーディ特有の批判的なまなざしを読み取ることは可能であろう。そのことは、キリスト教的な枠組みにおける造物主の摂理、あるいはオイコノミアに置き換えて、非情なまでの「内在意志」を森羅万象の背後に措定している彼の世界観にも表れている。『ケンブリッジ必携 トマス・ハーディ』に所収された宗教に関する論文では、「ときおりハーディは、キリスト教がもはや信じられないうさんくさい伝説に基づいた一時しのぎで無益な教義であるとして描写していることがある」と総括している (Schweik 57)。石工職人として父親から仕込まれ、十分な資格を持った建築家として教会補修もこなしていたハーディは、『日陰者ジュード』に見られるように教会建築や宗教建築そのものに対しては比較的穏当な描写が多いが、『テス』においては上述のように教会の代わりにコテッジのようなヴァナキュラーな建築物が宗教的意味を担っている。

『狂乱の群れを離れて』において興味深いのは、羊の毛を刈る剪毛納屋が形と同時にその歴史性ゆえに教会に比するものとして描写されている点である。

剪毛納屋ととりあえず呼ばれている巨大な納屋で彼らは羊の毛を刈っていた。平面図で見ると交差廊を配した教会にも似ている。構造からいっても近くにある教区教会に匹敵するのだが、その古さの点でも引けをとっていなかった。この納屋が中世の修道院建築群の一端を構成していたのかどうか誰も知らないようだった。周囲にはそうしたものが残っていないからだ。両脇にある巨大な出入り口は、刈り入れた小麦束をこれ以上積みられないほど高く積んだ荷馬車が通れるくらいに間口が高く、支柱の間には広く無造作に切り出された石で分厚くなったゴシック・アーチがかけられている。その素朴さそのものが威容を生み出す源泉なのだが、実際に建立された際により装飾的な要素が試みられたために目立たなくなっている。うす黒い薄皮で覆われた栗木材を用いた屋根は、垂木の間を水平方向に、あるいは湾曲して、あるいは斜向かいに太い木材で補強されたり、つなげられたりして、材質の豊かさにおいては今の教会の9割よりは優っているし、デザインにおいてははるかに高貴である。左右の壁にはまたぐようにして控え壁が並んで付されていて、それぞれの間に深い影を落としている。壁にはランセット窓が穿たれていて、大きさや程度において審美性と通気機能の双方の必要性を適正にかつしっかりと満たしていた。(125-26)

建築家らしい視点で専門用語を並べて剪毛納屋の構造的特徴を詳細に説明している。ドーセットシャーを中心とするイギリス南西部に、実際に石材製のゴシック・アーチを備え、交差廊もあるような剪毛納屋があるのかどうか確認できていない。だが、建築物の表象については比較的忠実に実在のものを描写するハーディが、実際に目撃した同様の建物を基にしている可能性は高い。だとすれば非常に特殊な構造であり、修道院建築として使われていたと推定したくなるのも頷ける。ゴシック・アーチやランセット窓、控え壁などがなく、あるいは石材を用いていないにしても、剪毛納屋は構造的には教会と類似している点が多い。私が確認している範囲では、軽井沢にあるウィリアム・メレル・ヴォーリズ設計のユニオン・チャーチは、木造建築だがイギリスやアメリカの牧羊地域で見かける剪毛納屋の構造をそのまま教会に応用したものと思われる。全体の構造もさることながら、全体を支える支柱や屋根の梁の使い方がそっくりである。

何よりも重要なのは、そうした構造だけではなく、歴史的観点からも、剪毛納屋が教区教会と比肩すべきものであり、羊飼いを含めた農業労働者や地域の人びとにとって日常生活風景の一部である点である。コテッジがそれぞれの地域の風土や生活文化に即して、その土地の材料を用いて造られたヴァナキュラーな建築物であるように、ゴシック・アーチやランセット窓を持った納屋は稀にしても、農作業に関わる納屋もまた建築史的に注目されることのない素朴かつ簡素なヴァナキュラーな構造物である。農業地域の生活を小説に描きこむ元建築家ハーディの眼差しは、鋭くこうした土着的建築物が備えている美德と特質を、キリスト教が代替できない各地域の生活や労働の文化に本質的なものとして埋め込んでいる。

ウェザベリー農場異論

コテッジや納屋のような構造物ばかりではなく、バスシーバ・エヴァーディーンが住むウェザベリー農場の居館についても、ハーディはリアリズムの筆致で風土の一部として描き出している。「灰白色を帯びた、初期古典ルネサンスに属する建物」と形容されるこの館は、「硬質の石材から切り出し、縦溝を施した柱で前面を飾り、屋根の上には対になった煙突がところどころでアーチによって連結され、切妻や手を入れて変えることができない特徴にはゴシック様式に属する痕跡をとどめている」(63-64)。正面から見ると「全体的に眠たげな雰囲気」が支配している一方で、「裏側の外構^{ファサード}えほうが対照的に活気づいた状態」にあるのは、建物が農業目的に順応して、「家の生命原理が内部から丸ごと表と裏をひっくり返して反対に向いてしまった」ためであると説明されている(64)。

ハーディ小説内に登場する建物やロケーションについて詳細に検証したハーマン・リーは、このウェザベリー農場について、ドーセットシャーのパドルタウンにあるウォーターストン・マナーであると特定していて、その後の研究でも有力な候補地となっている(Lea 34, xxi; Bullen 20)。そのためであろうが、インターネット情報でもウォーターストン・マナーがウェザベ

リー農場のモデルであると明記されている（Waterston Manor）。リーがそう特定した理由は、小説が連載されていた『コーンヒル・マガジン』の第 30 巻 177 号（1874 年 9 月号）に、ウォーターストン・マナーの南面に酷似した館の版画が掲載されているからである（Hardy, “Chapter 39” 257）。場面は第 39 章の冒頭にあたるところで、バスシーバとフランク・トロイがキャスターブリッジの市場からウェザベリー農場へ戻る途上、ファニー・ロビンと遭遇する場面である。

しかし、引用したウェザベリー農場の外観はウォーターストン・マナーには必ずしも当てはまらない。むしろ地理的にそれと近接し、パドルタウンを中心にして反対側に位置しているアセルハンプトンこそモデルではないかと考える。たしかにウォーターストン・マナーも硬質の石材を用いて灰白色を帯びているし、ゴシック様式の痕跡もある点では合致している。修復が重ねられているが、全体としては古典ルネサンス様式に属する点も同じである。両者の元々の所有者は同じマーティン家であり、アセルハンプトンを建ててそちらを居館としたためにウォーターストン・マナーは手放すことにした経緯もあって、類似点があっても不思議はない。

だが、ウェザベリー農場の描写にはウォーターストン・マナーにそぐわない点もある。その一つが「縦溝を施した柱で前面」を飾っている点である。西側の正面玄関にあたるところにも、また『コーンヒル・マガジン』での連載に掲載された挿絵となった南面にあたるところにも、柱の装飾はあっても、英語で “fluted” と形容される細かな襷のように彫られた縦溝はない。また煙突はあるが、対になってアーチを構成しているものはないし、丸型単一煙突も少ない。さらに、南面も東面も正面玄関とっていい構えを示してはいるが、「対照的に活気づいた状態」というほどではないし、均等な建物構造であるため、「家の生命原理が内部から丸ごと表と裏をひっくり返して反対に向いてしまった」というわけでもない。

一方のアセルハンプトンには、南面翼を構成する前面に、縦溝が施された太い柱が印象的な姿を天に伸ばしている。煙突にもアーチ型になったものが

ある。また、19 世紀半ばまでは実際に農業を主要目的とする農家屋として機能していたために、家の裏側が出入りのための主要玄関として機能していたことも事実である。そして何よりも、アセルハンプトンのウェブサイトに記載されているように、その後の修復作業に際してハーディの父親が工事を請け負い、まだ 10 代だったハーディ自身もその手伝いをしていた（Athelhampton）。世紀末にド・フォンテーヌ家が新しい所有者になった後も、ハーディは一家と親密な関係を築き、ここをよく訪れていたようである。こちらがウェザベリー農場のモデルであるというウェブサイトの主張は十分に納得できる。

コテッジほど土着的な建築物というわけではないが、この地方で取れる硬質の石材を用い、この地域の風土に沿って大地に根差した農業を営んでいた家として、そして年月とともに修復を重ねながらその大地から生えたように風景に溶けこんだ建物として、ウェザベリー農場も、アセルハンプトンも、そしてウォーターストン・マナーもまた、この地域の日常生活によって育まれた土着的な建物である点は同じである。問題はこれらの建築物が、ハーディの後期小説において地方共同体のどのような「裂け目」を示唆するものへと変容しているかである。

4 流動化する農村共同体

高まる移動熱

『狂乱の群れを離れて』において見た小屋やコテッジ、納屋、マナー・ハウスは大地に根を張り、ときに周囲を照らし出す「光」として、あるいは風土や生活を具現した語り部、あるいは地域の歴史の目撃者として存在している。テスが雨宿りするフリントコム・アッシュのコテッジも同じように救済の可能性を秘めた家として出現している。

しかしながら、テスが運命に翻弄されるように、『テス』におけるコテッジのすべてが泰然として時空を超越しているわけではないし、それを包摂している村落共同体もまた時代の影響から免れているわけでもない。

小説の第 51 章では、この時代に借地農民たちが移動を繰り返し、結果として従来の持続的な村落共同体生活が瓦解していく様子が詳細に記されている。旧暦の「御告げの祝日」にあたる 3 月 25 日を境に、地主と「働き手 (work-folk)」と呼ばれる農民たちは新たな契約を交わすしきたりであり、村に留まりたくない借地人は出ていくことになっていた (Hardy, *Tess* 372)。「移動熱」はダービーフィールド家のいたマーロット村でも年々高まり、その前夜は引越しする人びとでごった返すことになる (372)。テスの母親が子供の頃は大半の家庭が同じ農場で働き、同じ家に住み続けていたが、毎年のように移動を求める欲求は高まっていったと記されている。より良い職場・生活環境を求めての脱出であるはずだが、「約束の地」を求めてのエジプト脱出は、流れ着いた場所が今度はエジプトになり、さらに新たな「約束の地」を探すことになるからである。

「御告げの祝日」は地主側にとっても望ましくない農民との契約更新を拒否できる日でもある。ダービーフィールド家は父親ジョンの一代限りでの借地・借家契約であり、テスの不行跡もあり、また地主側でも新たな「働き手」の家族を住まわせる広い住居が必要でもあり、契約更新は果たされず、一家は長年住んでいたコテッジから追い出されてしまう。住処も生活の糧を得る手段も失った一家を救うために、テスはアレックス・ダーバヴィルの欲望に身を犠牲にすることになるのだが、小説の語りはダービーフィールド家のような共同体の一角を担う行商人などの階層が消え去ることで、伝統的な村落の生活様式もまた死滅せざるをえないことを示唆する。単なる住民の入れ替わりですむ話ではなく、コテッジ生活の変化が農村共同体の変容をそのまま反映していることになる。

この辺りではこんなふうに農場から農場へと毎年のように移動するケースが増加していた。テスの母親が子供だった頃、マーロット近辺の大半の耕作農民たちは一つの農場で一生暮らしていた。その親もその祖父もまたそこが終の住処であった。しかしながら近頃は毎年移動する欲求が高まっていた。〈中略〉

しかしながら、農村生活にいいよ顕著になりつつある変化のすべてがまると農業不振に起因しているわけではなかった。人口減少も進んでいたのである。以前村には農業労働者と隣り合わせに、明らかに彼らよりも上の階層に属した、興味深いより知識を備えた人びとが住んでいた。テスの父親や母親が属していた階層である。大工、鍛冶屋、靴屋、行商人、そのほか農業労働者とは異なる雑多な職業従事者が含まれている。テスの父親のように終身借地権者だったり、あるいは世襲借地権者、ときには自由保有者であるゆえに、ある一貫した目的と振る舞いを共同体内で保っていた。だが、長期にわたる地権保有期間が切れてしまうと、コテッジが同じような借地人に再度付与されることはめったになく、もし地主農家がどうしても必要ではないということになればその家屋はたいがいの場合には取り壊されてしまうのだった。農耕地で直接農作業に従事しないコテッジ住人は疎まれてしまい、ある職人一家が追放されると今度は別の職人一家が生業を維持できなくなり、その後を追う羽目に陥ることになる。こうした家族は過去において農村生活の背骨ともいべき役割を果たしており、村の伝承の貯蔵庫であったが、大きな地方都市へと避難場所を求めざるをえなかった。統計家たちが「農村人口の都市への流出傾向」と冗談めいて呼んでいる過程は、実際のところ機械の力で無理やり水が坂の下から上へと流れていくような不自然なものである。(372-73)

伝統的な共同体が変容していく状況が簡潔に、しかし丹念に説明されている。たしかに農村部ではアイルランド移民のように移動しながら季節労働を請け負う人びともいたし、テスも同じ状況に置かれて短期雇用労働者として移動せざるをえなかった (Howkins 97-100)。だが、ここで述べられているのは共同体の中間層であり、慣習や伝統を維持する要の役割を果たしていた職人・商人階級が農地から追放されることで、農村の共同体そのものも背骨を失い、いわば液状化現象を辿っていく現象である。とはいえ「移動熱」と称されるこの状況が、どれほどイングランドの農村地域に当てはまる歴史的現象かについては精査する必要がある。地域差が大きいため普遍的に見られるわけではないからだ。

農業不況時代のドーセットシャー

1846 年の穀物法廃止は自由貿易を確立することになったが、安価な原材料を仕入れ、無関税で綿製品等を海外市場に輸出するマンチェスターやリーズなどの新興工業都市には利点があるものだったが、農村地域は北米などの海外からの安価な農産物が国内市場に流れ込むことで大きな打撃を受けることになった。とくに冷蔵庫の発明による廉価な食肉の輸入が 1870 年頃はじまって以後は畜産業にも甚大な影響が及ぶことになっていく。機械化と効率化によって競争力を高める努力が可能な大土地所有者もいた一方で、大麦・小麦、羊毛あるいは畜産のみに依拠していた小規模農家や小作農たちは土地を放棄せざるをえなくなった。農村の衰微については誇張すべきではないが、1870 年から 1914 年にかけてイングランド南部・中部の州、湖水地方やヨークシャーでは 30 ～ 45%、なかには 46%以上の土地が人手のかかる農業用地から牧草地へと放棄されていった (Dauntton 44-47; Thompson 308-09; Perren 7-30; Fletcher 412-32)。同時期に農業従事者数もイングランド全体で顕著に減少している (Howkins 171-74)。

ドーセットシャーの第一次産業の構成については、農作地域と畜産・牧羊地域が入り混じり、地質や風土にも違いがあるまだら模様を形成している。たしかにハーディ小説内に見られる共同体の描写については貧困化の度合いは高くない。そのため、ドーセットシャーにおける農業不況を認めない議論がある (Millgate 217; Williams 208; Widdowson 422)。国勢調査の人口データを確認しても、たしかにドーセットシャー全体として大きな人口減少は見られない。

しかしながら、イングランド全体の第一次産業とその市場が輸入産物によって大きく動揺し、雇用形態や労働人口の都市への流出が顕著になっている時代状況が、ドーセットシャーの農業形態に対して何らかの影響を及ぼした可能性は否定できない。貧困化が深刻でない、あるいは人口減少が見られないからといって、農村共同体の変容が進まなかったことにはならないし、都市への労働人口移動がなかったことにもならない。1861 年から 1901 年に

かけてのイングランド南部・東部の農村地域における人口移動を分析したジョージ・R・ボイヤーの研究によれば、工業地域との賃金格差は大きく、高賃金を求めて血縁や同郷といったネットワークを通して農村地域から工業地域へ人口が流出していることが判明した (Boyer 191-215)。

表1A イングランド南西部・南部カウンティとロンドンとの賃金格差 1861 年～1901 年
(1861 年の賃金格差を 100 とした場合)

	1861 年	1881 年	1901 年
ウィルトシャー	100	86.8	86.7
ドーセットシャー	100	102.7	99.5
デヴォンシャー	100	74.6	75.1
コーンウォール	100	69.0	76.3
サマセットシャー	100	78.6	81.4
サセックス	100	96.5	91.2

表 1B イングランド広域地域ごとのロンドンとの賃金格差 1861 年～1901 年
(1861 年の賃金格差を 100 とした場合)

	1861 年	1881 年	1901 年
南 東 部	100	105.4	95.9
南 部	100	90.3	92.3
東 部	100	102.4	110.4
南 西 部	100	79.4	81.1
農 村 中 東 部	100	108.1	105.9

ボイヤーの統計データからの抜粋 (Boyer 210)

ドーセットシャー自体に関して言えば、表 1A にあるように、ロンドンとの賃金格差は 1861 年時点のものを 100 とした場合に 1881 年では 102.7 とプ

ラスであり、1901 年時点でも 99.5 と開きがほとんどない。だが、隣接するウィルトシャー、デヴォンシャー、サマセットシャー、コーンウォールではいずれも、1881 年、1901 年と賃金格差が大きく開いたままである。また、この数値はドーセットシャー全体のものであり、個別の地域においてはウィルトシャーやデヴォンシャーなどの周辺地域と同じくロンドンや工業都市との賃金格差が開いていた可能性もある。そうした地域から都市への人口流出があった可能性は排除できない。イングランド南西部全体で見れば、表 1B に明らかなように賃金格差は非常に大きい。賃金格差が小さいサセックスにおいても、農業人口減少と、その結果としての宅地開発のための農地の売却が世紀転換期以降進んでいったことがわかっている（Howkins 213-14）。

ドーセットシャーの労働者たち

『テス』に克明に記された「移動熱」による農村共同体の流動化が現実生じていたことはハーディ自身が証言している。1883 年 7 月に『ロングマン・マガジン』に掲載されたエッセイ「ドーセットシャーの労働者」において、対象とする人びとの様子やコテッジでの生活状況を詳細に記録している。実際に目撃した通りの記述として信頼しうるものだと考えられる。ドーセットシャーの労働者たちは、実のところ「田吾作（Hodge）」として統括されがちな悲惨で愚鈍な輩というわけではなく、それぞれ個性を持ち、喜怒哀楽の感情があり、幸福な時間も有していることをまず指摘し、その上でコテッジでの生活が変容していく様子を綴っていく（Lowman 57）。

所有権あるいは永住権を持っている農民の方が借家住まいの労働者の住まいよりも室内が汚れていたり、メンテナンスが行き届いていない場合もあるため、コテッジの外観だけでは生活の様子を判断できないが、それでも「自分の屋根を確かなものとしているコテッジの住民ほど快適に、あるいは心安らかにいられる人間はいない」と断言する（57）。たしかに衛生的なほうが健康には良いに違いないが、それでも「自分たちの地位が不確かで不安定であると感じているからこそ貧しい農民たちの憂いは生じてしまう」（57）。だからこそバーンズが謳った野ネズミのように、地主を怒らせて追い出され

てしまわないように、威圧されてビクビクと暮らしていると指摘する。

同時に以前の農村に見られたような「剽軽さを含む素朴さ」を特徴とする男たちや人づれしていない謙虚な女性たちは消滅し、工業都市の労働者と変わらないようになってしまっているとも言う（64）。ロマンティックな鑑賞者を愉しませるために、彼らがいつまでも愚鈍で時代遅れなままではいるわけではない。視野を広げ、考え方を刷新し、より自由になっている（65）。

しかし、その自由さは移動をする自由でもあり、年毎の契約による雇用と住居手当が一般化し、人びとは遊牧民のように流動的な生活を繰り返し、ときには都市へと流出していくことになる。定住者の減少あるいは消滅は農村共同体、農業そのものの変質へと必然的に帰結してしまう。

人口減少が現在進行していて、まさに赤信号が点っている地域もある。村には農業に従事する住民に加えて、明らかに彼らよりも上の階層に属した、興味深いより知識を備えた人びとがいた。鍛冶屋、大工、靴屋、小さな行商人、商店主（2、3 斤のパンや 1kg 程度のロウソク、ブランドー・ボトル、いくつかの菓子盛り、3、4 個のタワシやフライパンなどを在庫にして売っている）、生まれた家との結びつきという本能的感覚以外に特別な理由もなくそこに住み続けている農民以外のあらゆる雑多な職業の人たちである。こうした家族の多くが以前は終身借地権を持っていて、自分たちの住むコテッジを自前で建てたりしていた。亡くなったり、不動産貸借の期限が切れてしまっても、週単位あるいは月単位の借家・借地人として同じ場所に喜んで留まっていた。だが、限られた博愛精神を備えた地主を別にすれば、地主たちの方針としては全体的に、農場で働かないしがない借家人を認めず、借地期限が切れたコテッジをひとつひとつ引き倒してしまい、農場で雇用する人びとが使用するのに十分な数のコテッジだけしか残さないというものであった。農村生活の背骨を構成していた住民たちは自治都市へと避難しなくてはならなかった。統計学者たちが「農村人口が大都市へ向かう傾向」と呼称する過程は、実際はむりやり坂の下から上に水を流すようなものである。（72）

すでに引用した『テス』の第 51 章での「移動熱」を説明した箇所と酷似している。一部が異なっているが、全体としては同一と言っている。執筆中

に「ドーセットシャーの労働者」のこの箇所を小説内に改編して組み込んだ自己剽窃であるのは間違いない。つまり、引用した『テス』の一節は、ドーセットシャーの実際を目撃した記録を小説内に組み込んであるルポルタージュ的なリアリズム言説ということになる。実際『テス』の 1895 年版に付した序文において、ハーディは「風景や古遺物、古い建物に関心のある読者」に向けて、「この小説および同類の小説において描かれたこうした背景は現実にあるものを土台にしている」と述べている (Hardy, *Tess* 6)。ハーディ小説の舞台となるウェセックスを「リアリスティックに表象された白日夢の州」と述べたサイモン・ガトレルの言葉は、そんなルポルタージュ的リアリズムを包摂した虚構の特徴を言い得て妙である (Gatrell 30-31)。

5 コテッジの流動化と理想化

避難地の喪失

かつてウォルター・ホートンは、ヴィクトリア朝における「家」^{ホーム}が、「近代生活の不安からの避難地、魂が切望するものが実現する（想像の中ではない）平和な場所、そして商業精神と批判精神が破壊しようと脅す道徳的・精神的価値の避難地、それゆえに聖なる場所、寺院」(Houghton 343) であると指摘したが、上述のような農民および非農業従事者たちが住む「家」が流動化し、彼らの構成する共同体が液状化している状況は、そうした安寧と安息を確約してくれる場としての「家」^{ホーム}が失われていったことを意味する。ハーディの初期小説に描かれていた商業精神から道徳的・精神的価値を守ってくれる避難地、「世界の光」を放つコテッジが生き残ることが難しくなっていたのである。

言い換えれば、「変容する世界における島々」とも言うべき「継続と安定の世界」が『狂乱の群れから遠く離れて』のコテッジや農家屋だとすれば、後期小説に特徴的なのは主人公の「孤立 (alienation) と漂流 (dislocation)」である (Stone 295, 298)。ドナルド・ストーンはそれに加えて中世的な厭世観を宿した巡礼者のイメージを重ね合わせて比較考察する。

ハーディの後期小説に見られるのは、孤立と漂流という近代精神ばかりではなく、厭世観 (*contemptus mundi*) という中世的感觉である。ヘンチャード、テス、ジュード、スー・ブライドヘッドは、「この世は悲哀の詰まった街道であり / 我々は行き来を繰り返している巡礼に過ぎない」というチョーサーの言葉が当てはまる放浪者なのだ。チョーサーにとって同じように彼らにとっても、「彼女には家もなく、荒野だけしかない」。だが、チョーサーの巡礼者たちとは異なり、ハーディの後期小説の主人公には巡礼として赴く天上的な安息地がない。彼らは出発する家もなければ、帰り着く家もないのだ。(Stone 298)

『カンタベリー物語』の「騎士の話」や詩「真実」の一節を組み込みながら、中世的な厭世観を引き合いに出すことで、ハーディの物語が文学的伝統の上に築かれていることを示唆している。だが、より直接的には「ドーセットシャーの労働者」で記録した農村共同体の流動化が、後期小説の主人公たちの漂流が具現しているものと言うべきではないだろうか。「家もなく、荒野だけしかない」のは、巡礼の出発地と目的地としてではなく、生活の場、平和と安寧、安息の場、産業化の加速とともに経済的・社会的構造が変化し、流動化を加速していく社会環境からの避難地としての「家」を失った実存的人間が見る風景として考えるべきではないだろうか。

すでに述べたように、農業不況の影響については例外的事例も少なくないが、イングランド全体としては衰微の兆候は顕著なものであったのは確かである。農産物の価格下落、借地人の離農と土地価値の下落によって、人口流出とそれに伴う耕作地の放棄あるいは売却は増加傾向にあったし、また貴族などの伝統的な地主たちの多くも経済的苦境に立たされ、彼らもまた土地を邸宅ともども手放していった点にもそれは表れている (Thompson 303, 317-22; Canadine 88-138; Howkins 138-65)。イギリスの政治と経済は旧来の田園コミュニティや農業と手を切り、都市の産業資本と金融資本を中心にして動き出していた。コテッジの歴史を俯瞰したウッドフォードは、この時代に地主と借家・借地人である農民が直面した経済的苦境について、アーンリー

卿の証言を引用している。

事業精神はしだいに弱々しいものになっていった。地主たちは救済の手を差し伸べる力を失っていたし、農民たちも回復力がなかった。〈中略〉長引く不況がコストのかかる土地改良の障害になってしまっていた。排水は実際には行われなくなっていた。地主も借家・借地人も潰えていく収入で生活をやりくりするので精一杯だったのだ。(Woodforde 55に引用)

農業労働者たちの「孤立と漂流」は実は地主たちにとっての危機的状況を示唆するものでもあり、それは地主と借地農たちの相互依存関係に担保された伝統的共同体の構造と農業経営に亀裂が入っていたことを意味する。「家もなく、荒野だけしかない」流浪生活は、そうした農村日常世界の「裂け目」を曝け出す軌跡なのだ。

ピクチャレスクなコテッジ再び

皮肉なことにこの時代になって田園の「ピクチャレスクな」コテッジと風景が再び審美的な価値と同時に理想化されていくことは興味深い。1850年代から60年代にかけてマイルズ・バーケット・フォスターは古き良き田園共同体を水彩画の中で表象したが、その弟子であったヘレン・アリングムもまた「イングリッシュな牧歌」をキャンバス上に表象していく。だがステレオタイプ化された牧歌的な農村は、イングランドの現実からは衰微し、人びとの想像のなかで膨張していくことになる。現実の農民たちの多くは、定住の場、安息の場としてのコテッジを喪失し、将来に不安を抱えながら移動し続ける生活に身を預けるしかなくなっていた。だからこそ、田園生活が「イングリッシュなもの」という「ロマンティックな神話」が形成され、流布する逆説が成立することになっていった(Marsh; 大石 1-6)。農業の政治的・経済的重要性と農業と田園の文化的重要性の間には「反比例」の関係がある(Williams 248)。世紀転換期に政党横断的に推進された帰農運動は、都市に流

れこんできた人びとにより健康的な生活・仕事環境を提供することで、こうしたピクチャレスクなコテッジと農村風景への関心再燃、再創造と連動している(大石 173-88)。

帰農運動を推進したもう一つの要因は、高賃金を目指して工業地域に労働者として流出していった、あるいは都市に事務員や職人として流れ込んでいった人びともまた不安定かつ不健康な生活環境に陥っていたからである。とりわけ世紀末における都市の貧困化およびスラム化もまた深刻さを増していた。ガレス・ステッドマン・ジョーンズが『ロンドン流民』で詳細に検証したように、都市開発に伴うスラムの破壊は貧民から住処を奪い、生活環境はますます悪化の一途を辿ることになった(Jones)。1890年代にロンドン市による労働者階級のための郊外集合住宅建設は進むが、不況による雇用の不安定化はそうした生活環境を確保できない人びとをいっそう窮地に陥れることになる。19世紀半ばに美德として掲げられた「自助」の精神がもはやどうやっても機能しない社会・経済環境が、人びとを取り囲み、追い込んでいた状態が恒常化していた。

つまるところ、^{ホームレス}家を失い、^{ホープレス}希望も失った流民は、農村地域ばかりではなく、都市においても顕著に増加していたことになる。自由主義経済の進展は、農村共同体はもちろん、都市の生活も流動化していくことになり、結果として安息の地としての家を彼らから剥奪していくことになったと考えられる。それは同時に、地主階級や教会を中心にした社会構造が瓦解し、貧富格差という「裂け目」が、救貧法に基づいた公的扶助によっても、篤志協会やセツルメント運動といった私的扶助によってももはや取り繕うことができなくなっていったことを示す兆候でもあった。世紀末に社会不安として広がる退化論もこうした生活環境の変容にも部分的に起因している。

世紀末のコテッジ

農村における借地農や借地職人たちが「^{ホーム}家」を喪失し、「漂流」生活へと追放されていく過程も、従来の農村共同体が崩れ始めていくひび割れを示

唆している。その亀裂に彼らの不安が憑依している。実存主義的不安とも言えるが、ハーディはそれを非情な内在意志が支配する世界に置くことで、より深遠で不条理さえ含んだ命運が生みだす不安に置換している。初期小説におけるコテッジ表象がロマン主義的ユートピアあるいはピクチャレスクの楽園を再生し、休息と安寧、家庭愛や希望、実存的不安からの救済を示唆するとすれば、『テス』はその楽園の喪失と漂流を主題に据え換えている。

ドーセットシャーに限って言えば、すべてのコテッジが瓦解したわけではなく、まだら模様の生産形態にあった大地の上で家庭的で、希望を宿したコテッジ生活も継続していた。だが、そうした避難地としてのコテッジと対照的に、そこから切り離されて漂流する人間の姿も増加していた。それを世紀末の根源的存在として表象することで、ハーディは流民化が加速するイギリス社会全体に広がっていった「裂け目」を抉り出してみせたのである。コテッジの灯火や暖炉の温もりという古き田園の遺物を保留しつつ、それを剥奪され、地方あるいは都市を放浪し続けなくてはならない孤立した人間の軌跡を描くことで、そうした世紀末のひび割れ、さらにはそれが喚起する不安を浮かびあがらせているのである。

コテッジの暖炉の温もりを壁越しに感じながらも、そこから排除されて雨に濡れているテスの姿は、そうした世紀末の裂け目を覗き見ている存在である。フrintコムーアッシュにおける「〈世紀末〉の遺骸」が墓場と化した世界には、人びとがホームレス化し、ホープレス化していくイングランドの社会風景が顕現しているのである。

引用文献表

Athelhampton. <https://www.athelhampton.com/hardyatathelhampton>. Accessed on 1 July 2023.
Barrell, John. *Dark Side of the Landscape: The Rural Poor in English Painting 1730-1840*. Cambridge UP, 1980.

Bartell, Edmund. *Hints for Picturesque Improvements in Ornamented Cottages, and Their Scenery: Including Some Observations on the Labourer and His Cottage: In Three Essays : Illustrated by Sketches*. J. Taylor, Architectural Library, 1804
Blunden, Edmund. *Thomas Hardy*. 1942: Macmillan, 1967.
Boumelha, Penny. “The Patriarchy of Class: *Under the Greenwood Tree, Far from the Madding Crowd, The Woodlanders*.” *Cambridge Companion*, edited by Kramer, pp. 130-44.
Boyer, George R. “Labour Migration in Southern and Eastern England, 1861-1901.” *European Review of Economic History*, 1. 2 (1997), pp. 191-215. <https://www.jstor.org/stable/41377808>
Briggs, Samantha. “Thomas Hardy and the Evolution of Architecture.” *AA Files* 67 (2013), pp. 29-33.
Bullen, J. B. *Thomas Hardy: The World of His Novels*. Frances Lincoln, 2013.
Cannadine, David. *The Decline and Fall of the British Aristocracy*. Vintage, 1999.
Coleridge, Samuel Taylor. *Poetical Works*. Edited by J. C. C. Mays. 3 vols (6 parts). Princeton UP, 2001.
Colls, Robert and Philip Dodd. *Englishness: Politics and Culture 1880-1920*. 1986; Bloomsbury, 2014.
Dauntun, Martin. *Wealth and Welfare: An Economic and Social History of Britain 1851-1951*. Oxford UP, 2007.
Fletcher, T. W. “The Great Depression of English Agriculture, 1873-1896.” *Economic Historical Review*, 2nd series. 13 (1961), pp. 412-32.
Fowles, John, and Jo Draper. *Thomas Hardy's England*. Little, Brown and Co., 1984.
Gatrell, Simon. “Wessex.” *Cambridge Companion*, edited by Kramer, pp. 19-37.
Gilpin, William. *Three Essays: On Picturesque Beauty; On Picturesque Travel; And on Sketching Landscape: To Which is Added a Poem, on Landscape Painting*. R. Blamire, 1792.
Hands, Timothy. “Hardy's Architecture: A General Perspective and a Personal View.” *The*

Achievement of Thomas Hardy, edited by Phillip Mallett, Macmillan, 2000, pp. 95-104.

Hardy, Thomas. *Tess of the d'Urbervilles*. Edited by Juliet Grindle and Simon Gatrell. Oxford UP, 2005.

———. *Far from the Madding Crowd*. Edited by Rosemarie Morgan, Penguin, 2003.

———. “Chapter 39.” *Cornhill Magazine* 30. 177 (1874), pp. 257-80.

———. *The Life of Thomas Hardy: 1840-1928*. St Martin's Press, 1962.

———. *Thomas Hardy*. Edited by Samuel Hynes. Oxford UP, 1984.

Houghton, Walter E. *The Victorian Frame of Mind, 1830-1870*. Yale UP, 1957.

Howkins, Alun. *Reshaping Rural England: A Social History, 1850-1925*. Routledge, 1991.

Jones, Gareth Stedman. *Outcast London: A Study in the Relationship Between Classes in Victorian Society*. Verso, 2014.

Kramer, Dale, editor. *The Cambridge Companion to Thomas Hardy*. Cambridge UP, 1999.

Lea, Hermann. *Thomas Hardy's Wessex*. Macmillan, 1913.

Lowman, Roger, editor. *Thomas Hardy's The Dorsetshire Labourer and Wessex*. Edwin Mellen Press, 2005.

Marsh, Jan. *Back to the Land: The Pastoral Impulse in England, from 1880 to 1924*. Quartet Books, 1982.

Millgate, Michael. *Thomas Hardy: His Career as a Novelist*. 1971; Springer, 1994.

Merryn, Williams. *Thomas Hardy and Rural England*. Macmillan, 1972.

Perren, Richard. *Agriculture in Depression, 1870-1940*. Cambridge UP, 1995.

Repton, Humphrey. *Fragments on the Theory and Practice of Landscape Gardening*. J. Taylor, 1816.

Schweik, Robert. “The Influence of Religion, Science, and Philosophy on Hardy's Writings.” *Cambridge Companion*, edited by Kramer, pp. 54-72.

Snell, K. D. M. *Annals of the Labouring Poor: Social Change and Agrarian England, 1660-1900*. Cambridge UP, 1987.

Stone, Donald. “House and Home in Thomas Hardy.” *Nineteenth-Century Fiction* 39. 3 (1984), pp. 292-304.

Thompson, F. M. L. *English Landed Society in the Nineteenth Century*. Routledge and Kegan Paul, 1963.

Waterston Manor. https://en.wikipedia.org/wiki/Waterston_Manor. Accessed on 1 July 2023.

Widdowson, Peter. *Hardy in History*. Routledge, 1989.

Williams, Raymond. *The Country and the City*. Chatto & Windus, 1973.

Wordsworth, William. *Lyrical Ballads, and Other Poems, 1797-1800*. Edited by James Butler and Karen Green. Cornell UP, 1992.

———. *The Thirteen-Book Prelude*. Edited by Mark L. Reed. Cornell UP, 1992.

井出弘之「始源の時、終末の時——ハーディ小説と“世紀末”」、森松健介ほか『トマス・ハーディと世紀末』英宝社、1999年、115-53頁。

大石和欣『家のイングランド——変貌する社会と建築物の詩学』名古屋大学出版会、2019年。

金子幸男「田舎に向かう19世紀のイングリッシュネス——カントリーハウスとコテージにみるホームの変遷」京都大学博士号学位論文 2022年。

セルトー、ミシェル・ド『日常実践のポイエティーク』山田登世子訳、国文社、1987年。

ハイデガー、マルティン『ハイデガーの建築論——建てる・住まう・考える』中村貴志訳・編、中央公論美術出版、2008年。

森松健介「詩人ハーディと〈世紀末〉」、森松健介ほか『トマス・ハーディと世紀末』英宝社、1999年、3-46頁。

[2022 年度大会シンポジウム

「ハーディと進化論——実りある研究にむけて」]

スペンサーの 進化社会理論と政治思想*

藤 田 祐

はじめに

ハーバート・スペンサーは、19 世紀後半には世界中で大きな影響力をもった哲学者であったが(See Lightman)、20 世紀に入ると急速に影響力は失われ、社会ダーウィニズムと呼ばれることになる思想を唱えた思想家の典型として記憶されることになった¹。進化理論の歴史研究では、ダーウィンの進化理論を社会に適応した社会ダーウィニズムが 19 世紀後半のイギリスとアメリカを席卷したというような歴史観の見直しがすすみ²、スペンサーを対象とする近年の思想史研究でも、スペンサー思想を社会ダーウィニズムの典型として捉えるような歴史記述はなされていない(See Taylor, *Philosophy*; Francis; Offer)。

スペンサー思想を概括することが困難な要因は、「総合哲学」とスペンサーが名付けた手法にある。様々な領域を横断して総合するプロジェクトであるスペンサーの「総合哲学」は、どのように切り取っても断片的な理解になるからである。この点をふまえた上で、初期スペンサー思想、スペンサーの社会進化論、後期スペンサーの政治思想を特徴づける「個人主義」という三つの切り口から、スペンサー思想を理解する糸口を示したい。

1 初期スペンサー思想

初期スペンサー思想とは、「総合哲学体系」に着手する前、1850 年代に思想家としてのキャリアを歩み始めた頃にスペンサーが展開した思想のことである。最初の本格的な著書である『社会静学』(1851)では、後にスペンサーが展開した思想を特徴づける様々な要素が、萌芽と呼ぶべきものはあれ、すでに展開されている。一方で、ダーウィンの進化理論が大々的に知られることになる 1859 年の『種の起源』出版以前であることから、スペンサーが展開している生物進化論や社会有機体論など、生物とのアナロジーで展開されている理論は、ダーウィン進化理論とは別の源から発想を得たものである。初期スペンサー思想は、非国教派プロテスタントが根付いていたイングランド中部の思想風土、福音主義に傾倒していた牧師であった、おじのトマスから受けた教育、ロンドンに移住後にエコノミスト編集部や出版業者ジョン・チャップマン周辺に集っていた人々から吸収した知識など、若きスペンサーが育った知的環境から組み立てられた思想と捉えられる(See Taylor, *Philosophy* ch. 1-2; Francis, ch. 7-8, ch. 16)。

そのような初期スペンサー思想の核を形成しているのが、進化理神論と呼ばれる世界観である³。この世界観は、理想社会論を典型とする理性主義的非国教派プロテスタントの思想だけでなく、救貧法批判のような福音主義的非国教派プロテスタントの思想を吸収することで形成されたと捉えることもできるだろう(See Hilton)。このような世界観を支える創造神の創り出した完全な道德律体系を探究することが、『社会静学』の主要目的となっている。そのような完全な道德律体系が実現するのは人間性が完成する理想社会であり、理想社会への進歩は「最大幸福」という創造の目的を実現する過程であるために必然であると位置づけられている。この進歩の過程が〈野蛮〉から〈文明〉へと至る〈文明化〉と捉えられるとともに、理想社会の完全性と現実社会の不完全性との対照が『社会静学』では強調されている。このような

理想社会にいたる〈文明化〉の過程に必要な自然の〈しつけ〉(discipline)として、貧民など社会に適応できない不適者の苦境が正当化されている。このような苦境を通じた〈しつけ〉によって人々の道徳性が向上し、理想社会で実現する完全な人間性に近づいていくという社会進化論が展開されているのである (Spencer, *Social Statics*; 以下 SS と略記)。

以上の通り、『社会静学』は理想社会における規範を探究する道德科学と、人類と社会が〈文明化〉の過程を通じて理想社会にいたるという社会進化論から成り立っている。完全な人間性を想定して理想社会における規範を探究する「社会生態の科学」(SS 56) が〈社会静学〉であり、社会の状態が個人や集団の性質を意味する〈キャラクター〉によって決定されるというキャラクター決定論を前提としている。ここでの〈キャラクター〉とは、記述的な意味では「性格」を、規範的な意味では「品性」や「品格」を、生物学的な意味では「形質」を表すヴィクトリア時代におけるキーワードである(See Collini, “Idea”)。このような〈キャラクター〉の進化が社会有機体の進化を牽引すると『社会静学』では想定されており、社会制度や法体系や政治体制がどのようになるかは当該社会を構成するメンバーの〈キャラクター〉によって決定されると論じられている(SS 239, 249)。例えば未開人による民主政は必ず失敗すると論じられ、理想社会が実現可能なのは完全な人間だけであると想定されている(SS 238)。

このような前提で『社会静学』では、理想社会で実現する〈社会状態〉の要件が探究されている。このような規範的な意味をもつ〈社会状態〉は、完全な人間が他者の欲望充足を妨げることなく自らの欲望充足を行う状態である。しかしながら、現状の不完全な人間から構成される社会では、そのような要件が満たされず、他者の欲望を妨げてまで自らの欲望充足を行う人々によって全体の幸福が阻害されることになる。このような〈キャラクター〉の欠陥を埋め合わせる〈社会状態〉への適応過程は、スペンサーによれば必然であり、それゆえに人間性が完成する理想社会への進歩は必然であると捉えられている(SS ch. 2)。『社会静学』の世界観では、完全な人間が他者の欲望

充足を妨げることなく自らの欲望充足を行う〈社会状態〉は、神が世界を創造した目的である最大幸福を実現する条件であることから、進合理神論の世界観によっても進歩の必然性は支えられている(SS ch. 3)。このような〈社会状態〉にいたる社会を維持する第一の条件が、「平等な自由」である(SS 88-89)。「平等な自由」を確保するための規範である「平等な自由の法」は、「あらゆる人には、他のどの人の自由も侵害しない限り、しようとすることをすべて行う自由がある」(SS 103)というもので、正義の第一原理として位置づけられている。「平等な自由の法」という正義の第一原理から正義の法を演繹して理想社会で実現する〈社会状態〉の要件を探究するのが、〈社会静学〉というプロジェクトである(See SS 71-72)。

理想社会の規範を探究するプロジェクトに加えて『社会静学』の柱となっているのが社会進化論である。理想社会にいたる進歩の必然性に支えられた〈野蛮〉から〈文明〉への社会進化は、自己中心性から共感が高まっていく過程と捉えられている。〈野蛮〉な社会は、服従に適応した〈キャラクター〉に根ざした「英雄崇拜」を基本原理としているが、〈文明化〉が進展につれて共感が高まることで〈社会生態〉に適応した〈キャラクター〉となる「道德感覚」が形成されていく。また、〈文明化〉の過程は、群相体の進化と類比される社会有機体の進化でもあり、社会有機体を構成する要素が個性化していくとともにそれぞれの相互依存が強まる過程である。この社会有機体の進化過程で自己中心性という〈キャラクター〉から共感性の高い〈キャラクター〉に進化していくことで、個人の利害と社会の利害、すなわち〈私〉の利害と〈公〉の利害が一致していくことになる(SS ch. 30)。このような利害の衝突は人間性の完成した理想社会では起こりえず、他者の欲望や利害の充足を妨げる行為を各人が行わなくなるので、理想社会では人々を強制する必要がなくなって統治権力が消滅する。『社会静学』によれば、政府は強制力による服従が必要な不完全な人間性に対応した機関で、〈文明〉の一段階に対応する必要悪である(SS 14, 207-08)。スペンサーの言葉を借りるならば、「悪を屈服するのに悪という武器を持ち出す」(SS 207)のが政府である。『社

会静学』は功利主義批判から始まっているが、人間本性の斉一性と並んでスペンサーが批判しているのが功利主義が統治の永続性を前提にしている点である(SS 1-16)。また、幸福を増進する統治権力による立法という功利主義の考え方に対して、自然法思想に基づく幸福増進の枠組みを展開したのが『社会静学』であると捉えられる。人間本性の斉一性と統治の永続性を前提としていると功利主義を批判した上で、〈キャラクター〉の進化と統治形態の進化を伴う社会進化の理論を『社会静学』では展開していく。

理想社会における完全な人間性に対応した規範という道徳律と理想社会で完成する〈キャラクター〉と社会の進化という社会進化論で支えながら展開されているのが、『社会静学』の最小国家論である。まず前者の道徳律で政府のすべきことは述べられていない。なぜなら、統治の消滅する理想社会には政府が存在しないからである。一方で政府は、自然法とも言うべき理想社会の規範で認められている権利を侵害してはならず、正義を執行して保護しなければならない。このような政府の義務は、まず第一に「平等な自由」の確保であり、「平等な自由の法」から演繹される様々な権利の保護である。

〈キャラクター〉が不完全な構成員からなる社会では、社会という人々の結びつきを維持するのに、社会を脅かす不完全な人間に強制力を行使して社会を脅かす行為を防止する政府が不可欠なのだ(SS ch. 20-22)。

しかしながら、『社会静学』の最小国家論では、国家の役割に対して社会による二重の制約がかけられている。第一に、国家の役割を社会の成立条件を維持することに限定する。それは、「平等な自由の法」を核とする正義を執行して個人の権利を保護することである。第二に、国家の役割を社会進化の条件を維持することに限定する。「平等な自由の法」を遵守させて個人の自由を確保することで、各人が自由に能力を発揮して〈文明化〉が進展する。各人が自由に能力を発揮する領域を確保することが〈文明化〉の条件を維持する国家の役割なのである。国家が社会による二重の制約を超える権力行使をすると、これら二つの条件が失われて個人の権利が侵害されるとともに社会進化も阻害される。『社会静学』で展開されている最小国家論は、理想社

会で完全に実現する正義という規範と必然的に理想社会にいたるとされる社会進化論の両方に支えられているのである。

社会による二重の制約を受ける国家という『社会静学』の最小国家論は、救貧法、公教育、公衆衛生など、国家による社会政策を批判するために展開されている一方で、不適者に対する冷酷な態度という負の側面をもつ。『社会静学』によれば、社会にそぐわない行為を行った行為者に不利益を与える〈しつけ〉の機構が、自然に組み込まれている。そのような自然の罰を避けるように人々が行為することで、人々の社会への適応が進んで人々の道徳性が向上していく。この過程こそ、自然に組み込まれた社会進化なのである。このような自然に組み込まれた〈しつけ〉の機構を阻害する国家の社会政策は、スペンサーによれば、〈文明化〉という社会進化を妨げることになる(SS 378-81)。自然の〈しつけ〉で不適者の〈キャラクター〉を社会化することこそ、理想社会にいたる社会進化の鍵となるのだ。『社会静学』の最小国家で不適者が被る苦難も、規範理論と社会進化論の両方で正当化されているのである。

『社会静学』の結論では、理想社会の規範である「完全な法」と社会進化の途上にある「不完全な人間性」が対照されている(SS ch. 32)。『社会静学』で探究すべき課題に設定されている理想社会の規範は、完全な人間性に対応した理想社会の規範にそぐわない不完全な人間性と繰り返し対照されている(e.g. SS 215)。また、理想社会の完全な人間と対照される〈他者〉として〈野蛮人〉が参照され、理想社会への進化が〈野蛮〉から〈文明〉にいたる〈文明化〉と捉えられている。当時の通念で一人前とみなされていなかった女性と子供の権利をめぐる議論(SS ch. 16-17)や国家を無視する権利の議論(SS ch. 19)では、完全な人間性に対応した理想社会の規範として位置づけられている権利を、不完全な社会で不完全な人間に対してどこまで認めるのかという論点が浮上するのは避けられなかった。『社会静学』の枠組みでは、自然法と位置づけられる規範の普遍性と社会進化途上の不完全な人間性という歴史性との緊張関係が、避けがたい要素として浮上する。ゆえに、理想社会の規

範と不完全な人間性との対照が繰り返し強調されているのである。〈野蛮人〉には民主政は不可能という議論のように(SS 238)、『社会静学』の結論でも、不完全な〈キャラクター〉に対応した制度に従うべきという歴史性を重視する議論が提示される(SS 468-69)。しかしながら、結論の最後で、完全な人間性に対応した規範に従うべきという普遍性を重視する議論で『社会静学』は締めくくられる(SS 474)。

2 スпенサーの社会進化論

『社会静学』出版後のスペンサーは、1850年代のロンドンで、G・H・ルイスやメアリー・アン・エヴァンズ（後のジョージ・エリオット）を初めとする出版業者チャップマン周辺の知識人や、T・H・ハクスリーやジョン・ティンダルなど新進気鋭の科学者と交流しながら、様々な思想や科学を吸収することで自らの理論を発展させていった。1860年代になると、スペンサーはライフワークとなる「総合哲学体系」の構想に着手し、独自の〈進化〉概念を核とする体系を構想していく。晩年の1890年代まで続いた一大プロジェクトである「総合哲学体系」で展開された後期スペンサー思想は、初期スペンサー思想の延長線上で蒔かれた種が結実したものと捉えられる一方で、いくつかの点で初期スペンサー思想から離脱したものとも捉えられる。

まず、『社会静学』の世界観を支えていた理神論の神が、「総合哲学体系」からは退場する。自然を越える領域は「不可知」と位置づけられ、神の摂理による目的論ではなく、因果決定論に基づく科学で基礎づけることが目指されている。「総合哲学体系」の第一弾として1862年に刊行された『第一原理』では(Spencer, *First Principles*; 以下FPと略記)、当時の物理学をスペンサー流に解釈した宇宙進化論が展開されるとともに、自然界を超える領域は「不可知なるもの」(the Unknowable)とする世界観が展開されている⁴。『第一原理』で定式化された「不明瞭なまとまりのない同質性から区分の明瞭なま

まとまりをもった異質性へ」(FP 396)という普遍進化の原理を核として、「生物学」「心理学」「社会学」「倫理学」を総合する哲学体系が、スペンサーの構想した「総合哲学体系」であった。生物進化論から社会進化論までスペンサー思想の中心を占めた進化理論は、スペンサーによれば、ダーウィン進化論や熱力学など、当時最先端の科学から得た知見に基づくものであった(See Taylor, *Men* ch. 2)。

スペンサーの社会理論を特徴づける社会進化論は、社会有機体の進化理論と生物進化理論を社会に適応した理論という二種類の意味で使われ、この二種類の社会進化理論がどのように結びつけられて展開されているかを理解することでスペンサー社会進化論の特徴を理解することができる。しかしながら、両者の関係をどのように捉えるのかという問題は、スペンサーが展開した社会進化の理論をどのように解釈するのかという問題の核心であり、簡単に結論が出せるものではない。以下では、社会有機体の進化理論と生物進化理論を社会に適応した理論というスペンサーが展開した社会進化論を概括したい。

スペンサーはキャリア初期から独自の社会有機体論を提起し、自ら展開した社会学の中核として社会有機体の進化理論を展開していった。社会有機体の進化は、一言で言うならば、社会有機体の構成要素が特殊化・専門化しながら相互作用を強める過程であり、結果として社会の構成員が担う分業が深化して個性が確立する過程である。また、構成要素の社会的な結びつきが強まるのと並行して感情的な結びつきも強まっていき、結果として、利己と利他の対立を乗り越える調和した状態がもたらされる。このような社会有機体の進化は、個性というかたちで構成要素の異質性が高まるとともに相互依存というまとまりが強まるという点で「まとまりをもった異質性へ」という宇宙進化の一側面である⁵。

このような社会進化が示す普遍的な傾向をスペンサーは軍事社会から産業社会への進化として定式化する。軍事社会は身分に基づいて協力が強制される体制であり、産業社会は契約に基づいて自発的に協力する体制である(See

Taylor, *Men* ch. 5)。軍事社会から産業社会への進化も、「不明瞭なまとまりのない同質性から区分の明瞭なまとまりをもった異質性へ」という宇宙進化の一側面であるとともに、生物進化理論を社会に適応するという第二の意味での社会進化論と不可分の関係にある。

生物進化理論を社会に適用するという意味での社会進化論は、スペンサーの世界観におけるキャラクター決定論と不可分である。つまり、生物進化メカニズムを通じて人々の〈キャラクター〉が進化し、その結果としてキャラクター決定論に従って人々が構成する社会が進化していくというわけである。当初はラマルクの進化メカニズムを核とする生物進化理論を構想していたスペンサーが、1859年に『種の起源』が公刊されたことで、ダーウィンの展開した自然選択理論も含めて自らの生物進化理論を構想ようになる。結果として、環境へ直接的に適応するラマルクのメカニズムと環境へ間接的に適応するダーウィンのメカニズムを二本柱とする生物進化理論を『生物学原理』で展開することになる。『生物学原理』では、前者が「直接的な平衡」(direct equilibration)と呼ばれ、用不用と獲得形質の遺伝という環境への直接適応メカニズムと捉えられている。後者は「間接的な平衡」(indirect equilibration)と呼ばれ、生存競争を通じた自然選択による環境への適応がスペンサーの造語である「適者生存」という概念で捉えられている(Spencer, *Principles* part 3 ch. 11-12)。「直接的な平衡」と「間接的な平衡」という二つの環境適応メカニズムが第二の意味での社会進化論であり、このメカニズムを通じて〈キャラクター〉の進化が起ることによって道徳性が進化することになるのである(See Taylor, *Men* ch. 2-3)。

以上で概括した二種類の社会進化論がどのような関係にあるのかを解き明かすのがスペンサー社会進化論解釈における最も重要な課題になるが、「総合哲学体系」においては『第一原理』で定式化された普遍進化の原理が二種類の社会進化も貫く自然法則として位置づけられている。現代の観点から言えば、科学による正当化に成功しているとはいえないが、キャリアの後期には、以上のような二種類の社会進化論で、当時は「個人主義」と呼ばれた(現

在では古典的リベラリズムと呼ぶべき)自らの政治思想を正当化していくことになる。

3 個人主義 —— 後期スペンサーの政治思想

1880年代になるとスペンサーは、当時の第二次グラッドストーン内閣に象徴される新しい自由党の政策を批判する思想潮流の代表人物とみなされるようになる。世紀半ばから自由党を支持してきた知識人のうち、自由党内のニューラディカルと呼ばれた人々が主導した社会改革立法を個人の自由に対する侵害として批判した人々が、「個人主義」と呼ばれた思想潮流を形成していく。例えば、私有地の猟獣に対する財産権を制限する猟獣法(1880)、労働災害を使用者の責任とする使用者責任法(1880)、そして特にアイルランドの地主と小作人との間に生じた土地利用をめぐる争い事を公権力の介入によって解決しようとするアイルランド土地法(1881)が、「個人主義者」の批判した第二次グラッドストーン内閣の改革立法である(Taylor, *Introduction*)。このような改革立法を批判する「個人主義」の特徴は、国家が権力を行使する領域と個人の自由が発揮される領域を相互に背反するものと捉え、国家の役割が拡大すると個人の自由が制限されると考える前提にある。このような前提に基づいて個人の自由を拡大するために国家の領域を削減することを主張するのが、「個人主義」と呼ばれた政治思想なのだ。このような「個人主義」の考え方を象徴するのが、スペンサーが出版した『人間対国家』(1884)という著作のタイトルである。

『人間対国家』は、1884年に『コンテンポラリー・レビュー』に掲載された一連の論考をまとめた著作で、「新しいトリーイズム」「来るべき奴隷制」「立法者の罪」「政治における大いなる迷信」という4本の論文からなる。国家による社会改革を擁護する「集団主義」と呼ばれる思想潮流、そして「集団主義」に支えられた社会政策など、スペンサーの政治理念に反する動向が、それぞれの論文でそれぞれの論拠によって批判されている。国家

による社会改革を擁護する「集団主義」に対して国家が社会改革を通じて個人の自由を制限することを批判した「個人主義」という、1880年代前後のイギリスで展開された「個人主義」対「集団主義」の論争（See Collini, *Liberalism* ch. 1）において、『人間対国家』は「個人主義」のマニフェストとも言うべき著作と見なされるようになっていく。

第一論文の「新しいトーリーイズム」は、〈軍事社会〉から〈産業社会〉へという社会進化図式で、第二次グラッドストーン内閣の社会改革立法に象徴される同時代のリベラリズムを「新しいトーリーイズム」と批判する論考である。スペンサーによれば、「強制される協力」で動かされる「身分に基づく体制」から「自発的な協力」によって動かされる「契約に基づく体制」へという社会進化の趨勢に対して、前者を保守することを主張するのが「トーリーイズム」で、後者への移行を押し進めるのが「リベラリズム」となる。〈軍事社会〉から〈産業社会〉への社会進化の過程で国家の強制を削減することで個人の自由を拡大することこそ、リベラリズムの根本原理というわけである。ところが、スペンサーの見立てによると、第二次グラッドストーン内閣にいたる近年の自由党は、国家による社会改革を志向しており、〈軍事社会〉の特徴である公権力の強制によって個人の自由に制限を加えている。このような国家による強制を伴う社会政策は、社会進化の道筋に逆行する施策であり、それを支持するリベラリズムは真のリベラリズムではなく「新しいトーリーイズム」であるというのがスペンサーの主張である（Spencer, “New Toryism”）。

第二論文の「来るべき奴隷制」では、国家の強制力に訴える社会主義は奴隷制をもたらすと論じた上で、上述のキャラクター決定論によって社会改革を批判している（Spencer, “Coming Slavery”；以下CSと略記）。スペンサーによれば、社会制度の変革で社会の福利は増進できず、社会の福利を増進するためには〈キャラクター〉の改善が不可欠である。なぜなら、最善の社会制度を支えられるのは最善の〈キャラクター〉であり、いくら社会制度を改善しても〈キャラクター〉の改善が伴っていなければ社会の福利が増進するどこ

ろか害悪が生み出されるからである。〈キャラクター〉の改善には、上述の社会進化論で裏付けられた何世代にもわたる長期の進化過程が必要であり、短期的な改革の果実はまだ改善されていない不完全な〈キャラクター〉によって阻害されるのである。スペンサーによれば、「鉛製の本能から黄金の行為を引き出せる政治錬金術は存在しない」のである（CS 69）。

第三論文の「立法者の罪」では、科学的知識に基づかない政策で社会に害悪をもたらす立法者を批判した上で、生物進化理論を社会に適用するという意味での社会進化論によって社会改革を批判している（Spencer, “Sins”；以下SLと略記）。スペンサーは、貧困は環境条件に適応していない〈キャラクター〉をしつける自然の罰であるという『社会静学』における議論を引用し、このような自然のメカニズムを阻害する社会政策を批判する。三十数前に展開した自らの議論をダーウィンの名前に言及して「適者生存」という自ら名付けたメカニズムで改めて正当化している。ここでは、社会進化の理論を考慮しない改革が不適者を増大させて適者の繁殖を妨げるという、一般に社会ダーウィニズムと呼ばれうる議論が展開されている（SL 106-14）。貧民の救済は貧民の道徳性を向上させる自然のメカニズムを阻害すると同時に社会進化を阻害する不適者の増加を招くというのだ。このような論拠で貧民の救済を目指すような社会改革は社会の改善をもたらさないと主張し、自らの社会進化論で個人主義という自らの政治思想を正当化しているのである。

第四論文「政治における大いなる迷信」は、自然法思想・自然権思想による議会主権の批判になっている。スペンサーによれば、国家による社会改革を推し進める議会は、初期近代に批判された神授説に基づく王権に準えられる議会の絶対的な主権によって個人の自由を制限しようとしている。しかしながら、自然法・自然権に基づく個人の自由は議会の立法によっても制限することがゆるされない権利であり、国家による社会への介入は個人の権利を侵害するがゆえにゆるされないというのがスペンサーの主張である（Spencer, “Great Political Superstition”）。

『人間対国家』というかたちで出版された四本の論文では、それぞれスベ

ンサー思想を構成する主要な柱で後期スペンサーの政治思想である「個人主義」が支えられている。「新しいトーリーイズム」では社会有機体の進化という意味での社会進化論と〈軍事社会〉から〈産業社会〉へという社会進化図式で、「来るべき奴隷制」ではキャラクター決定論で、「立法者の罪」では生物進化論を社会に適用するという意味での社会進化論で、「政治における大いなる迷信」では自然法思想・自然権思想で、「個人主義」が支えられている。以上に列挙した四本の柱に支えられた古典的リベラリズムと解釈できるのが、『人間対国家』で提起された後期スペンサーの政治思想である。『社会静学』で人間性が完成して政府が消滅する理想社会を描き出したスペンサーが、ヴィクトリア時代後期になると相対的にリベラルな同時代の体制を擁護し、さらなる平等を求める社会改革の思想を批判したのである(Taylor, *Men* esp. Epilogue)。

おわりに

「はじめに」で述べたように、様々な学問分野を横断する「総合哲学体系」を展開したスペンサー思想を概括するのは困難な課題である。ここでは、初期スペンサー思想、スペンサーの社会進化論、「個人主義」と呼ばれた後期の政治思想という三つの切り口でスペンサー思想の断面を切り出すことを目指した。進合理神論という『社会静学』で展開された世界観を特徴とする初期スペンサー思想は、理神論に支えられた普遍規範と社会進化論によって最終的に理想社会にいたる最小国家論を根拠づけようとするものであった。進合理神論から離れて当時の学問を総合することを目指した「総合哲学体系」では、一様から多様へという宇宙進化の原理を核として社会有機体の進合理論と生物進化理論を社会に適用した理論という二つの意味での社会進化論が展開された。1884年の『人間対国家』では、国家の役割をめぐる「個人主義」対「集団主義」の論争というコンテキストで、進化社会理論に支えられた古典的リベラリズムと位置づけられる後期スペンサーの政治思想が展開さ

れ、「個人主義」という潮流を代表する思想家というスペンサーの存在が確立した。これら三つの断面は、スペンサー思想の全体像を縮約したものとは言えないが、スペンサー思想を特徴づける側面を示すものだと言えるのである。

注

*日本ハーディ協会第 65 回大会シンポジウム『ハーディと進化論 —— 実りある研究にむけて』における報告内容に基づいている。

- 1 スペンサーを社会ダーウィニズムを唱えた思想家の典型と捉える見方は、Hofstadter の影響で広がったものと考えられる。
- 2 社会ダーウィニズムと捉えられたスペンサー思想の 19 世紀後半における影響力を強調する、Hofstadter のような見方は、Bannister や Peel で修正がはかられている。Hawkins のようにスペンサー思想を社会ダーウィニズムとして位置づけている研究もないわけではないが、進化論の通史を執筆した Bowler も修正された歴史の見方に基づいて記述をしている(*Evolution; See also Non-Darwinian Revolution*)。
- 3 Taylor, *Philosophy* では、善意あふれる神の摂理に従う自然という進合理神論に実証科学の世界観を接ぎ木した不安定な体系とスペンサー思想が捉えられている (See esp. 38-42, 150-52)。
- 4 ただし、「不可知なるもの」(the Unknowable)は超自然的な実在と解釈することが可能で、超自然の領域は科学の方法で知ることができないという意味で「不可知」であることを強調するハクスリーなどの懐疑論とは一線を画している(Pyle)。
- 5 スペンサーの社会有機体論については、Taylor, *Men* ch. 4 参照。スペンサーが最初に本格的に社会有機体論を展開した論考は、Spencer, “Social Organism”であり、それを受けたハクスリーによるスペンサー社会有機体論批判とスペンサーとの論争については、藤田参照。

Works Cited

- Bannister, Robert C. *Social Darwinism: Science and Myth in Anglo-American Social Thought*. Temple UP, 1979.
- Bowler, Peter J. *The Non-Darwinian Revolution: Reinterpreting a Historical Myth*. 1988. Johns Hopkins UP, 1992.
- . *Evolution: The History of an Idea*. 25th Anniversary ed. U of California P, 2009.
- Collini, Stefan. “The Idea of ‘Character’ in Victorian Political Thought.” *Transactions of the Royal Historical Society*, 5th Ser., Vol. 35, Dec. 1985, pp. 29–50.
- . *Liberalism and Sociology: L. T. Hobhouse and Political Argument in England 1880–1914*. 1979. Cambridge UP, 2009.
- Darwin, Charles. *The Origin of Species: By Means of Natural Selection or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life*. 1859. Edited by J. W. Burrow. Penguin Books, 1985. Penguin Classics.
- Francis, Mark. *Herbert Spencer and the Invention of Modern Life*. Acumen, 2007.
- Hawkins, Mike. *Social Darwinism in European and American Thought, 1860–1945: Nature as Model and Nature as Threat*. Cambridge UP, 1997.
- Hilton, Boyd. *The Age of Atonement: The Influence of Evangelicalism on Social and Economic Thought 1785–1865*. 1986. Clarendon Press, 2001.
- Hofstadter, Richard. *Social Darwinism in American Thought*. 1944. Rev. ed., 1955. Beacon Press, 1992.
- Lightman, Bernard, ed. *Global Spencerism: The Communication and Appropriation of a British Evolutionist*. Brill, 2015. Cultural Dynamics of Science 1.
- Offer, John. *Herbert Spencer and Social Theory*. Palgrave Macmillan, 2010.
- Peel, J. D. Y. *Herbert Spencer: The Evolution of a Sociologist*. Heinemann Educational Books, 1971.
- Pyle, Andrew. Introduction. *Agnosticism: Contemporary Responses to Spencer and Huxley*, edited by Andrew Pyle, Thoemmes Press, 1995. Key Issues 4.

- Spencer, Herbert. “The Coming Slavery.” Spencer, *Man Versus the State*, pp. 31–70. Originally published in *Contemporary Review*, Vol. 45, Apr. 1884, pp. 461–82.
- . *First Principles*. 2nd ed., 1867. *First Principles*. Routledge/Thoemmes Press, 1996. Vol. 5 of *Herbert Spencer: Collected Writings*.
- . “The Great Political Superstition.” Spencer, *Man Versus the State*, pp. 123–66. Originally published in *Contemporary Review* Vol. 46, July 1884, pp. 24–48.
- . “New Toryism.” Spencer, *Man Versus the State*, pp. 5–30. Originally published in *Contemporary Review*, Vol. 45, Feb. 1884, pp. 153–67.
- . *The Man Versus the State with Six Essays on Government, Society, and Freedom*. Liberty Fund, 1981.
- . *The Principles of Biology*. 1866–67. D. Appleton, 1898–99. 2 vols. Synthetic Philosophy of Herbert Spencer. Westminster ed.
- . “The Sins of Legislators.” Spencer, *Man Versus the State*, pp. 71–121. Originally published in *Contemporary Review*, Vol. 45 May 1884, pp. 613–26; June 1884, pp. 761–75.
- . “Social Organism.” Spencer, *Man Versus the State*, pp. 383–434. Originally published in *Westminster Review*, Vol. 74, Jan. 1860, pp. 90–121.
- . *Social Statics: Or, the Conditions Essential to Human Happiness Specified, and the First of Them Developed*. 1851. *Social Statics*. Routledge/Thoemmes Press, 1996. Vol. 3 of *Herbert Spencer: Collected Writings*.
- Taylor, Michael W. Introduction. *Herbert Spencer and the Limits of the State: The Late Nineteenth-Century Debate between Individualism and Collectivism*, edited by Michael Taylor, Thoemmes Press, 1996. Key Issues 13, edited by Andrew Pyle.
- . *Men Versus the State: Herbert Spencer and Late Victorian Individualism*. Clarendon Press, 1992. Oxford Historical Monographs.
- . *The Philosophy of Herbert Spencer*. Continuum, 2007. Continuum Studies in British Philosophy.

藤田 祐 「ハクスリー「行政に関するニヒリズム」とスペンサー「専門化した行政」
——総合雑誌上で展開されたスペンサーに対する批判とスペンサーによる反論 1」
『釧路公立大学地域研究』no. 25, 2016, pp. 51-67.

Thomas Hardy's Evolution Amongst the Poets: Hardy's "Harmony of View with Darwin" and Shelley

Neil ADDISON

I

Over the last few decades, since Gillian Beer's *Darwin's Plots* (1983), Thomas Hardy's fiction has increasingly been discussed in relation to *On the Origin of Species* (1859) by Charles Darwin. Hardy wrote in 1924 (recorded in *The Collected Letters of Thomas Hardy: Volume Six*), that his work displayed "harmony of view with Darwin" (259). This sense of harmony also pervades his poetry, and can be fruitfully explicated by placing it in context alongside the body of nineteenth-century verse that reacted to changing evolutionary thought. Robert Chambers' *Vestiges of the Natural History of Creation* (1844) was a significant text that introduced evolutionary ideas to Victorian public awareness. This drew upon the notion proposed by Jean-Baptiste Lamarck, who argued that organisms changed in order to adapt to their environment, and that those changes were then passed on to further offspring. Alfred Lord Tennyson, in *In Memoriam A.H.H.* (1850), was cautiously receptive of *Vestiges*, but the publication of Darwin's *Origin* (1859) provoked a more pessimistic series of responses from poets such as Robert Browning and Herman Melville.

Hardy's poetry was not Lamarckian, and, although affected by the implications of Darwin's theory, can also be differentiated from the poets who responded more pessimistically to Darwinian ideas. Instead, Hardy's poetry demonstrates a keen sympathy for the rights of living creatures, which can be partly attributed to his reading of Darwin. In a 1910 *London Standard* article written by Florence Dugdale, Hardy's future wife, entitled "Thomas Hardy. Great Writer's 70th Birthday," he is

described as possessing an "insistence on the rights of animals" which, the article continues, "have assumed a new aspect in his regard since the Darwinian theory showed the kinship of all animal creation" (*Thomas Hardy's Public Voice* 315).

This insistence upon animal rights may have originally been influenced by Hardy's rural upbringing, his home in Higher Bockhampton verging upon a remote heath. Hardy was familiar and at ease with the insects and animals that inhabited the heathland near his cottage. According to his notes, collected in *The Life and Work of Thomas Hardy*, when he was a baby his mother found him with a "large snake curled up upon his breast, comfortably asleep like himself. It had crept into the house from the heath hard by" (19). This familiarity with nature lasted into old age. J. C. Squire, editor of the *London Mercury*, describes visiting Hardy at Max Gate on various occasions between 1922 and 1927, describing Hardy as one who felt "acutely spring's freshness or autumn's grief," and who pondered "the visionary red of the robin's breast" (Cited in Gibson 234). Squire further noticed how no one "pitied more spontaneously the victims of man's brutality or Fate's, than this old man of nearly ninety" (234).

At the same time, Hardy's view of the natural world was also inspired by the thought of Percy Bysshe Shelley, who Hardy, as recorded in *The Collected Letters of Thomas Hardy: Volume Six*, praised as "that greatest of our lyrists" (101). In his poetry, such as *Queen Mab*, Shelley championed the natural rights of all creatures, affecting Hardy's own representations of the natural world. As Frank B. Pinion argues, "[i]t is no exaggeration to say that Shelley's influence on Hardy's thought and basic outlook was greater than that of any other writer" (148). The establishment of the Shelley Society in 1885 by F. J. Furnivall accompanied his rising reputation amongst Victorians (Dunstan 282), which included Hardy and his acquaintances. Shelley's influence upon Hardy's view of the natural world was further compounded by his correspondence with Henry Salt, a prominent member of the Shelley Society and a leading animal rights campaigner. Hardy's nature poetry reflects this influence,

demonstrating the combined influence of both Darwinian theory and Shelley's thought upon his verse.

Hardy's poetic response to Darwinian evolution has, however, been previously noted for its perceived fatalism. Lionel Stevenson, in his 1932 *Darwin Among the Poets*—one of the first texts to critically examine the wider poetic response to Darwin's theory—saw Hardy's poetic reaction to evolutionism as expressing a strong gloominess (243). Stevenson argued that Hardy's understanding of Darwin helped shape his later reading of Schopenhauer (240), explaining how his "principle of pervasive chance grew into a fatalistic view" (277). Hardy, conversely, as recorded in *The Collected Letters: Volume Six*, downplayed the latter's influence in 1924 while affirming his Darwinian sympathies (259).

In this study I place both Darwin and Hardy amongst the poets in order to situate several of Hardy's poems in more sympathetic context. Hardy's responses to the implications of Darwin's *Origin* are varied; while some of his poems lament the competition that exists between species, other pieces draw upon both Shelleyan and Darwinian imagery to stress the importance of kindness and compassion. I discuss three poems at length which demonstrate these aspects of Hardy's thought. In stanza six of "Drinking Song" (1928), published in *The Complete Poetical Works of Thomas Hardy: Volume III*, Hardy's speaker references Darwin and emphasises the biological connections between species. His "The Wind Blew Words" (1917), published in *Poetical Works: Volume II*, bemoans the more competitive aspects of Darwin's *Origin*, such as human cruelty towards animals, while implying the need for a more enlightened stance. Further, in "Compassion: An Ode" (1925), published in *Poetical Works: Volume III*, Hardy's speaker relays, more hopefully, his wish that human evolution will result in the development of widespread sympathy and kindness towards all creatures. These poems stress Hardy's "harmony of view," with both Darwin and Shelley, and indeed the natural world, emphasising the necessity of cultivating a more compassionate attitude towards all creatures.

II

To better grasp Hardy's poetic "harmony of view with Darwin" we must place his output in context. This necessitates understanding the wider poetic engagement with evolutionary ideas which emerged during the nineteenth century. Preceding Darwin, a teleological notion of evolutionary theory was originally proposed by the French biologist Jean-Baptiste Lamarck. In his famous *Philosophie Zoologique* (1809), Lamarck drew upon the classical ladder model of Aristotle, arguing that organisms followed a *scala naturae*, or great chain of being (Staflou 411). Lamarck envisioned that "the most perfect animals are at one extremity of the chain" (Lamarck 68). This positioned lifeforms as beings upon a natural escalator that was forever moving upwards, with humans, the most perfect animals, at the very top (Brooke 329).

In Britain, Lamarckian evolutionary ideas were introduced to the public by Robert Chambers, a lay writer rather than a naturalist (Moore 143). Chambers' book, entitled *Vestiges of the Natural History of Creation* (1844), became one of the publishing sensations of the nineteenth century (Brooke 302). Its influence reached broadly across Victorian society and provoked pessimistic reactions in some quarters. John Hedley Brooke, for example, observes that *Vestiges* "was read by many critics as an atheistic tract masquerading as natural theology" (305).

The poet Elizabeth Barrett read *Vestiges* upon its 1844 publication and denounced the pre-Darwinian text as "one of the most melancholy books in the world" (Cited in Secord 167), determining "not to be a fully developed monkey if I could help it" (167). Following her reading of *Vestiges*, several of Barrett's poems depict male behaviour as bestial. In *Aurora Leigh* (1856) she describes male violence committed against women in animalistic, bestial terms, Marian Erle being "beaten down / by hoofs of maddened oxen into a ditch" (Book VI 675-6). This despondent poetic turn in mood also took the form of religious doubt, illustrated by Matthew Arnold's "Dover Beach" (1867), which was originally composed in 1851 and was likely influenced by *Vestiges*. In the face of these new evolutionary ideas, Arnold's

speaker bemoans the retreat of traditional religious belief:

The Sea of Faith
Was once, too, at the full, and round earth's shore
Lay like the folds of a bright girdle furled.
But now I only hear
Its melancholy, long, withdrawing roar,
(21-25)

As its impressive sales figures would indicate (Brooke 302), *Vestiges* also functioned as a source of academic and creative inspiration. One of the reasons for the stunning popularity of Chamber's work was that *Vestiges* combined evolutionary ideas with religion (Secord 1). Unlike Barrett and Arnold's poetic responses to *Vestiges*, Alfred Lord Tennyson's view was more optimistic (Secord 10), and his *In Memoriam A. H. H.* (1850) expressed sentiments which echoed a Lamarckian notion of the great chain of being. In *Vestiges*, Chambers maintained that humans would rise above their baser, animal instincts through moral sense, learning to "control these inclinations, and to be habitually humane, frank, and truthful" (Chambers 355). In *In Memoriam A. H. H.* Tennyson's speaker mourns how violent evolutionary processes appear to threaten civilized Christian values, "Tho' Nature, red in tooth and claw / With ravine, shriek'd against his creed—" (Canto LVI 15-16). Despite this, he expresses a hopeful belief in the power of humankind to self-discipline and transcend this bestial state. His speaker implores humankind to "Move upward, working out the beast, / And let the ape and tiger die" (Canto CXVIII 27-8).

The publication of *On the Origin of Species* in 1859, however, which departed dramatically from Lamarck's theory, helped to establish an age of religious doubt (Holmes 5). Darwin's theory eschewed the idea that organisms actively changed in order to adapt to their habitat. Instead, in Darwin's account, lifeforms that thrived—and therefore established their lineage—did so through being best suited to a particular environment. This less progressive idea posited that all lifeforms were

essentially engaged in what Darwin in the *Origin* called "the war of nature" (459). Darwin documented this conflict in his famous "Tree of Life" (172) passage from his work, detailing those who enjoy "that superiority which now makes them dominant in their own countries," while further representing the losers as a branch that "has decayed and dropped off" (171-2). Darwin's theory signified a cultural turning-point, challenging traditional religious beliefs and emphasizing a more materialist, less progressively certain worldview.

This evolutionary paradigm shift saw post-Darwinian poets respond to the *Origin* with caution, or indeed a sense of fear. Robert Browning's "Caliban Upon Setebos; or, Natural Theology in the Island" (1864), reflects his reading of Darwin while the subtitle references William Paley's *Natural Theology* (1802), which argued that God's nature could be inferred from surrounding phenomena. On Browning's post-Darwinian island, nature is competitive and violent, leading Caliban to infer that his God is savage and bestial. In Shakespeare's *The Tempest* (1611), Caliban welcomes Stefano and Trinculo to his island while famously imploring them "Be not afeard; the isle is full of noises, / Sounds and sweet airs, that give delight, and hurt not" (Act III Scene 2 138-39). Yet, in Browning's poem Caliban is himself "afeard," viewing natural phenomena as the sign of an oppressive, bestial god. As the landscape is struck by lightning Browning's speaker describes how "A tree's head snaps—and there, there, there, there, there, / His thunder follows!" (290-91) The sounds and motions of the elements are here attributed by Caliban to a bestial and malevolent spirit, the speaker cowering in fear as he continues "Fool to gibe at Him! / Lo! 'Lieth flat and loveth Setebos!" (291-92).

Tennyson read Darwin's text in 1859 (Purton 49), and the later composed sections of his *Idylls of the King* (1859-1885) indicate a sense of pessimism which reflects the struggle for existence, the title of the third chapter of the *Origin*. In these sections the gentle Christian values of Arthur and his court are contrasted by bestial imagery which symbolizes the violence of the world outside. This imagery is

evidenced in “The Last Tournament” (1872) section of the *Idylls*. The soon-to-be traitor Modred appears at a tournament “like a vermin in its hole” (165) and Arthur’s jousting knights resemble competitive beasts. We also encounter this imagery in “The Coming of Arthur” (1869), where the King arrives into a wild, competitive, and dangerous world:

Thus the land of Cameliard was waste,
Thick with wet woods, and many a beast therein,
And none or few to scare or chase the beast;
(20-22).

The cautious and fearful atmosphere displayed in Browning and Tennyson’s post-Darwinian poetry is further echoed by Herman Melville’s *Clarel* (1876). Melville’s epic poem ponders a range of spiritual questions while considering the implications of Darwin’s theory. Finally, the speaker questions in the somewhat inconclusive and uncertain Epilogue, “If Luther’s day expand to Darwin’s year, / Shall that exclude the hope—foreclose the fear?” (1-2) Evolutionary ideas such as Darwin’s *Origin* thus permeated poetic discussion, while at the same time influencing a turn towards pessimism.

III

Hardy’s poetic response to the world described by Darwin appears less fearful, his emotions ranging from sympathetic and compassionate to hopeful. Hardy also imbues the many creatures he writes about with a vibrant importance which rivals that of humans. In “Domicilium” (1857-60) published in *The Life*, which was the first known poem Hardy wrote, his speaker sees the many creatures that live amongst the heath as his neighbors (8). In “Afterwards” (1917), published in *Poetical Works: Volume II*, Hardy reveals his sympathies for the natural creatures which inhabit his rural environment, and ponders whether others will remember his

sentiments. In the third stanza he considers:

If I pass during some nocturnal blackness, mothy and warm,
When the hedgehog travels furtively over the lawn,
One may say, “He strove that such innocent creatures should
come to no harm,
But he could do little for them; and now he is gone.”
(9-12)

The same emphasis upon the welfare of such creatures is employed in Part III of his epic poem *The Dynasts* (1908). In the concluding Battle of Waterloo section Hardy imagines the effect of the advancing soldiers upon the small creatures such as hedgehogs, moles, worms, and snails that live upon the plain. He describes the threat which assails “The mole’s tunneled chambers,” the “lark’s eggs,” the “hedgehog’s household” and the snail who “draws in at the terrible tread” (652).

Elsewhere, in “Horses Abroad” (1925), published in *Poetical Works: Volume II*, Hardy’s poetic eye focuses upon the plight of the horses who would be ridden across such battle fields. Tennyson in “The Charge of the Light Brigade” (1854) idealized real people, his famous lines “Into the Valley of Death / Rode the Six Hundred” (*Selected Poems* 215-16) immortalizing the brave but doomed horse riders. In “Horses Abroad,” however, Hardy instead realized an idea, his poem vividly relaying the plight of horses that died largely unnoticed in such wars while stressing the importance of kindness towards animals. His speaker tells us “that in some wilderness, gaunt and ghastr, / Their bones will bleach ere a year has passed” (7-8). Hardy further evokes the reader’s sympathies for the conflict-bound creatures, depicting them as “‘war-waste’ classed” (9), having been tragically “wrenched awry” (11) from their rural lives.

The tragedy underpinning these poems can be seen as Hardy’s attempt to highlight the suffering of animals in the hope things would become more civilized.

As Michael Millgate notes:

Hardy had learned through years of deliberate self-education and of London living that there were other, more sophisticated, and on the whole better ways of thinking and acting—more humane ways, for example, of treating animals, and broader views of the nature of the universe. (254)

Hardy's poetic emphasis upon the vibrancy of natural creatures, and indeed the rights of such lifeforms were also a product of his cultural era. Hardy was a keen admirer of Darwin's theory of evolution, and his notes, collected in *The Life*, recorded that "as a young man he had been among the earliest acclaimers of *The Origin of Species*" (158). While Darwin's *Origin* helped provoke Hardy's religious doubt, it also reinforced his secular belief—learned through his rural upbringing—in the connections between humans and natural lifeforms.

In the sixth stanza of "Drinking Song" (1928), published in *Poetical Works: Volume III*, for example, Hardy's speaker directly references the author of the *Origin* as he muses upon the connections between humankind and other species:

Next this strange message Darwin brings,
(Though saying his say
In a quiet way);
We all are one with creeping things;
And apes and men
Blood-brethren,
And likewise reptile forms with stings.
(56-62)

Hardy's description of humankind being one with "apes and men" appears to reflect his likely reading of Darwin's *The Descent of Man* (1871). But "apes and men" also reminds us of Tennyson's *In Memoriam A. H. H.*, in which the speaker implores humankind to climb upwards and "let the ape and tiger die" (Canto CXVIII 27-8).

Here, however, Hardy's speaker is influenced by Darwinian rather than Lamarckian evolutionary theory. Humankind is not special, being represented as part of a series of evolving biological interconnections. Yet there is no fear present in these lines. Tennyson's description of "Nature, red in tooth and claw" (Canto LVI 15-16) is here contrasted by Hardy's description of all species as "Blood-brethren." The final four lines of the stanza illustrate Hardy's "Harmony of View with Darwin," simply and economically detailing the biological interconnections between all species. This absence of pessimism is reinforced by the chorus, which tells us not to mind this revelation, but instead to "Fill full your cups: feel no distress; 'Tis only one great thought the less!" (63-64). Hardy's poem is therefore in essence a mock lament; his sixth stanza notes that due to Darwin's evolutionary theory humankind has been reduced in importance (while other lifeforms have gained a new significance) but he ultimately proposes having a drink rather than anguishing excessively over this.

The stanza tells that Darwin's message is relayed to us "In a quiet way," being non-threatening, but his use of the present continuous form of the verb "saying" also implies that the message, while quietly delivered, will continue to be relayed again and again. The succeeding line, "We all are one with creeping things;" reinforces this sense. While this term adjectivally indicates the connections between humans and small lifeforms, the use of "creeping" as a verb also connotes both negative and more hopeful meanings. In the latter reading, for example, "creeping" references an action which develops gradually and almost imperceptibly. The type of slow-moving action implied here can of course be read either positively or negatively, but it is significant to remember that Hardy wished for the gradual—or indeed "creeping"—evolution of sophisticated values such as empathy and kindness. Therefore, the speakers and human subjects of his poems, while represented as part of the same biological system, often extend their sympathy and kindness towards animals. This contrasts the ways in which other nineteenth-century poets responded to the *Origin*, reflecting not just his "harmony of view with Darwin," or indeed his

rural upbringing, but also the influence of Percy Bysshe Shelley.

IV

While Hardy acknowledged Darwin's competitive account of the natural world, he also saw the need for sympathy and compassion towards all lifeforms. In his "After Scene" to *The Dynasts* Part III (1908) he termed this quality "loving-kindness," as his Spirit of the Pities questions whether the Will "must not Its heart awake...In a genial germinating purpose, and for loving-kindness sake?" (707). Peter Coxon has identified this expression as originating in *The Book of Common Prayer* (56) while Anna West has argued that Hardy's sense of familiarity with other lifeforms saw his work open "the door to compassion, to empathy, and to loving-kindness" (189). Further, as already discussed, Hardy saw Darwin's theory as proof that all creatures should be treated equally and thus with love and kindness.

But we should remember that Hardy's poetic *oeuvre* also drew from earlier Romantic verse as well as the evolutionary and scientific theories of the Victorian age. Amongst the Romantic poets, Hardy's empathetic disposition towards fellow lifeforms was particularly influenced by Percy Bysshe Shelley. Hardy described Shelley in an 1897 letter to Florence Henniker, recorded in *The Collected Letters: Volume Two*, as one whom he would most "like to meet in the Elysian fields" (144). Hardy's interest in Shelley was lifelong; his notes, published in *The Life*, document that during his twenties he visited the Shelley family grave containing Shelley's heart at Old St. Pancras Churchyard (135) and met the poet's son Sir Percy Shelley in 1879 (134). A later trip to Rome involved a visit to the graves of Shelley and John Keats, and Hardy composed the poem "Rome at the Pyramid of Cestius Near the Graves of Shelley and Keats" (1898), published in *Poetical Works: Volume I*, in honour of the anonymous Roman nobleman who "in death all silently / He does a kindlier thing," (15-16). Indeed, Cestius' "pyramid" (8) tomb, Hardy's speaker tells us, signified the graves of Shelley and Keats, those "matchless singers" (20) and

"immortal Shades" (24). As an old man, moreover, Hardy's strong interest in Shelley remained. His friend and legal executor Sidney Cockerill recounted visiting an aged Hardy and listening to him "as usual" converse about Shelley (Cited in Millgate 496).

In Shelley's works such as *Queen Mab* and *The Revolt of Islam*, he suggested that love and kindness offered the possibility of transformative power which could open hearts and minds towards much wider issues, having direct socio-political implications. Revolutions, for example, should be bloodless; while Shelley's "The Mask of Anarchy" imagined that the awakened masses might "Rise like Lions after slumber / In unvanquishable number" (367-68), such beasts should be non-violent. They would achieve change through passive resistance, such as in *Queen Mab*, where Shelley imagines a herbivorous lion who lies peacefully alongside the weaker lamb (VIII 224-28). As Frank B. Pinion notes, Hardy was particularly influenced by Shelley's *Queen Mab*, due to it being "the repository of most of his philosophical and revolutionary thought" (151). It is for these reasons that Hardy noted in an 1897 missive, recorded in *Collected Letters: Volume Two*, that he wished to meet Shelley most of all, his admiration being due to Shelley's "genuineness, earnestness, & enthusiasms on behalf of the oppressed" (144).

Hardy's fellow Victorians also took inspiration from Shelley's thoughts on social progress. During the latter half of the nineteenth century the reputation of Shelley ascended rapidly. This increasing popularity culminated in the formation of The Shelley Society in 1885 by F. J. Furnivall, the son of Percy and Mary Shelley's doctor (Norman 243), being primarily instigated by the famous philologist Henry Sweet (Dunstan 282). The society flourished and, as Roland A. Duerksen notes, "did a great deal to promote Shelley's literary status" (Duerksen 27). Hardy corresponded with Henry Salt, one of the leading Shelleyeans, who had published both *A Shelley Primer* in 1887 (Norman 272) and *Percy Bysshe Shelley: A Monograph* in 1888 (Dunstan 283). Salt was a fierce defender of Shelleyan values, criticizing Victorians

“for their lack of sympathy with Shelley—even when representing him” (Duerksen 25). While Salt and Hardy possessed a love of Shelley, they also shared a hatred of hunting and blood sports. Shelley’s ideas on animal rights and vegetarianism outlined in his essay on *A Vindication of Natural Diet* (1813), which connected the causes of “disease and crime” to meat eating and “unnatural diet” (9), inspired Salt to found the Humanitarian League in 1891. In this way, Salt applied Shelleyan thought to animal rights causes which chimed with Hardy’s own sympathies. In 1901, for example, Salt asked Hardy to be a signatory to his campaign for the discontinuation of the Royal Buckhounds, dogs bred specially to hunt deer (*Thomas Hardy’s Public Voice* 166). Further, at Salt’s request, Hardy composed an anti-blood sports article on the “immoral and unmanly” nature of “compassing the death of our weaker and simpler fellow creatures by cunning,” which was published in *Humanity: The Journal of the Humanitarian League* in August 1901 (167).

Hardy’s sense of empathy, or “loving-kindness,” towards all sentient creatures, is compatible with both a Darwinian and a Shelleyan stance. Hardy’s 1910 letter to Salt, who had by this time been installed as the Secretary of the Humanitarian League, particularly illustrates how his two evolutionary and Romantic influences overlapped. In this communication, recorded in *The Life*, Hardy explained to his fellow Shelleyan how altruism was compatible with Darwin’s theory:

Few people seem to perceive fully as yet that the most far-reaching consequence of the establishment of the common origin of all species, is ethical; that it logically involved a readjustment of altruistic morals by enlarging as a necessity of rightness the application of what has been called ‘The Golden Rule’ beyond the area of mere mankind to that of the whole animal kingdom. Possibly Darwin himself did not wholly perceive it, though he alluded to it. (376-377)

V

Hardy’s poetry of the natural world, therefore, draws upon both evolutionary and Romantic ideas. This is particularly evidenced in the poem, “The Wind Blew Words” (1917), published in *Poetical Works: Volume II*. In the first stanza Hardy’s speaker describes an envisioned scene or dream in which he encounters a personified wind. This in turn directs the speaker towards a swaying tree:

The wind blew words along the skies,
And these it blew to me
Through the wide dusk: ‘Lift up your eyes,
Behold this troubled tree,
Complaining as it sways and plies;
It is a limb of thee.
(1-6)

The poem owes a debt to Shelley, the first line of this stanza reminding us of “Ode to the West Wind” (1820). In Shelley’s poem the speaker envisages the possibility that his progressive words may be borne along on the wind’s breath. Shelley implores the wind, “Make me thy lyre, even as the forest is:” (57), before continuing, “Drive my dead thoughts over the universe / Like wither’d leaves to quicken a new birth!” (63-64). In Hardy’s poem, conversely, the speaker is the recipient—rather than the facilitator—of wind-borne thoughts, the “lyre” being the “troubled tree” which he is bidden to notice. In both poems, however, some form of social evolution is hoped for, in which humanity will become more civilized and empathetic.

This tree further reminds us of the famous passage from Darwin’s *Origin* in which he outlined his idea of the “Tree of Life” (172). In it he discussed how the similarities between species reveal their common descent, this being analogous to a tree:

The affinities of all of the beings of the same class have sometimes been represented by a great tree. I believe this simile largely speaks the truth. The green and budding twigs may represent existing species; and those produced during former years may represent the long succession of extinct species. (171)

The tree of life is represented in Hardy's poem as a "troubled" centre of conflict, or as Darwin referred to it, "the war of nature" (459) between existing and extinct species. The lengthening and shortening lines in "The Wind Blew Words" emphasizes not just the swaying of tree branches but implies the successful continuation and cessation of the different forms of life.

Hardy's poetic interpretation of Darwin's tree is highly sympathetic towards the losers of this natural competition, stressing the organic interconnections between species. In this regard the poem reflects an 1875 passage from Hardy's notes, published in *The Life*, in which he records sitting under a tree to which several insects are drawn, and being consoled by their presence:

I sit under a tree, and feel alone: I think of certain insects around me as magnified by the microscope: creatures like elephants, flying dragons, etc. And I feel I am by no means alone. (110)

Hardy imaginatively transforms these insects, enlarging them in size so that they can bring him the succor of companionship when he is lonesome. The passage also appears reminiscent of Darwin's influence, the tree here becoming the central fixture around which different creatures are realized by Hardy to be connected. "The Wind Blew Words" performs a similar function for Hardy's speaker, the natural lifeforms which surround the tree being signified in the second stanza as biologically connected:

'Yea, too, the creatures sheltering round—
Dumb figures, wild and tame,
Yea too, thy fellows who abound—

Either of speech the same
Or far and strange—black, dwarfed, and browned,
They are stuff of thy own frame.'
(7-12)

This sequence leads Hardy's speaker to understand that humankind is but part of an interconnected biological matrix, the many creatures, and "fellows" he sees being—the voice tells him—the "stuff of thy own frame."

At the same time, the speaker is made cognizant of the fact that humankind is perpetually engaged in slaughtering its fellow lifeforms. This again resembles Darwin's tree, where the higher branches thrive by outgrowing the competing ones. In the third and final stanza Hardy's speaker tells us:

I moved on in a surging awe
Of inarticulateness
At the pathetic Me I saw
In all his huge distress,
Making self-slaughter of the law
To kill, break, or suppress.
(13-18)

Here the speaker is dumbfounded by the realization that humankind's slaughter of other lifeforms is a form of self-murder. Hence, he can only stare "At the pathetic Me I saw, / In all his huge distress." The word "saw" here appears to perform an interesting triple function. While denoting the verb to look, 'saw' also appears to take the form of a phonetic joke, as when combined with "I," it is pronounced as eyesore. This compounds the speaker's sense of shame at viewing such a horror of 'self-slaughter.' The word "saw," of course, is also used as a synonym verb for cutting or amputating. The true grotesqueness of this sawing becomes particularly significant when we consider the word's placement in the bottom stanza, which can be seen to resemble the base of the tree. This signifies that the speaker, as a member

of humankind, is cutting the stem of a tree which also supports himself. And more horrifically, if we recall the language of the first stanza, sawing at that which is described as his own “limb.”

Hardy’s speaker, therefore, describes the actions of killing, breaking and suppression as “Making self-slaughter of the law.” The idea that killing and eating other creatures is akin to self-slaughter reflects Shelley’s argument in *A Vindication of Natural Diet* (1813) that such behavior is unnatural and indeed evil. Shelley, like Darwin and Hardy, employs the image of a tree as he outlines his views. Shelley’s tree, however, is drawn from the Bible as he writes:

The allegory of Adam and Eve eating of the tree of evil, and entailing upon their posterity the wrath of God, and the loss of everlasting life, admits of no other explanation, than the disease and crime that have flowed from unnatural diet. (9)

Hardy’s use of the term “self-slaughter of the law” more specifically connects to Shelley’s lines in “Part Eight” of *Queen Mab* (1813), in which his poetic speaker describes the fallen fate of humankind. We can here identify, for example, the same words “slaughter” and “law” which are used in Hardy’s verse. But Hardy’s poem also more generally draws upon the ideas expressed by Shelley in this passage:

He slays the lamb that looks him in the face,
And horribly devours his mangled flesh,
Which, still avenging nature's broken law,
Kindled all putrid humours in his frame,
All evil passions, and all vain belief,
Hatred, despair, and loathing in his mind,
The germs of misery, death, disease, and crime.
(VIII 212-18)

For Shelley, humankind’s decision to eat other lifeforms has resulted in all manner

of human ills and evils. These, Shelley tells us in *A Vindication of Natural Diet*, can only be remedied through eschewing a meat-eating lifestyle. In *Queen Mab*, moreover, Shelley imagines the way forward, describing a herbivorous lion who—in contrast to Tennyson’s nature “red in tooth and claw”—instead “now forgets to thirst for blood” (VIII 124) and lies contentedly alongside the lamb. Shelley’s speaker tells us:

Beside the dreadless kid; his claws are sheathed,
His teeth are harmless, custom’s force has made
His nature as the nature of a lamb
(VIII 126-128)

In “The Wind Blew Words” the implications of Darwin’s theory are addressed alongside the poetic and literary influence of Shelley. The line “stuff of thy own frame” in the second stanza establishes a Darwinian sense of biological connection between the speaker, humans and other species. This sense is accentuated when all three stanzas are individually perceived as tree-shaped, as the shorter bottom line of each can be seen as the base of the trunk. In the concluding stanza the final two lines threaten this connection, Hardy’s speaker lamenting a Darwinian competitive state in which common species are “Making self-slaughter of the law / To kill, break, or suppress.” The final effect is mixed, the poem being pessimistic in its perception of events and yet also sympathetic towards all forms of life. Hardy’s poem also implies a sense of altruistic progressiveness, especially if we read it in connection with Shelley’s compassionate influence, leading us to understand exactly what needs to be done to avoid this “Self-slaughter.”

VI

The influence of these interconnected Darwinian and Shelleyan ideas upon Hardy’s poetry are illustrated more hopefully in “Compassion: An Ode: In Celebration of the

Centenary of The Royal Society for the Prevention of Cruelty to Animals” (1925), published in *Poetical Works: Volume III*. The intention of the poem, originally composed on January 22, 1924, is—as is outlined in the subtitle—to celebrate the one hundred years anniversary of The Royal Society for the Prevention of Cruelty to Animals (R.S.P.C.A):

Backward among the dusky years
A lonesome lamp is seen arise,
Lit by a few fain pioneers
Before incredulous eyes.—
We read the legend that it lights:
“Wherefore beholds this land of storied rights
Mild creatures, despot-doomed, bewildered, plead
Their often hunger, thirst, pangs, imprisonment,
In deep dumb gaze more eloquent
Than tongues of widest heed?”

What was faint-written, read in a breath
In that year—ten times ten away—
A larger louder conscience saith
More sturdily to-day.—
But still those innocents are thralls
To throbless hearts, near, far, that hear no calls
Of honour towards their too-dependent frail,
And from Columbia Cape to Ind we see
How helplessness breeds tyranny
In power above assail.

Cries still are heard in secret nooks,
Till hushed with gag or slit or thud;
And hideous dens whereon none looks
Are sprayed with needless blood.
But here, in battings, patient, slow,
Much has been won—more, maybe, than we know—
And on we labour hopeful. “Ailino!”

A mighty voice calls: “But may the good prevail!”
And “Blessed are the merciful!”
Calls a yet mightier one.

In the first stanza, Hardy’s speaker describes, in imagery mirroring “The Wind Blew Words,” the condition of “Mild creatures, despot-doomed.” In revealing the sufferings of such animals he outlines the reason why an R.S.P.C.A organization is needed, while also articulating his hope that the human despots he describes will become more enlightened. Darwin had documented in the *Origin* that those who lost the evolutionary battle of life were as a branch that had atrophied and fallen off a tree (171-2). But he also described those who succeeded in the evolutionary struggle of life as the inheritors of a fortuitous and advantageous “divergence of character” (171). This Darwinian divergence of character, for Hardy, might evolve into more civilised and humane ways of thinking, in which people might en masse realise and respect the rights of all living creatures.

The altruistic implications of this were specifically referenced by Hardy, recorded in *The Life*, in his 1910 letter to Henry Salt (376-377). Further, the incremental increase of people with more altruistic character traits would, Hardy hoped, result in societal improvements. In his *Literary Notebooks: Volume I* Hardy copied out a quotation from Sir Leslie Stephen in which he gave the opinion that “Darwinism is as fruitful in its...bearing upon sociology as in its bearing upon natural history” (132). In “Compassion: An Ode,” Hardy’s poetic speaker celebrates the promising early evolution of a more enlightened human character trait, that of kindness and compassion. He relays how, “Backward among the dusky years / A lonesome lamp is seen arise.”

By the second stanza, Hardy’s speaker has traced the evolution of this organization to his own time, where it now abides “More sturdily to-day.” More hopefully, in the third stanza, Hardy’s speaker relays how it promises to endure and evolve far into the future. He tells how “Much has been won—more, maybe, than

we know—”, the use of hyphens helping to create the sensation of something hanging, unfinished, and indeed continuing into the future. This effect infers that those gains made by the R.S.P.C.A in the present may continue to increase and multiply in the future. In the following line, the word “Ailnon,” a term used in classical antiquity to mean woe or lamentation, is uttered by a mighty voice. This is juxtaposed by the word “hopeful,” which is used in tandem with “we,” thus attributing hope not to the heavens, or to classical gods, but to the realm of collective humanity.

Indeed, the lines “And on we labor hopeful” particularly reflect Hardy’s notion of “evolutionary meliorism,” as outlined in the earlier written “Apology” to *Late Lyrics and Earlier* (1922), published in *Poetical Works: Volume II* (319). For Hardy, the term “evolutionary meliorism” reflected his hopeful belief in the future modes of thought and behavior likely emanating from evolutionary processes, such as human kindness and sympathy. Thus, he paired evolution with the word meliorism, the latter term meaning that life could be made better through human toil and effort. For Hardy, therefore, compassion could possibly evolve and spread through humankind, or enlightened groups and individuals, striving to achieve such civilized values.

The sense of hope encountered in Hardy’s “Compassion: An Ode” draws inspiration from Shelley’s “Ode to a Skylark” (1820). Indeed, Hardy explicitly dedicated this own poem “Shelley’s Skylark” (1898), published in *Poetical Works: Volume I*, to this much earlier work, his speaker seeking to find and consecrate “The dust of the lark that Shelley heard, / And made immortal through times to be;” (5-6). What connects “Compassion: An Ode” and Shelley’s poem is the desire, or hope, for the evolution of human sympathies. The speaker of “Ode to a Skylark” describes the bird as:

Like a Poet hidden
In the light of thought,

Singing hymns unbidden,
Till the world is wrought
To sympathy with hopes and fears it heeded not:
(36-40)

Shelley’s bird stands as an analogy for himself as poet, inhabiting “a light of thought,” a description which anticipates Hardy’s lines “A lonesome lamp is seen arise,” regarding the beginnings of the R.S.P.C.A. Further, like Hardy’s poem, worldwide “sympathy” is the goal hoped for by Shelley’s speaker. Hardy’s poem concludes with a quotation from Matthew 5.7, a mighty voice calling “‘And ‘Blessed are the merciful!’” The mightier voice, however, which calls out the words “good,” “Blessed” and “merciful” does not appear to emanate from an omniscient source of power. Instead, it is likely the voice of the R.S.P.C.A. movement, which Hardy saw as a powerful example of such evolved and sympathetic human values.

VII

Several of Hardy’s poems demonstrate the influence of Charles Darwin’s *On the Origin of Species* (1859), humanity being represented as a biological outgrowth of the natural world. While poets such as Elizabeth Barrett, Matthew Arnold, Alfred Lord Tennyson, Robert Browning, and Herman Melville reacted with cautious misgivings, or indeed fear, towards different evolutionary ideas, Hardy’s poetic response to Darwinian evolution was more measured. Darwin documents the connections between all forms of life, and Hardy’s poetry creatively emphasizes this. He expresses his concern for the losers of evolutionary competition but also intimates the hope that more civilized and compassionate values will collectively emerge. Such poems which address Darwinian themes also draw upon the Romantic ideas and language of Percy Bysshe Shelley. Combining these evolutionary and Shelleyan influences, Hardy envisions humans as able, through the evolution of organized values which promote compassion, to express a more developed sense of

kinship and emotional sympathy with other species. Through his Shelleyan interpretation of evolutionary ideas, therefore, Hardy expresses his “harmony of view with Darwin”; illustrating his hope for the future evolution of a more civilized and sympathetic human society.

*Part of this essay was presented at the 65th annual meeting of the Thomas Hardy Society of Japan at Nagoya University on 29 October 2022

Works Cited

- Arnold, Matthew. *Matthew Arnold (The Oxford Authors)*. Edited by Miriam Allott and Robert H. Super, Oxford UP, 1986.
- Barrett, Elizabeth. *Aurora Leigh and Other Poems*. Edited by John Robert Glorney Bolton and Julia Bolton Holloway, Penguin, 1995.
- Beer, Gillian. *Darwin's Plots: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth-Century Fiction*. 3rd edition, Cambridge UP, 2009.
- Brooke, John Hedley. *Science and Religion: Some Historical Perspectives*. 2nd edition, Cambridge UP, 2014.
- Browning, Robert. *Robert Browning's Poetry: A Norton Critical Edition*. Edited by James F. Loucks and Andrew M. Stauffer, 2nd edition, W.W. Norton, 2007.
- Chambers, Robert. *Vestiges of the Natural History of Creation*. J Churchill, 1844. *Internet Archive*, <https://archive.org/details/vestigessofnatura00unse>.
- Coxon, Peter, W. “Hardy's ‘Loving-Kindness.’” *The Hardy Society Journal*, vol. 14, no. 2, 2018, pp. 56-60. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/48561870>
- Darwin, Charles. *On the Origin of Species by Means of Natural Selection, Or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life*. 3rd edition, Penguin, 1985.
- Duerksen, Roland A. *Shelleyan Ideas in Victorian Literature*. Mouton & Co, 1966.
- Dunstan, Angela. “The Shelley Society, Literary Lectures, and the Global Circulation of English Literature and Scholarly Practice.” *Modern Language Quarterly*, vol.75, no.2,

2014, pp.279-296. doi.org/10.1215/00267929-2416635

Gibson, James. *Thomas Hardy: Interviews and Recollections*. MacMillan, 1999.

Hardy, Thomas. *The Collected Letters of Thomas Hardy: Volume Two 1893-1901*. Edited by Richard Little Purdy and Michael Millgate, Oxford UP, 1980.

———. *The Collected Letters of Thomas Hardy: Volume Six 1920-1925*. Edited by Richard Little Purdy and Michael Millgate, Oxford UP, 1987.

———. *The Complete Poetical Works of Thomas Hardy. Volume I*. Edited by Samuel Hynes, Oxford Clarendon P, 1982.

———. *The Complete Poetical Works of Thomas Hardy. Volume II*. Edited by Samuel Hynes, Oxford Clarendon P, 1984.

———. *The Complete Poetical Works of Thomas Hardy. Volume III*. Edited by Samuel Hynes, Oxford Clarendon P, 1985.

———. *The Dynasts*. Macmillan, 1978.

———. *The Life and Work of Thomas Hardy*. Edited by Michael Millgate, 2nd edition, Macmillan, 1984, reprinted 1989.

———. *The Literary Notebooks of Thomas Hardy: Volume I*. Edited by Lennart A. Bjork, Macmillan, 1985.

———. *Thomas Hardy's Public Voice: The Essays, Speeches, and Miscellaneous Prose*. Edited by Michael Millgate, Oxford Clarendon P, 2001.

Holmes, John. *Darwin's Bards: British and American Poetry in the Age of Evolution*. Edinburgh UP, 2009, reprinted 2013.

Lamarck, Jean-Baptiste Pierre Antoine de Monet. *Zoological Philosophy: An Exposition with Regard to the Natural History of Animals*. Macmillan, 1914. *Internet Archive*, <https://archive.org/details/ZoologicalPhilosophy/page/n19/mode/2up>.

Melville, Herman. *Clarel: A Poem and Pilgrimage in the Holy Land. Vol II*. Russell & Russell, Inc., 1963.

Millgate, Michael. *Thomas Hardy: A Biography Revisited*. Oxford UP, 2004.

Moore, James, R. *The Post-Darwinian Controversies: A Study of the Protestant Struggle to*

- Come to Terms with Darwin in Great Britain and America 1870-1900*. 2nd edition, Cambridge UP, 1981.
- Norman, Sylva. *Flight of the Skylark: The Development of Shelley's Reputation*. The U of Oklahoma P, 1954.
- Pinion, F. B. *Thomas Hardy: Art and Thought*. Macmillan, 1977.
- Purton, Valerie. "Darwin, Tennyson and the Writing of The Holy Grail." *Darwin, Tennyson and Their Readers: Explorations in Victorian Literature and Science*. 2013, edited by Valerie Purton. Anthem Press, 2014, pp.49-63.
- Secord, James, A. *Victorian Sensation: The Extraordinary Publication, Reception, and Secret Authorship of Vestiges of the Natural History of Creation*. The U of Chicago P, 2000.
- Shakespeare, William. *The Oxford Shakespeare: The Complete Works*. Edited by Stanley Wells and Gary Taylor, 3rd edition, Oxford Clarendon P, 1998.
- Shelley, Percy Bysshe. *Shelley Poetical Works*. Edited by Thomas Hutchinson, 2nd edition, Oxford UP, 1988.
- . *A Vindication of Natural Diet*. Smith & Davy, 1813. *Internet Archive*, <https://archive.org/details/avindicationnat00conggoog/page/n10/mode/2up>
- Stafleu, Frans A. "Lamarck: The Birth of Biology." *Taxon*, vol. 20, no. 4, 1971, pp. 397-442. *JSTOR*, doi.org/10.2307/1218244.
- Stevenson, Lionel. *Darwin Among the Poets*. The U of Chicago P, 1932.
- Tennyson, Alfred. *In Memoriam A. H. H. Selected Poems*. Edited by Christopher Ricks, Penguin, 2007.
- . *Idylls of the King*. Edited by J.M. Gray, 2nd edition, Penguin, 1996.
- . *Selected Poems*. Edited by Christopher Ricks. Penguin Classics, 2007.
- West, Anna. *Thomas Hardy and Animals*. Cambridge UP, 2017.

小説家ハーディの終焉再考 ——ハーディとジェイムズ——

清 宮 倫 子

I『恋の霊』に描かれる性愛と仁愛

『恋の霊』(*The Well-Beloved*、以下 *WB* と略記。連載版は *The Pursuit of the Well-Beloved* というタイトルであるが *WB* と略記して連載版と断わる)はハーディの最後の小説である。ハーディを最後のヴィクトリア朝小説家とみなすと、この作品は最後のヴィクトリア朝小説ということになる。ここから様々な興味深い問題が派生してくる。この作品の後に、新しい小説作法が生まれてきたこと、さらにその新しい小説作法の中心にヘンリ・ジェイムズがいることが知られている。その変容の原因が何であるかという問題への考察は後回しにして、とりあえず、ハーディの小説の展開からみて、セクシュアリティの表現を問題にしなければならない。

「イマジネーションでさえ冷徹な環境の奴隷である」とは、ハーディがエッセイ「イギリス小説の率直さ」(“Candour in English Fiction” *PW* 125)の冒頭で述べた文句である。ハーディが表現したい何かを削除あるいは抑制しなければならなかったエピソードは、『テス』(*Tess of the d'Urbervilles*)の出版をめぐって彼がとらざるを得なかった方法と労苦に明らかである。大手出版社が特にクレームをつけたのは、〈セクシュアリティ——もちろん異性愛——の表現が横溢すぎる〉という点であった¹。大手出版社が無理解だったというわけではない。その背後にいる読者と、彼らを導いている批評家が問題なのである。読者の批判を予想できれば出版社が小説の出版をためらうのは当然であろう。そして、少なくとも19世紀においては、原稿を活字にしてもらえなければ、原稿は備忘録か私信か紙くずにすぎなかった。これは雑誌とともに歩んできた小説作品について回ってきた宿命であったのではなからう

か。

*WB*出版の23年前、ハーディは『狂乱の群れを離れて』(*Far From the Madding Crowd*、以下 *FFMC* と略記)を上梓して、小説家としての順調なスタートをきった。レズリー・スティーヴン(Stephen)の引きと後押しを得たことはつとに知られている。また彼がハーディにかなりのプレッシャーを掛けたことも想定内にある。「連載ものの上手い書き手」で当分は満足するということを書いたスティーヴンあての手紙が残っている。作品そのものにスティーヴンが手をいれたか、あるいは変更するようハーディに忠告したかは定かではないが、明らかに読者を意識しての修正・削除(bowdlerization)がほどこされたことが知られている。そのなかでも最も顕著な手直しは、とって付けたような結末であろう。つまり、バスシバとオウクの結婚——バスシバはトロイに魅せられて彼と結婚した結果、辛酸をなめ、最終的にオウクを夫として選ぶ。「性愛は湯気のようににはかない」から、男女間では性愛より友愛が大事なのだというこの教訓付き結末は、当時でさえ複数の批評家から、その歯切れの悪さを指摘されていた。ジェイムズは、まずこの作品は主題(subject)は簡単なのに作品の^{かさ}高が大きすぎると批判している(*CH* 28)。これは、後に彼が『悲劇の詩神』(*The Tragic Muse*)につけた序文で、サッカレーらの小説²を“large loose baggy monsters”と喩えたことを想起させる。次に人物批評に移り、オウクは優れた人物で良く描けているが、バスシバに“reality”がない。“vague”で“coarse”で“artificial”であるとしている(*CH* 31)。この批判が、バスシバがいろいろな経験を通して倫理的に向上しているようにはみえないばかりではなく、この作品の結末の不自然さに起因することは明らかであろう。

しかしながら、*FFMC*の面白さは、表面的には、ヴィクトリア朝小説の当時の読者に全面的に受け入れられるに違いない結末がつけられていながら、作品の深層にそれを覆すような流れがあることである。それはセクシュアリティというものではないだろうか。一瞬にしてトロイに心を奪われるバスシバの本能。バスシバに夢中になるボールドウッドの性欲。前者は教訓つき友

愛結婚で、後者は、彼がアブノーマルな人間だったとして決着をつけてあるが、それでもなお、ハーディ自身のセクシュアリティへの関心が払拭できないのである。その後、作品を重ねるごとに、その考察は深められている。ハーディの小説にセクシュアリティをみる批評・研究は、1936年に死後出版されたD・H・ロレンスの「トマス・ハーディ研究」から始まる。が、特筆すべきものとしてヒリス・ミラー（Miller）の『距離と欲望』（*Distance and Desire*）があり、1970年代以後のもろもろの文学理論のなかで特にフェミニズム批評がこれに拍車をかけたことは否めない。

さて、『ジュード』（*Jude the Obscure*）によって頂点に達した、ハーディのセクシュアリティへの興味は、連載版と一巻本で『ジュード』の出版をはさんだWBでは、極力抑制されたとされている。ハーディ自身が、連載版WBの原稿を渡したティロットソン社に、気難しい人々の好み逆らわない、大人も若者も安心して読める作品であることを保証するとの趣意書をつけている。が、雑誌「世界」（*World*）に載った、主人公ジョスリン・ピアストン（Pierston）のセクシュアリティを不適切なものとする批評に接し、作者としての自分の名声に傷がつくかもしれないと心配した記録も残されている（Wright 206-207）。なるほど、ハーディが序文で断っているように、ピアストンはアカデミーの会員でもある彫刻家で、女性美を追い求めてそれを彫刻にして表現する人であり、プラトンのアイデア——「存在のなかで望ましく、入手したいすべての典型でしかも精髓であるもの」（WB 110）——を追求するという設定である。しかしながら、そういうデザインのなかで語られる物語は、主人公ピアストンのセクシュアリティへの没入以外の何物でもない。

ピアストンは、ミラーのいうように視覚ばかりではなく、聴覚、触覚、嗅覚によっても性的に反応している。特に第2部のアヴィシー二世への没入は、本能そのものがむきだしになった感がある。彼は、無知で無教養な洗濯女にすぎない二世を追い求めて恍惚となる。彼女の身体の線や顔の造作を目で追い、その完璧な横顔に見惚れ、アヴィシー一世と同じ歯並びをしていることまで確認し、さらに話し声にうっとりする³。

... she would suddenly drop it[her voice]to a rich whisper of roguishness, when the slight rural monotony of its narrative speech disappeared, and soul and heart ... resounded. The charm lay in the intervals, using that word in its musical sense. She would say a few syllables in one note, and her sentence in a soft modulation upwards, then downwards, then into her own note again. The curve of sound was as artistic as any line of beauty ever struck by his pencil—as satisfying as the curves of her who was the World's Desire.(97)

さらに、冒頭で、マーシャ・ベンカムと嵐の中で身体を寄せ合ったとき、また彼女の濡れた衣服が暖炉の前で乾かされて立ち上る匂いなどに彼の身体が反応するところが示唆されており、暗示を読み込めば、彼の男性性の描写はジュードのそれを越えている。

しかしハーディは、ピアストンがアヴィシー二世に夢中になるのは、彼女の母であるアヴィシー一世との結婚を実現できなかったことを申し訳なく思う責任感のなせる業であるとの理由をつけ⁴、二世にも、その娘の三世にも金銭的援助と思いやりをかける様を描いている。すなわち、ピアストンを性的に感じやすいばかりでなく思いやり深い人物に造形（characterization）している。

たとえば、40歳も年下のアヴィシー三世との婚約にこぎつけたピアストンは、結婚式の前日、彼女に恋人と駆け落ちされて面目を失うばかりではなく、落胆する。そんな彼を慰めようと、三世を悪しざまにいう家政婦に対し、ピアストンは、自分の方に問題があったと認める。

Nobody would ever know the truth about him; *what* it was he had sought that had so eluded, tantalized, and escaped him; *what* it was that had led him such a dance, and had at last, as he believed just now in the freshness of his loss, been discovered in the girl who had left him. It was not the flesh; he had never knelt low to that. Not a woman in the world had been wrecked by him, though he had been impassioned by so many. Nobody would guess the further sentiment—the cordial loving-kindness—which had lain behind what had seemed to him the enraptured fulfilment of a pleasing destiny postponed for forty years. (下線筆者、202)

この「仁愛」(loving-kindness)と性欲の組みあわされた人物のタイプは、ジェードから引き継がれたものである⁵。それ以前のFFMC(1875)、『帰郷』(*The Return of the Native*, 1878)や『森林地の人びと』(*The Woodlanders*, 1887)においては、この2つの性質は組み合わせられてはおらず、仁愛を体現するオウクに対する性欲のトロイ、前者のヴェンに対する後者のワイルディーズ、前者のウィンターボーンに対する後者のフィッツピアーズといった対立によって描かれていた。このような2つのキャラクターの合体が、「人間性」というものへのハーディの観察から生み出されていることは明らかであろう。ハーディは、「愛」という概念を性欲から仁愛まで広げ⁶、ひとりの人間に閉じ込めている。この人物造形は、通常、性的な人間をエゴイストとして描くヴィクトリア朝小説には収まりにくいものである。

II ハーディとジェイムズの小説の登場人物とプロット

『テス』が出版された時、ハーディは色々な批評家からの賞賛と批判に曝^{さら}されたのであるが、そのなかで一番強烈なのは、スティーヴンソンにあてたジェイムズの手紙にある『テス』批判である⁷。

I grant you Hardy with all my heart. . . . I am meek and ashamed where the public clatter is deafening—so I bowed my head and let “Tess of the D.’s” pass. But oh yes, dear Louis, she is vile. The pretence of “sexuality” is only equalled by the absence of it, and the abomination of the language by the author’s reputation for style. There are indeed some pretty smells and sights and sounds. But you have better ones in Polynesia. (下線筆者、*The Letters of Henry James*, Vol. 1, 204-5)

テスは「下品」(vile)であると言っている。また、下線部の pretence とは、無いのに有るように見せるという意味で、テスのセクシュアリティは無いと同然であるとしている。テスは「快への欲求」(appetite for joy)によってエンジェルに惹かれ、過去をどうしても告白できないのだが、それは性愛とは違うとジェイムズは示唆している⁸。そうではなくて彼を所有したい、ある

いは彼に属したいという社会的な欲望なのだという彼の示唆は一考に値する。

ここで注意しなくてはいけないのは、ジェイムズのテス批判がハットン(R. Hutton)らの、基本的にキリスト教倫理に沿ったテス批判とは根本的に違うということである。ジェイムズは、テスが姦淫と殺人、さらに告白の回避など形式的キリスト教倫理から大きく逸脱しているととらえて、彼女は「下品」だ、と述べたわけではない。告白が出来ないという良心の問題を理性的に考察できない彼女の性質を嫌ったのである。

ジェイムズの作品を読むと、彼が何を言わんとしているかがよく分かる。たとえば、『ある貴婦人の肖像』(*The Portrait of a Lady*)をとりあげてみる。主人公イザベルは、叔母のタチェット夫人、従兄のラルフ、姉たちの反対を押しきって、地位や財力にめぐまれたウォーバートン卿やグッドウッドらの求婚を退けて、少女デイジーというこぶつき中年男性で地位も金もないオズモンドを夫に選ぶ。彼女は、恋愛感情だけに導かれてこの結婚を決めてはいない。この人物のものの考え方や物腰に洗練を感じたと説明されている。しかし、次第に彼の超俗性にみえたものが見せかけにすぎないことを発見する。イザベルが叔父から遺贈された多額な遺産をねらって、デイジーの生みの親である、オズモンドの愛人マール夫人が仕組んだ罠に彼女がはめられたというプロットが提示される。

作者ジェイムズは、彼の著作のニューヨーク版の序文のなかで、第42章「女主人公の徹夜の黙想」をこの小説の白眉とし、その理由として、この場面が「20もの出来事よりも、筋を先へと運ぶ」からだと言った。その場面とは、作品の後半で、イザベルを利用して自分の娘デイジーとウォーバートン卿の結婚を実現しようとする夫の、俗物性を吟味し、究明し、自分の取った行動について認識を深め、事態を分析し、己の陥った窮地を発見する場面であり、10頁になんなんとする長文で彼女の内面が描写されている部分である。一気に流れる彼女の思考が描写される。その流れは、よく見ると、行きつ戻りつしながら堂々巡りしている。読者はなかなか結論にたどり着かな

い思考のただなかに放り込まれる。「恐怖」(terrors) という彼女の心の雰囲気
気が実感される。

Such a resolution [to think that Warburton was not interested in her], however, brought her this evening but little peace, for her soul was haunted with terrors which crowded to the foreground of thought as quickly as a place was made for them. . . . It was not her fault—she had practised no deception; she had only admired and believed. She had taken all the first steps in the purest confidence, and then she had suddenly found the infinite vista of a multiplied life to be dark, narrow alley with a dead wall at the end. Instead of leading to the high places of happiness, from which the world would seem to lie below one, so that one could look down with a sense of exaltation and advantage, and judge and choose and pity, it led rather downward and earthward, into realms of restriction and depression. . . . She had effaced herself when he first knew her; she had made herself small, pretending there was less of her than there really was. It was because she had been under the extraordinary charm that he, on his side, had taken pains to put forth. He was not changed; he had not disguised himself, during the year of his courtship, any more than she. But she had seen only half his nature then, as one saw the disk of the moon when it was partly masked by the shadow of the earth. . . . (下線筆者、473-475)

一方、D・H・ロレンスは、「ハーディの小説の登場人物は不合理な行為をする。いつも唐突に立ち去ったり、思いがけないことをする」(*Phoenix* 410)と評した。なるほど、ハーディの初期の小説さえ、衝動的な登場人物にこと欠かない。しかし、後期の小説になると、それらの行為はプロットに影響を与え、重大な倫理的意味合いを持たざるをえなくなる。たとえば、経済的窮地に陥った家族を救うためアレックに戻ってゆくテス、フィロットソンと結婚し彼との同食に耐えられず窓から飛び出すシュエ、「大本営からの接続命令」にしたがってアラベラの計略に落ちるジュード。

自分の小説に「キャラクターの古くさい安定した自我を求めてはいけない。同素体の状態を通してのみ認知される自我の働きがあり、それを認知するためには根本的に普遍の要素の状態を知覚することが必要」とエドワード・

ガーネット(Garnett)に書き送ったのもD・H・ロレンスであった。彼はこのように自分の小説作法を説明した。同様に、ハーディも、「個性の違いは無視すること。このアイデアはWBと“Heredity”という短詩のなかに実現されることになった」(*Life* 217)と記した。小説におけるキャラクターの重要性を認識したE・M・フォースター(Forster)は、キャラクターを“flat”と“round”に分け、後者を高く評価した⁹。人物をその人らしく描く力量が、小説家の重要な資格とされてきた。ハーディのその技量は確かである。たとえば、エゴイストを描き出すにしても、短編小説『グリーブ家のバーバラ』(*Barbara of the House of Grebe*)のアップランドタワーズ卿のような冷酷なエゴイスト、『良心のために』(*For Conscience' Sake*)のミルボーンのような小心なエゴイスト、『テス』のエンジェルのような内省的エゴイスト、アレックのような性的エゴイストとよく描き分けられている。しかし、前述したように、後期の作品で主要人物をタイプ化するに至ったのは、キャラクターの描き分けでは描けない人間性を認識し始めたからに他ならない。

一方、キャラクターを描き分けながら、特定のキャラクターの心(mind)の中に入って、心理を描き、読者にプロットを想像させる方法を造り出したジェイムズは、ハーディの小説を特徴づけている「強引な」といわれるプロット¹⁰に含意される人物の衝動性を決して小説に許さなかった。「モーパッサン論」(1888)で彼はこう述べる。

The carnal side of man appears the most characteristic if you look at it a great deal; and you look at it a great deal if you do not look at the other, at the side by which he reacts against his weaknesses, his defeats. . . . (下線筆者、*HJFW* 548)

つまり、人の欲望や性欲は注目すればするほど大きく見え、人間の「弱さ」や「敗北」について抗うことが出来なくなるという。ジェイムズは、テスがエンジェルに真実を告白することが出来なかったのは「弱さ」であり「敗北」であると考えている。すなわち、衝動、欲望、性欲などの人間本来の本

能は、小説の主題としては不適切だとジェイムズは述べているのである。

ハーディとジェイムズの接点は、1879 年の出来事としてハーディの『伝記』(*The Life of Thomas Hardy*, *Life* と略記) に記されている。

...Rabelais Club ... as a declaration for virility in literature. Hardy was pressed to join. ... Henry James after a discussion was rejected for the lack of that quality.... (下線筆者、*Life* 132)

ハーディによれば、ウォルター・ベザント卿 (Sir Walter Besant) 率いる Rabelais Club の入会をジェイムズが審査の上 “virility in literature” の欠如を理由に断られたということである。この “virility” という語は女性を妊娠させる力、男性の生殖能力を意味している。また、ハーディは、1888 年に次のようにジェイムズを批判している。

Reading H. James's *Reverberator*, ... James's subjects are those one could be interested in at moments when there is nothing larger to think of. (下線筆者、*Life* 211)

「もっと大きなこと」とは何だろう。この文脈だと、セクシュアリティ以外に考えられないのではないか。

III 時代背景——進化論という言説

ハーディとジェイムズが活躍したヴィクトリア朝時代後期の知識人たちに最も影響力があったのは進化論といわれる言説で、ダーウィンの学説とスペンサー (Herbert Spencer) の思想が有力であった。ハーディはダーウィンの『種の起源』を拍手をもって迎えたことを *Life* に記しており、最も影響を受けた思想家のひとりであることを表明してはばからなかった。彼より三歳年下のジェイムズはダーウィンの影響をうけたという表明をしてはいない。が、彼も確実にダーウィンさらにスペンサーの進化論の言説のなかにあった。彼が兄の著名な心理学者ウィリアムに宛てた手紙に、ジョージ・エリオットの

家で、スペンサーに会って、自分と兄との関係を訊かれそうになったとか¹¹、ダーウィンやスペンサーを崇拝したレズリー・スティーンに会った話など、興味深いエピソードが数多く含まれている。また、ジェイムズは、エリオット論で、『ミドルマーチ』(*Middlemarch*) に、ダーウィンと T・H・ハクスレー (Huxley) のエコーが多過ぎると難色を示している。これらの事実からも、彼が進化論の言説の中にいたことがうかがえるのである。

ダーウィンは主著『種の起源』(1859) 出版の 12 年後 1871 年に『人間の由来』(*The Descent of Man*, 以下 *DM* と略記) を上梓した。人間を扱うのは、いまひとつ自信をもてなかったのであろう。前者と比較して後者にはスペンサーの著作への言及が多い。『人間の由来』は正確にいうと *The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex* といい、2 部に分かれ、第 1 部は “Descent of Man” というタイトルで人間が他の動物と連続しており、遺伝的形質は、他の生物同様、環境に適応した変異により生じること、第 2 部 “Sexual Selection” では、新たに「性選択」という概念を導入し、動物は、雄が雌を得て、「再生産」(reproduction) をするのがまず「生き残り」(survival) の原点であると認め、雄同士の闘争によって雄が進化してきたと論じている。

しかし、人間は群れをなして生活してゆくに従い、「社会的本能」(social instinct) が遺伝的形質となる。つまり、集団生活を円滑にするためには、たとえば、「共感」のような形質をもつものが生き残りに成功してゆくのだが¹²、そのような形質は遺伝し、「美德」(virtue) として、「自然選択」による本来の本能と同じくらい強くなって、利己心や性欲のような低次の「衝動」と葛藤する。しかし、文明が進むにつれてその葛藤は弱まり、いずれは「美德が勝利をうるであろう」という。*DM* の第 4 章「人間と下等動物の心的能力の比較」の結論の部分で、ダーウィンは次のようにまとめている。

Looking to future generations, there is no cause to fear that the social instincts will grow weaker, and we may expect that virtuous habits will grow stronger, becoming perhaps fixed by inheritance. In this case the struggle between our higher and lower impulses will be less severe, and virtue will be triumphant.

(下線筆者、DM 150)

さらに「社会的本能」は、「積極的知的能力」の助力があれば、「黄金律」に導かれると説いている。

... the social instincts ... with the aid of active intellectual powers and the effects of habit, naturally lead to the golden rule. (下線筆者、DM 151)

さらに第20章では、文明が「心的能力」(mental power)を発達させ、本来の本能を後退させているので、現代では「性選択」の本能は過去においてより弱くなっている。すなわち、女性も男性も、外見だけではなく、精神力、知力、財産、地位などによって相手を選ぶようになっていると付記している。つまり、現代は男女ともに本来の本能が後退している、と認めている。

ハーディがセクシュアリティにこだわったのは、これがヒトが生き残るための本来の遺伝的形質であると考えたからに他ならないが、一方で、ジェイムズはダーウィンがDMの第4章「人間と下等動物の心的能力の比較」で述べた「積極的知的能力」(active intellectual powers)にこだわった。考察するという心的能力である。ハーディはWBで、「婚前性交」(prenuptial union)などの原始的風習の残るスリンガーズ島を舞台にして、人間の本能を理解し描こうとした。前掲したピアストンに確認された「仁愛」はダーウィン言うところの「美德」として、低次の衝動が高次の美德との葛藤に負けたところを描いたものと理解できる。一方、ジェイムズは、ロンドンやローマなどの文明化された都市を舞台にして、社会的本能を描き、その進化に期待した。

進化論は人間をヒトとして動物の一種としてとらえた。こういうとらえ方は、従来のキャラクターの描きかたに変更を迫らずにはおかないだろう。キャラクターをタイプに変えたハーディの後期小説はそのような人間観の劇的変化によるものであるが、ハーディはさらに遺伝子の領域にまで突き進んで人間を理解しようとした。

ジョスリンの言によると、最初の「恋の霊」は、彼が9歳のとき、青い目

をした亜麻色の髪の8歳の少女のなかに現れたという。6ヶ月後には19歳の肌の色の比較的黒い、黒い目の褐色の髪の女性に移り住む。やがて17歳の頃見捨てられた若妻をかわきりに、「恋の霊」は続く2.3年間に様々な女性の中に9回訪れる。20歳の時にはアヴィシー一世に移り、次にはマーシャ・ベンカムの中に、さらにロンドンで様々な女性の中に現れたあげく、やがて父の死によってかなりの遺産を手にし、彫刻家としても成功したあとでジョスリンは、故郷の島が産み育てた二、三代のアヴィシーしか愛せない自分に気づくのである。それは、彼と彼女が同じ「土」(clay)で出来ているからであるという説明が与えられている。

He began to divine the truth. Avise, the departed one, though she had come short of inspiring a passion, had yet possessed a ground-quality absent from her rivals, without which it seemed that a fixed and full-rounded constancy to a woman could not flourish in him. Like his own, her family had been islanders for centuries—from Norman, Anglian, Roman, Balearic-British times. Hence in her nature, as in his, was some mysterious ingredient sucked from the isle; otherwise a racial instinct necessary to the absolute unison of a pair. (76)

また語り手は、三人のアヴィシーは「人の記憶を越えたほど古い同族結婚と婚前交渉の結果であり、この地の一人の男女を見たということは、本土からほとんど切り離された岩の島の全住人を見たということである」(161)とも語る。ハーディはこのようにして「遺伝」というコンセプトを取り入れている¹³。

IV 全知の語り手の後退

ダーウィニズムは神を殺したとよく言われる。しかし、ハーディ自身の、小説は「議論」(argument)ではなく「印象」(impression)である(『テス』の序文)との発言からも推察される通り、神不在感覚の考察は、ジョウエット(Benjamin Jowette)とかペイター(Walter Pater)などの神学者や哲学者に任せておいて、とりあえず小説家にとっての重要課題は、ヴィクトリア朝時代の

小説を支配していた「全知の語り手」の代わりになるものを探すことだった、とジリアン・ピア (Beer) は述べている (*Darwin's Plots* 149)。ジェイムズは小説家としての出発点からその問題に取り組んでいる。たとえば『ある貴婦人の肖像』のイザベルの心の中は読者が推測して知るのであって、登場人物からも語り手からも読み手は知らされない。ジェイムズは、この作品の「序文」で、小説は窓の沢山ある大きな家のようなもので、何処の窓からみても、人生の姿が違ってくると述べているのであるが、まさしくこの小説は、様々な視点が共存しつつ、補足し合っている。

ハーディは後期小説においてその問題に気づきはじめた。ミラーは、『距離と欲望』のなかで、主人公の欲望をそれまでは距離をとって語っていた語り手が、ハーディの最後の小説である *WB* では、一致するほど接近したために、ハーディはそれ以上小説を書けなくなったと論じ、この接近をハーディ小説の終焉の主要因に挙げている。なるほど、*WB* の語り手は、ほぼ全体を通して、主人公ピアストンの心の中の解説に腐心している。ジェイムズの語り手に接近しているといえる。

いわゆるヴィクトリア朝小説の変容、すなわち 19 世紀末から 20 世紀にかけての英国小説の変容についての研究は多いが¹⁴、そのなかで、語り手に焦点をあてたものに、ウェイン・ブース (Wayne Booth) の『フィクションの修辞学』(*The Rhetoric of Fiction*) がある。ブースは、そのなかでジェイムズの小説の「信頼できない」語り手について論じている。ミラーは、さらにその議論をすすめて、事実上 *WB* の語り手と作者を切り離れた (*FR* 170)。ミラーは、*WB* の 2 つの版の「有機的統一の明らかなでない」結末の違いに注目して、ハーディを高く評価したジョン・ファウルズ (John Fowles) の『フランス船副船長の女』(*The French Lieutenant's Woman*) も同様に読者に 3 つの異なる結末を提示して選択させていると指摘し、ここに、通常ひとつの安定した結末を用意したヴィクトリア朝小説作法を超えようとした作者の創作意識を認めている。

WB には 2 つの版があった。連載版と一巻本版であり、その 2 版は『ジュー

ド』の出版を挟んでいる。ハーディは、一巻本にまとめる際に、さまざまな改訂を行っているが、重要なのは、結末の変更である。連載版では、母親の願いを叶えるために不本意ながら、ジョスリン・ペアストン (Pearston) と結婚をしたアヴィシー三世が、恋人を忘れかねているのを見かねて、夫である主人公ペアストンは身を引いて二人を結びつけようと決心する。彼は、最初に結婚したまま行方不明になっていたマーシャを捜し出して、アヴィシー三世との結婚を無効にしようとするけれどもかなわず、自分を消してアヴィシー三世の恋人との結婚を実現させようと考え自殺を決意する。オールの無いボートを使って溺死しようと沖へ出るが、結局救出されてしまう。そこにマーシャが現れ、老醜を見せるという結末になっている。

森松健介は、テーマを曖昧にする 2 つの結末をハーディが意図していたのではなく、連載版は、一巻本を作り上げたとき事実上キャンセルされたとみている (森松 353)。その理由として、アヴィシー三世にとってペアストンとの結婚は彼女の意思に反しており、結婚制度によって妻が拘束されて苦しむのは、制度自体に問題があると彼が認識するところが連載版 *WB* に描かれるが、これは、『ジュード』のテーマと共通しているという。なるほど、ハーディは、この主要テーマを『ジュード』で、さらに掘りさげ、議論を含めながら広く社会のなかで描き、この制度の根本にあるキリスト教への懐疑を込めて扱っている。そのため一巻本の『恋の霊』では、社会制度としての結婚というテーマはほぼ払拭されて、女性に惹かれる主人公の性向を、社会的視野や議論を避けて扱っている。それは、一巻本の恋愛と結婚の扱いが『ジュード』と重複するのを避けたためだという。

しかし、ミラーは、小説の作者が結末を決めかねるのは以前からあったことで、たとえばエミリー・ブロンテの『嵐が丘』もそうであると指摘している。それは、主人公の評価を作者が逡巡するためで、*WB* の場合は、小説作品の外にある実人生のリアリティを書かなくても小説は成立するという 20 世紀の小説論を予知させるモダンな考えが背後にあるという。また、パトリシア・インガム (Patricia Ingham) は、フェミニズムの立場から、『ジュード』

と連載版と一卷本の *WB* はいずれもセクシュアリティをテーマにしているが、ハーディが、それを多方面から扱ったために、複数の結末が誕生した。

『フランス船副船長の女』の結末が“open”になっており、読者に選択させるのと違って、ハーディの場合は、それぞれ可能性としてすでに完結している結末なのだという。すなわち、読者に選択の自由を許していないという。

インガムが森松より広い視野に立って、鋭い指摘をしていることは明らかであるが、ミラーも含めて、彼らの議論にはヴィクトリア朝小説の最後尾に位置する作品としての *WB* の意味がやや軽視されているうらみがある。まず、読者層や出版、言説として表現されるイデオロギーなど小説を取り巻くコンテクストの変容、さらに新しい小説論がもたらした作品のテクスチャーの変容の2点の考察が必要なのではなかろうか。たとえば *FFMC* は、ミラーも認めるであろう典型的なひとつの結末をつけられたハーディ小説だが、前述したように、この作品の結末が読者への配慮から導き出されたとすれば、*WB* の一卷本の結末の、ピアストンとマーシャの「友愛」結婚は、ここに前例をみることができる。『恋の霊』の2つの結末は、ヴィクトリア朝小説作法を超えようとした作者の創作意識からでたものではなく、むしろ、ヴィクトリア朝時代の読者を意識して、プロの小説家としてのハーディが自家薬籠中のものとしていた技法(device)を使いこなした結果ではないだろうか？『帰郷』(*The Return of the Native*)の2つの結末も読者への付度なくして考えられない。また連載版 *WB* のブラックジョークのような結末も、短編『幻想的な女』(*An Imaginative Woman*)の結末で、己の想像癖のために異常な心理に陥って産褥で死ぬ妻が残した赤ん坊と、彼女があこがれた詩人の写真を見比べて、これは自分の子ではないとつぶやく夫の描写を彷彿させる。

さらに重要なのは、ジェイムズの『ある貴婦人の肖像』の結末が *WB* の結末とは質を異にしていることである。夫オズモンドの俗物性を見抜いた後、彼が嫌う従兄弟ラルフの臨終を見届けるためにローマからロンドン郊外へ単身出向いた彼女が、グッドウッドが激しく妻として彼女を求めてくるのを退け、牢獄としか思えない家に戻っていくのは、これ以上ない落ち着いた結

末といえる。イザベルは、自発的に決めたオズモンドとの結婚を制度として遵守しなくてはいけないと考えているのではない。彼女の今の考察が永久に続くことを、作者は示唆している。神が決断を下してくれない、予定調和のない非目的論的(non-teleological)な世界で、人間がいくら心を駆使して考えても結論を出すことはできない。

全知の語り手を最後まで捨てなかったハーディに対し、ジェイムズは全知の語り手から独立した語りによって小説を芸術に高めようとした。彼によると、芸術的センスと倫理的センスが近づく1点があるという。つまり、芸術作品の質はそれを作った人の心(mind)の質であり、これこそが小説芸術家のもつべき倫理的立場のすべてだと「小説の技法」(*The Art of Fiction*, 1884)で述べている(*HJEL* 63-64)。この考え方にハーディは首肯できなかったであろう。

この「小説の技法」は、前述したベザント卿の同名のエッセイに刺激を受けたジェイムズが反論したもので¹⁵、小説にはもっと自由が与えられるべきだとの論陣が張ってある。さらに、次のようにヴィクトリア朝小説家を批判した。

...the moral timidity of the usual English novelists.... He is apt to be extremely shy... and the sign of his work... is a cautious silence on certain subjects.... there is a traditional difference between... that which they see and that which they speak of. (下線筆者、*HJEL* 63)

ジェイムズは、イギリスの小説家は「倫理的にいつて小心」(moral timidity)であり「臆病」(shy)であり、ある種の主題に対して極端に沈黙を守るという。さらにイギリスの小説家は「人生の一部であると感じているものと、文学の中に入れるのを許容するものとの間にひらきがありすぎる」と述べている。つまり、思っていることと書いていることが違うと言っている¹⁶。

この批判はハーディの弱点に触れている。「イマジネーションでさえも環境の奴隷」なのだから、「上手い連載物の書き手」で満足しようとしたハー

ディ。それに飽き足らなくなって、『テス』出版に向けて超人的努力を自分に課したハーディ。ベザント卿の立場と彼の「小説の技術」が前提にしている、小説家をひとつの職業と考えるイギリス流の考え方に順応してきた自分自身を顧みて、ハーディは、小説家は何をすべきか、何ができるかという問題を再考せざるを得なくなったに違いない。彼は、『テス』の出版準備の時期に発表された前述の「英国小説の率直さ」(1890)のなかで、読者を分けることを、すなわち子供も含めた幅広い読者を想定していた雑誌を見直して、少なくとも大人向きの雑誌を特化すべきことを示唆しているが、このことの意味は大きい。

ハーディにとって小説はまだ揺籃期にある不完全な Art で、詩歌に劣るという。その Art さえも「科学プラス何か」(“The Science of Fiction” *PW* 134)と考えていた。そうしたハーディが、この最後の小説で芸術家を主人公にしたのは興味ぶかい。結局ピアストンは不完全な芸術家として終わるのであるが、語り手が、彼の「恋の霊」の追跡に伴走している。その語り手が、つねに心に留めているのはプラトンの芸術論なのである。

V プラトニズムと「恐怖」

まず「恋の霊」とは「プラトン派の哲学者にとっては決して新しくない霊妙な夢につけた名である」と、*WB* の序文でハーディは解説している。これは 1893 年出版されたペイターの『プラトンとプラトン哲学』を意識しての発言であろう。さらに、このようにも説明している。

Behind the mere pretty island-girl . . . is, in my eye, the Idea, in Platonic phraseology—the essence and epitome of all that is desirable in this existence. (110)

さらに、連載版においては単なる文明化されていない僻地であったスリンガーズ島は、一卷本では、前掲引用文にある通り、島民に古代ローマ人の遺伝子が残存すると設定されている。

プラトンの芸術論は、『饗宴』と『パイドロス』のなかで明らかにされている。主題はエロスの効用である。『饗宴』では、ディオティマという女性から聞いた話として、ソクラテスによって語られている。神霊(ダイモン)であるエロスは、人に美や善を欲求させる。さらに、それを所有し、そのなかで生産することを希求させる。生殖もその一例となる。この営みによって、あらゆるもの、生物ばかりではなく知識も再生産されて不滅となる。つまり、エロスの目的はあらゆる価値あるものを永遠不滅にさせることであるという。

「さて」と彼女[ディオティマ]は語っていった。「このことへと正しい進み方をする者は、未だ年若いうちに、まず手始めに美しい肉体に向かう必要があります。(中略)最初一つの肉体を恋い求め、ここで美しい言論を生み出さなければなりません。しかしそれに次いで、どの肉体における美も他の肉体における美と兄弟関係にあるということ、(中略)すべての肉体における美を同じ一つのものであること(中略)を理解しなければなりません。(中略)しかしその次には、魂のうちにある美を、肉体のうちにある美よりも貴重なものと見なし、そのために、たとえ肉体の花の輝きに乏しくても、魂の点で立派な者がいるならば、満足してその者を恋しその者のために心配し、(中略)人間の営みや掟に内在する美を眺めて、(中略)次には、もろもろの知識へと彼を導いて行かなくてはなりません。(中略)美の大海原に向かい(中略)、さて、いろいろの美を順序を追って正しく観ながら、恋の道をここまで教え導かれてきた者は、今やその恋の窮極目標に面して、突如として、本性驚嘆すべきある美を観得することでしょう」(『饗宴』95-96)

さらに、『パイドロス』のなかでソクラテスは次のように語る。すなわち、神霊が人に美を求めさせると人は狂気に陥る。そして、その結果、偉大なるものが生み出される。この世の最も偉大なるものは狂気を通して生み出され、正気はたいしたものを生み出さない。狂気は、神々から与えられる。そして恋という狂気こそ最高の幸いであるという。ピアストンがパイン・エイボン夫人を退けて、田舎の洗濯女にすぎないアヴィシー二世を求める自分に、「狂気」を感じる場面は『パイドロス』を想起させる。微少なヴァリエーション

を取りながら、再現される一貫した女性美を追求するところは、『饗宴』を暗示している。

ピアストンが生涯で最もすぐれた仕事をしたのは、マーシャと別れた後、アヴィシー二世と出会うまでの時期である。彼は、「絶えず湧き出てくる感情の泉を、彫刻の創造に注ぎ込んだ。(中略)めざましく成功し(中略)アカデミーの準会員になった」(49)。ダーウィニズムからのアプローチを推し進めているレヴァイン(George Levine)は、ピアストンは「意識」(consciousness)を通して自然界にないものを見ることによって創作している、すなわち「精神」(mind)の抑制された状態での創作であるから、従ってこれは「狂気」とされる、と読み解いている(Levine 86)。一方、スティール(Jeremy V. Steele)は、ピアストンの芸術家としての歩みをプラトンの芸術論に照らし合わせて追っている。そして、ピアストンがアヴィシー二世に魅了されるようになる直前、晚餐会席上で、アヴィシー一世の死を知り、周りの情景が一挙に視界から遠ざかる時に、彼は最もプラトニックラブに近づくという(209)。その後アヴィシー二世と出会ったピアストンは、一世の面影を求めて彼女への欲望に飲み込まれる。アヴィシー一世との外形的類似を求めてのことであるから、プラトニックラブのデザインのなかにあるが、二世への愛情のリアスティックな描写は、その愛が肉欲であることを露呈している。

スティールは、プラトンの「イデア」を人間がコントロールできないものとして、WBにおけるプラトニズムを、満たされない欲望のメタファーと捉えている(213)。しかし、語り手は性欲と芸術的創造の関係という問題に読者を誘いながら、そこを十分に語ってはいない。むしろ避けている。そして、「恋の霊」の表現から脱皮あるいは向上できない芸術家として終わるピアストンは、「才能がなくもない彫刻家」としてひっそりと芸術界から引退する、と語り手は語る。この結末は何を意味するのか。

何がピアストンを完璧な芸術家にしなかったか語り手は語らない。「プラトンの美学」でペイターは、「[プラトンは]芸術そのものにはそれ自体の完成以外に目的はない——『芸術のための芸術』——という近代的な観念を先

取りしている」(385)と述べた。一方、哲学者ならぬ小説家のハーディは、古代ギリシア時代とヴィクトリア朝時代の違いを了解し、「イマジネーションも環境の奴隷である」と考えていた。もともとキリスト教を知らなかったギリシア人と違って、キリスト教を知った上で、それ無しで生きると決意したハーディが、ジェイムズとともに感じた感情である「恐怖」が、プラトンの芸術論からみたピアストンの未完成を理解するヒントを提供しているように思われる。

『ある貴婦人の肖像』のイザベルの「恐怖」は、内的描写で語られていた心(mind)の雰囲気である。一方、ピアストンも幾度となくこの気分を味わっていることが語られている。「恋の霊」と彼が名付けた何か、彼を魅了し、彼が彫刻作品に表現しようとして追い求めた女性の魅力がある。この追跡のために、彼の体は歳をとっても意識は歳をとらない。自分はそのために狂気に陥ってしまったと感じる。ここにハーディが見たものは、20世紀に入ってから、D・H・ロレンスが見たものとは、大きく違っている。それをハーディは「彼は誓って恋を絶つ」(He Abjures Love)という短詩にしている。6つのスタンザで出来た詩であるが、以下の引用は、第5、6スタンザの一部である。彼は、恋を追いかけたために体験した「恐怖と荒廃」(fears and desolations)で気を失いかけたので恋を絶とうと決心する。

No more will now rate I
The common rare,
The midnight drizzle dew,
The gray hour golden
...

—I speak as one who plumbs
Life's dim profound
...
But—after love what comes?
A scene that lours,
A few and vacant hours,

And then, the Curtain.

(“Time’s Laughingstocks” *The Complete Poems of Thomas Hardy* 236-7)

同じ「恐怖」が *WB* では、次のように表現されている。

A sudden Sapphic terror of love would ever and anon come upon the sculptor, when his matured reflecting power would insist upon informing him of the fearful lapse from reasonableness that lay in this infatuation. It threw him into a sweat.... (下線筆者、95)

この恐怖感は、*WB* のテキスト全体に織り込まれている。イザベルとピアストンの「恐怖」は、ダーウィニズムが暴き出した認識論的 (epistemological) 世界観のなかで生きざるを得なくなった英米人が、ヴィクトリア朝時代に感じた心の雰囲気^そを端的に表した言葉ではないだろうか¹⁷。ハーディは「恐怖」を、ダーウィンと同様に重要な遺伝的形質とみて、「高級な意識であり、より深い洞察に基づいている」(*Life* 263)¹⁸ と記している。そして、『恋の霊』でそれを描き出した。一方、ジェイムズは、ダーウィンのいう「積極的知的能力」を信じ、フランス写実主義から多く学び、登場人物の心理を追うことによって、この感情を克服しようとした。

伝統を重んじるイギリス人ハーディは、ダーウィンの説いた人間の根源的な自然の本能に着目したが、キリスト教からも、創作する際の手本としての古典からも目を逸らせたことはなかった。とりわけプラトニズムは、ケンブリッジ大学がその保存につとめ、オクスフォード大学のペイターがそれをもって当時流行していた唯美主義に影響を与えていたので、ハーディが自分の立場をプラトニズムに関連させて知的読者たちに示唆したいと思ったと推測してもあながち見当外れではないだろう。小説家として、良く言うところの慎重な、ジェイムズに言わせると「倫理的に臆病な」ハーディのこのスタンスが、彼を最後のヴィクトリア朝小説家に押しとどめたのである。

註

* 本論は、日本ハーディ協会第 65 回大会 (2022 年 10 月 29 日、名古屋大学) おける、シンポジウム「ハーディと進化論——実りある研究にむけて」において、「ダーウィン『人間の由来』と小説家ハーディの終焉」というタイトルで発表した内容を手直したものである。また、本文の一部は、引用文献に載せてある拙論『『ある貴婦人の肖像』の遠慮する語り手」、さらに、拙書『進化論の文学——ハーディとダーウィン』と重なる部分がある。

1 連載版は、「性的に露骨」(improper explicitness) とか「欲情をそそる」(succulent) との理由で、*Tess* の出版がこじれて迷惑をかけたティロットソン会社にうめあわせとして提出されたものであった。

2 『三銃士』と『戦争と平和』と『ニューカム家の人びと』について批判した言葉。

3 ハーディの “In a Museum” という詩は、博物館で化石となった鳥を見て、前日聞いた音楽会でのアルトの歌声を思い出すというモチーフが使われている。人間の声帯は鳥の声帯と相同、つまり「共通起源説」によれば、起源は同じで、(歌) 声で異性を惹きつけるために進化してきたとダーウィンは論じている。

4 1894 年出版の短編集『人生の小さな皮肉』に収められた短編小説『良心のために』を参照。過去に子供をつくって捨てた女性への罪の意識に耐えかねて、人生の終盤になってから強引に結婚という決着を選んで、妻と娘に不信感と嫌悪感を抱かれ、破局する話。『恋の霊』の連載とほとんど同時期に書かれた。捨てた女性への良心の痛みへの対処のしかたに 2 通りある。ハーディは、エゴイストと利他的な人物に描き分けている。

5 ジュードは、「愛するものに喜びを与え、自分にも他人にも害をあたえない傾向」(inclinations which do me and nobody else any harm, and actually give pleasure to those I love best, *Jude* 278) に沿って生き、彼の「衝動——愛情——は悪徳といってよいほど強いものであった」(impulses—affections—vices... were too strong, *Jude* 278) と描かれる。

6 ハーディが、loving-kindness をもって自分の全作品を総括したことはよく知られている。詩集 *Late Lyrics and Earlier* には、Apology がつけられ、loving-kindness が発動され

れば、地球上のすべての生物の苦痛は最小限に抑制されるであろうと述べられている。ジュードのミミズを踏めない性格にも、いささか誇張されているとはいえ、ダーウィニズムの「共通起源説」が、「黄金律」(golden rule)を生物全体に拡張たと認めたハーディの発見が確認できる。

7 ハーディは後にジェイムズの『テス』批判を彼のスティーヴンソンに宛てた手紙のなかに読んで、「この二人の有徳の女どもは（中略）何という不見識だろう」（*The Personal Notebooks of Thomas Hardy* 236）と憤慨した。

8 Penny Boumelha は、これを、男性である語り手が、Tess という人物に女性というセクシュアリティを投入しているために起きているとして解説している。Boumelha はさらに、語り手は、『テス』あたりから、統一した視点や意見をもてなくなり、次第に分裂していくと論じている。*Thomas Hardy and Women* 参照。

9 E. M. Forster, *Aspects of the Novel* 参照。

10 E. M. Forster は、ハーディの小説の「登場人物はプロットの要求に盲従するように命じられているため（中略）行動 (action) が、『アンチゴネ』（中略）のように生きたものと感じられない」（*Aspects of the Novel* 101）と述べた。Stewart は、「しかけをほどこしたサイコロを振って作中人物をいためつけている」（*Essays and Studies* 19）と、ハーディ小説のプロットを批判した。ハーディの小説のプロットによく使われている coincidence について Levine は、宇宙の人間に対する “mindless indifference” の表現と理解できている (68)。

11 ウィリアム・ジェイムズのプラグマティズムは、スペンサーの「決定論」(determinism) を批判していた。

12 自然科学の用語としては、遺伝「形質」とは character の訳である。形態ばかりではなく、性質もこの語で表す。原始人も未開人も「共感」をもつ。功利主義の始祖といえるベンサムは、人間の行動の動機として「利己心」を考え、「最大多数の最大幸福」を唱えたが、ダーウィンはこれと自分の考えの違いを *DM* でハッキリ述べている。当時（現在でも）、倫理の分野では、功利主義と直観主義の対立が著しかったが、ダーウィンはどちらにも属していない。『良心のために』の冒頭に、この二派の対立を揶揄したような一文がある。

13 人間の性質を出身地と関連付けて理解するのは一般的に進化論の範囲内での認識であるが、それを遺伝子にまで掘り下げるところにハーディの特質がある。ハーディは、遺伝子を運ぶ人間を「乗り物」(vehicle) (*WB* 33, 97) と呼び、親の遺伝子をうけつぐ子を「写し」(daps, perfect copy, reproduction, edition) と呼んでいる。ウルトラダーウィニストとして、『利己的な遺伝子』で知られる Richard Dawkins は、人間の個体は DNA の一時的な乗り物であると言ったが、この着想をハーディは先取りしている。遺伝学は G・J・メンデルによって創始され、ダーウィンの自然選択説によって開発された。ダーウィンの自然選択説は J・B・ラマルクの獲得形質の遺伝説に反対する説であり、ワイスマン (August Weismann) によって支持された。ハーディの遺伝について注目すべき記録は 1890 年末、連載用『テス』が完成したところに発見される。ハーディはそのころ読んだ本——スウィフトやセルヴァンテスなど主に風刺作家のもの——のなかに Weismann の *Essays upon Heredity* を記している (*Life* 230)。これは 1883 年に出版されたオリジナルの翻訳本である。

14 Friedman の *The Turn of the Novel* は、20 世紀初頭に起きた小説の変容を、“closed” と “open” という概念で分け、ハーディ小説を扱っている。それによると、*FFMC* は典型的な “closed novel” で、後期の『テス』や『ジュード』は “open novel” に近づいている。*WB* は、論じていない。

15 ベザントの当該論文は、小説こそ、キリスト教が盤石でなくなった時代に倫理を扱える Art であるとの主張に貫かれ、若手の小説家を懇切丁寧に指導する立場に徹しており、社会における小説家の役割の認識を打ち出している。ハーディも小説論 “The Profitable Reading of Fiction” において、同様な役割認識を示している。一方、ジェイムズの「小説の技法」は、この点が希薄で、より小説の芸術性に注目している。

16 D・H・ロレンスは、ハーディ小説の登場人物たちについて、“There is a lack of sternness, there is a hesitating betwixt life and public opinion.” (*Phoenix* 440) と書いた。ジェイムズのこの批判と共通点がある。

17 認識論的世界観においてハーディとジェイムズは共通していた。1915 年のハーディの記録はそれを示唆している。“It is remarkable that a writer who has no grain of poetry, or humour, or spontaneity in his production, can be a good novelist. Meredith has some poetry,

and yet I can read James when I cannot look at Meredith.” (*Life* 170)

18 “Courage has been idealized; why not fear—which is a higher consciousness, and based on a deeper insight.” (*Life* 253) Beerはこの”fear”をダーウィンの*The Expression of Emotions*にある議論と関連付けて解釈している。“Finding a Scale for the Human: Plot and Writing in Hardy’s Novels.” *Darwin’s Plots*, Chap. 8.

引用文献

- Beer, Gillian. *Darwin’s Plots: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth-Century Fiction*. London: Routledge, 1983.
- Booth, Wayne. *The Rhetoric of Fiction*. Chicago: Chicago UP, 1961.
- Boumelha, Penny. *Thomas Hardy and Women: Sexual Ideology and Narrative Form*. Sussex: The Harvester Press, 1982.
- Cox, R. G., ed. *Thomas Hardy: The Critical Heritage*. London: Routledge & Kegan Paul, 1970. (*CH* と略記)
- Darwin, Charles. *The Descent of Man and Selection in Relation to Sex*. 1871. London: Penguin Books, 2004. (*DM* と略記)
- Forster, E.M. *Aspects of the Novel*. New York: Penguin Books, 1927.
- Friedman, Alan. *The Turn of the Novel*. New York: Oxford UP, 1966.
- Hardy, Thomas. *Far From the Madding Crowd*. London: Everyman’s Library, 1991.
- . *Jude the Obscure*. The New Wessex Edition. London: Macmillan, 1974.
- . *Tess of the d’Urbervilles*. The New Wessex Edition. London: Macmillan, 1974.
- . *The Complete Poems of Thomas Hardy*. The New Wessex Edition.

London: Macmillan, 1976.

- . “The Profitable Reading of Fiction.” *Thomas Hardy’s Personal Writings*.
- . “The Science of Fiction.” *Thomas Hardy’s Personal Writings*.
- . *The Well-Beloved*. The Greenwood Edition. London: Macmillan, 1964.
- . *The Well-Beloved with The Pursuit of the Well-Beloved*. London: Wordsworth Classics, 2000.
- Hardy, Florence Emily. *The Life of Thomas Hardy, 1840-1928*. London: Macmillan, 1970. (*Life* と略記)
- Ingham, Patricia. “Provisional Narratives: Hardy’s Final Trilogy.” *Alternative Hardy*. Ed. Lance St. John Butler. New York: St. Martin’s Press, 1989.
- James, Henry. “The Art of Fiction.” *Henry James: Essays on Literature; American Writers & English Writers*. Ed. Leon Edel. New York: The Library of America, 1984. (*HJEL* と略記)
- . “Guy de Maupassant.” *Henry James: French Writers*. Ed. Leon Edel. New York: The Library of America, 1984. (*HJFW* と略記)
- . *The Portrait of a Lady*. London: Penguin Classics, 1986.
- . *The Letters of Henry James*. Ed. Percy Lubbock. 2 vols. New York: Charles Scribner’s Sons, 1920.
- . *The Tragic Muse*. New Jersey: Augustus M. Kelley, 1976.
- Lawrence, D. H. “Study of Thomas Hardy.” *Phoenix*. New York: Viking, 1936. Rpt. in London: William Heinemann, 1961: 398-516.
- Levine, George. *Reading Thomas Hardy*. Cambridge: Cambridge UP, 2017.
- Miller, J. Hillis. *Thomas Hardy, Distance and Desire*. Cambridge[MA]: Harvard UP, 1970.
- . *Fiction and Repetition*. Oxford: Basil Blackwell, 1982. (*FR* と略記)

Orel, Harold, ed. *Thomas Hardy's Personal Writings*. London: Macmillan, 1967. (PW と略記)

Steele, Jeremy V. "Plato and the Love Goddess: Paganism in Two Versions of *The Well-Beloved*." *Thomas Hardy Reappraised*. Ed. Keith Wilson. Toronto: Toronto UP, 2006.

Stewart, J. L. "The Integrity of Hardy." *Essays and Studies*. Cambridge: Cambridge UP, 1948.

The Art of Fiction: Walter Besant and Henry James. globalgreyebooks.com, 2019.

The Personal Notebooks of Thomas Hardy. Ed. Richard H. Taylor. London: Macmillan, 1978.

Thomas Hardy's Personal Writings. Ed. Harold Orel. London: Macmillan, 1967.

Wright, T. R. *Hardy and His Readers*. London: Macmillan, 2003.

清宮倫子「『ある貴婦人の肖像』の遠慮する語り手」『日本女子大学英米文学研究』No. 27、1992。

———。『進化論の文学——ハーディとダーウィン』、南雲堂、2007。

プラトン全集五『饗宴・パイドロス』、鈴木照雄・藤沢令夫訳、岩波書店、1974。

「プラトンの美学」『ウォルター・ペイター全集2』、澤井勇訳、筑摩書房、2002。

森松健介『テキストたちの交響詩』、中央大学出版部、2006。

SYNOPSIS OF THE ARTICLES
WRITTEN IN JAPANESE

Cottages at the Turn of the Nineteenth Century:
Representation of Vernacular Architectures in Hardy's Novels,
mainly in *Tess of D'Urberville*

Kaz Oishi

This article locates the vernacular architectures, especially cottages, which appear in Hardy's *Tess of D'Urberville*, in the contemporary agricultural context and examines their significance through a comparison with some images of similar architectures in earlier novels, in particular, *Far from the Madding Crowd*. Trained as a stone mason and then as an architect, Hardy had a sharp eye on buildings and structures. Narrative comments on houses, churches, and Gothic architectures in his fiction, such as *Jude the Obscure*, have drawn frequent critical attention, and yet little scholarly interest has been shown to vernacular architectures, such as cottages, barns, huts, and farm houses, which form vital backgrounds in his Wessex novels.

It is true that cottages in Hardy's earlier novels including *Under the Greenwood Tree* embody peaceful domestic felicity in the rural countryside, suggesting its ideological lineage derived from the picturesque and romantic images of cottage formulated and developed from the 1780s onwards. In his later novels, however, the naively pastoral image of cottage tends to be either replaced by the bleak and precarious one whose occupants begin to be ousted by the landowner and are consequently forced to lead uncertain, impecunious itinerant lives, or sometimes

juxtaposed by the image of a lonely wandering figure who remains alienated from domestic happiness. Such is the image of Tess, who travels alone all the way to Flintcomb-Ash in the wintry rain and stands under the gable of a cottage at the entrance of the village, warming her hands and cheeks on the wall heated by the hearth inside the house. Here is a contrast between the pastoral image of cottage and the so-called counter-pastoral one, between the traditional model of village life and the modern, fluctuating pattern of displaced life. An idealized image of home in the Victorian era as a secure haven of domestic peace and moral well-being cannot be sustained any longer in Hardy's later novels.

The destabilised cottage life can be taken to reflect the real condition of agricultural labourers at the turn of the century. England as a whole experienced agricultural depression due to the increase of imported cheap grains after the abolition of the Corn Laws in 1846, and the increased import of meat from the 1870s initiated by the invention of refrigerator. Agricultural labourers began to abandon their land and cottage for higher wages in the industrial town. Certainly there were regional variations and Dorsetshire, the home region of the Wessex novels, did not see conspicuous population decline or wage drop. Yet South-West England in general suffered from huge wage and population decline. As Hardy recorded in *The Dorsetshire Labourers*, the situation extensively affected the village life in the whole area, whose structure began to disintegrate seriously when labourers opted for freer, yet therefore insecure life based on the annual contract with the landowners and as a result no cottage inhabitants could sustain communal customs and manners. Tess, insulated from the cottage fireside and surrounded by the bleak wintry landscape, thus emerges as a sign of the increasingly unstable, homeless, therefore hopeless rural life at the turn of the nineteenth century.

The Evolutionary Social Theory and Political Thought of Herbert Spencer

Yuh Fujita

Herbert Spencer, one of the most influential philosophers in the nineteenth century, has generally been remembered only as a founder of social Darwinism since his influence waned in the early twentieth century. However, his portrait as a typical social Darwinist has been revised by recent academic studies concerning his thought. This article aims to show its three facets: the early Spencer's thought; his social evolutionism; the later Spencer's political thought.

Firstly, his first notable book *Social Statics* (1851), based on the world view of evolutionary deism, aims to elucidate the norms in the ideal society, the final destination of inevitable progress, where the humanity becomes perfect, developing a theory of the minimal state supported both by the moral science and social evolutionism of the early Spencer.

Secondly, his social evolutionism consists of two different theories: an evolutionary theory of social organism, supporting his theory of history from "militancy" to "industrialism"; a biological evolutionary theory applying to society, which comprises both of the Lamarckian and Darwinian theory. These two theories of his social evolutionism, connected with his theory of cosmic evolution from "homogeneity" to "heterogeneity," support his later political thought.

Thirdly, the four essays that Spencer first published in *The Contemporary Review* and later as *The Man Versus the State* in 1884 presents his later political thought in the context of the controversy between Individualism and Collectivism. It can be interpreted as a kind of classical liberalism supported by evolutionary social theory.

Illuminating these three facets does not lead to summerizing the whole picture

of Spencer's system, but still help understand some features of his thought.

The End of the Novelist Hardy —Hardy and James—

Michiko Seimiya

The purpose of this article is to investigate the conflict between the Victorian and modern fiction in Hardy's last novel *The Well-Beloved* in terms of Darwin's *Descent of Man*, and to show why and how Victorian Hardy is superseded by modern Henry James.

First, I argue that sexuality in Hardy's fiction, usually controlled for Victorian respectable readers, is coming to the foreground in his later novels, and deforms the characters into natural impulsive types, breaking balance between character and plot. On the other hand, James excludes sexuality, together with impulse, from his novels as an inappropriate subject and explores major civilized characters' psychology in his novels instead of taking care of making interesting plots.

Second, I point out that their different approaches to fiction are caused by their reading of Darwin's *Descent of Man* in which he emphasizes not only the sexual instinct as the important impulse for the survival but "intellectual power" as hereditary character in civilized people in civilized society, and I argue that the former argument impressed Hardy and the latter James.

Then I discuss the most serious problem for the novelists at the end of Victorian period is how to find authoritative organizing principle which substitutes omniscient narrator because epistemological universe disclosed by Darwin makes it imperative. Hardy's narrator in *The Well-Beloved* comes close to the protagonist Pierston and

depicts his sexuality in detail, while James's narrator almost disappears from his stories.

In conclusion I argue that both Hardy and James struggle with “fear” or “terror” caused by Darwinian non-teleology, and try to find how to treat it fully in their fiction without omniscient narrator. Hardy's conventional Platonic design in which the omniscient narrator tells about Pierston's sexuality and judges him as an artist is inconsistent with the texture permeated by his sexuality in *The Well-Beloved*. Yet James's psychological narrator, though unreliable, takes distance from ontological point of view; he skillfully pursues the “intellectual power” in his characters, and supersedes Hardy.

[書評]

ホームページへの書評不掲載の事情

日本ハーディ協会会長 金子 幸男

日本ハーディ協会会員の皆様に昨年度本学会誌に掲載された書評についてご報告があります。

2022年9月刊行の『ハーディ研究』第48号（活字版）には、武田美保子氏（非協会員）によるご著書『身体と感情を読むイギリス小説』（春風社、2018年）について、会員執筆の書評が掲載されました。しかし、刊行後の編集委員会で、この書評には問題があり掲載は妥当ではないとする声があがり、掲載経過とその問題点、改善策が話し合われました。その後、10月末に開催の役員会にこの問題が上程され、議論の末、ホームページ掲載予定（2023年10月）の学会誌第48号に、この書評は不掲載とするという結論を得ました。出席した役員は当該書評が著者に対する敬意を欠いているという点で意見が一致し、また議論が粗雑であるという見解も共有されました。なお活字になった書評のホームページ掲載の可否は協会の権限となっております。

ここで本協会における、書評掲載に至る過程をご説明します。編集委員会（会長を含む）で書評本を選定後、書評者を推薦し、委員長より執筆を依頼します。書評は依頼ですので査読は行いません。形式と内容については書評者が責任を負い、編集委員長と会長が事実誤認や誹謗中傷の有無をチェックします。この二者による話し合いの後、最終的な掲載決定は会長が行います。

今回の書評については、現会長である金子と、当時の編集委員長の新妻昭彦氏が話し合い、明確な誹謗中傷の言葉や事実誤認は確認できませんでした。また標準的な型から離れたこの野心的な書評は、残念ながら対象本の理解を深めず、ときに持論の展開を中心におき、高い評価を与えることはできませんでした。しかし、これが執筆者の意図的なスタイルであろうと好意的に解

釈しました。そして何よりも依頼原稿である書評は執筆者に形式、内容とも一任するという暗黙の申し合わせがあり、難しい判断ではありましたが、会長である私が最終的に掲載を許可した次第です。以上が、当該書評が学会誌に掲載されるに至った経緯です。

この書評の掲載により、武田美保子先生のご著書の正当な理解と評価を阻んでしまった可能性があることを危惧しております。また日本ハーディ協会会員の皆様には望ましい書評の姿について誤解を与えたかもしれません。掲載責任者である会長として今回の件を重く受け止め、学会誌編集委員会とも協力して再発防止策を講じるつもりです。ただ判断の難しい書評は編集委員全員が読むという程度の改善策はすでに決めました。協会員の皆様の活発な議論の場として、より質の高い学会誌を目ざし、会長、編集委員ともども尽力して参ります。皆様方のご協力を引き続きお願いいたします。

2023年8月5日

日本ハーディ協会会則

1. 本会は日本ハーディ協会（The Thomas Hardy Society of Japan）と称する。
2. 本会はトマス・ハーディ研究の促進、内外の研究者相互の連絡をはかることを目的とする。
3. 本会につぎの役員をおく。
(1) 会長 1 名 (2) 顧問若干名 (3) 幹事（各種委員長及び会計）若干名 (4) 運営委員 (5) 会計監査
4. 会長および顧問は運営委員会が選出し、総会の承認を受ける。運営委員は会員の意志に基づいて選出されるものとする。運営委員会は実務執行上の幹事を互選し、総会の承認を受ける。会長および顧問は職務上運営委員となる。役員の任期は 2 年とし、重任を妨げない。ただし、顧問の任期は特に定めない。
5. 幹事は会長をたすけて会務を行う。
6. 本会はつぎの事業を行う。
(1) 毎年 1 回大会の開催 (2) 研究発表会・講演会の開催
(3) 研究業績の刊行 (4) 会誌・会報の発行
7. 本会の経費は会費その他の収入で支弁する。
8. 本会の会費は年額 4000 円（学生は 1000 円）とし、維持会費は一口につき 1000 円とする。
9. 本会に入会を希望する者は申込書に会費をそえて申し込まなければならない。
10. 本会は支部をおくことができる。その運営は本会事務局に連絡しなければならない。
11. 本会則の改変は運営委員会の議をへて総会の決定による。

附則 1. 本会の事務局は当分の間近畿大学におく。

2. 本会の会員は会誌・会報の配布を受ける。

（2020 年 10 月改正）

編集委員

福原 俊平	糸多 郁子
金子 幸男	風間 末起子
宮崎 隆義	上原 早苗 (委員長)

ハーディ研究

日本ハーディ協会会報第 49 号

発行者 金子 幸男

印刷所 中央大学生生活協同組合

2023 年 9 月 10 日 印刷

2023 年 9 月 15 日 発行

日本ハーディ協会

〒 577-8502 東大阪市小若江 3-4-1

近畿大学経営学部 高橋路子研究室内

